

国領川河川改修に伴う

# 国領遺跡 発掘調査報告書

(蓮町・井森杉・石風呂地区の調査)

1991

兵庫県教育委員会

## 例 言

1. 本書は、兵庫県水上郡春日町河領<sup>ウツノボ かつひつ ことりやま しのぶの</sup>字石風呂<sup>いし風呂</sup>・蓮町<sup>はすな</sup>・井森杉<sup>いのもりぎ</sup>に所在する国領<sup>くにのり</sup>遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は一級河川国領川河川改修工事に先立ち、昭和61年～62年かけて兵庫県教育委員会が実施した。
3. 発掘調査の期間および担当者は下記のとおりである。

確認調査 昭和61年8月  
技術職員 別府洋二・久保弘幸

確認・全面調査（石風呂・蓮町Ⅰ地区） 昭和61年10～11月  
技術職員 村上泰樹・市橋重喜

確認・全面調査（蓮町Ⅱ・井森杉地区） 昭和62年5～6月  
技術職員 村上泰樹・久保弘幸
4. 本書の執筆分担は本文目次に示している。自然科学的分析の依頼原稿のうち火山灰分析、サヌカイト原産地分析、鉄滓分析の原稿については、紙面の都合で各執筆者の了解を得て、一部割愛し編集した。この点各執筆者の方々に深くお詫びするとともに、その責任は全て編集者が負う。
5. 本書の編集は村上・久保の両名が担当し、村上が総括した。また編集にあたっては古谷章子の援助を受けた。編集に際しては、藤田 淳、三原慎吾の協力を得た。
6. 図版に取めた写真の内、遺構は各調査担当者が撮影し、遺物は柳吉田カメラに撮影を委託した。
7. 本書に掲載した遺跡分布図は、建設省国土地理院発行の5万分の1「福知山・篠山」地形図を使用した。
8. 調査で使用した標高は、日本道路公団が設定したB.M204（TP 117.491 m）を使用した。また本書で用いた方位は磁北である。座標北は磁北からN 73°0' E（昭和57年現在）である。
9. 発掘調査・整理にあたっては、下記の諸氏の御指導・御助力をいただいた。芦田岩男・青木哲哉・鎌木義昌・栗島義明・小林博昭・白石 純・松沢亜生・松藤和人・安田裕司・山口卓也
10. 本文中の挿図のうち、縄文時代草創期の遺物分布図は、朝コンピューターシステム製の遺跡調査システム「SITE」を使用して作成した。

# 本文目次

I 歴史的環境 .....	1 (三原)
II 調査に至る経緯	
1 調査に至る経緯 .....	3 (村上)
2 整理調査の経過 .....	3 (村上)
III 微地形と層序	
1 遺跡周辺の微地形 .....	5 (久保)
2 全面調査区の層序 .....	5 (久保)
IV 確認調査の成果	
1 第1次確認調査 .....	9 (村上)
2 第2次確認調査 .....	9 (村上)
3 第3次確認調査 .....	11 (村上)
V 縄文時代草創期文化層の調査	
1 概要 .....	13 (久保)
2 遺構 .....	13 (久保)
3 遺物 .....	39 (三原)
4 小結 .....	66 (久保・三原)
VI 中世遺構面の調査	
1 概要 .....	71 (村上)
2 遺構 .....	71 (村上)
3 遺物 .....	92 (村上)
4 小結 .....	101 (村上)
VII 自然科学的分析	
1 回領遺跡における土壌中火山灰抽出分析 .....	104 (檀原)
2 磁気分析による炉址推定 .....	106 (森永)
3 回領遺跡のサヌカイト原産地分析 .....	115 (薫科)
4 回領遺跡出土鉄滓と鍛造製片の金属学的調査 .....	117 (大澤)
VIII 結語 .....	119 (久保・村上)

英文目次・英文サマリー

## 挿 図 目 次

Fig. 1 遺跡の位置と周辺の遺跡…………… 2	Fig. 36 国領遺跡出土石器 12 …………… 55
Fig. 2 調査区周辺の微地形等高線図…………… 6	Fig. 37 国領遺跡出土石器 13 …………… 56
Fig. 3 井森杉地区層序パネルダイアグラム 7	Fig. 38 国領遺跡出土石器 14 …………… 57
Fig. 4 井森杉地区深掘断面図…………… 8	Fig. 39 国領遺跡出土石器 15 …………… 58
Fig. 5 蓮町地区下層確認調査地層柱状図… 8	Fig. 40 出土石器属性分析凡例…………… 59
Fig. 6 確認調査坪配置図…………… 10	Fig. 41 尖頭器調整切片打面・末端形状分布 グラフ…………… 59
Fig. 7 確認調査柱状土層図…………… 11	Fig. 42 ブロック別尖頭器調整切片長幅比… 60
Fig. 8 第 2 次確認調査坪 22 平面図 …………… 12	Fig. 43 尖頭器調整切片背面構成ヒストグラム …………… 60
Fig. 9 石器平面・垂直分布図…………… 14	Fig. 44 国領遺跡出土石器 16 …………… 61
Fig. 10 石器出土傾向面図…………… 15	Fig. 45 接合資料打点移動図…………… 62
Fig. 11 器種別分布図 1 …………… 17	Fig. 46 国領遺跡出土石器 17 …………… 63
Fig. 12 器種別分布図 2 …………… 18	Fig. 47 国領遺跡出土石器 18 …………… 64
Fig. 13 器種別分布図 3 …………… 19	Fig. 48 国領遺跡出土石器 19 …………… 65
Fig. 14 配石分布図…………… 22	Fig. 49 有舌尖頭器・尖頭器未製品長幅比… 68
Fig. 15 配石平面図…………… 23	Fig. 50 石風呂地区遺構配置図…………… 72
Fig. 16 土坑平面図…………… 25	Fig. 51 蓮町 I 地区遺構配置図…………… 73
Fig. 17 炉址の位置…………… 27	Fig. 52 旧河道 2 平面図…………… 74
Fig. 18 母岩別資料分布図 1 …………… 32	Fig. 53 SD02 および周辺の柱穴群 …………… 75
Fig. 19 母岩別資料分布図 2 …………… 33	Fig. 54 蓮町 II 地区遺構配置図…………… 77
Fig. 20 母岩別資料分布図 3 …………… 34	Fig. 55 旧河道 3 土層断面図…………… 78
Fig. 21 母岩別資料分布図 4 …………… 35	Fig. 56 蓮町 II 地区 SB01 平面図…………… 79
Fig. 22 母岩別資料分布図 5 …………… 36	Fig. 57 SK01 平面図 …………… 80
Fig. 23 サヌカイト分布図…………… 37	Fig. 58 SK02 平面図 …………… 81
Fig. 24 水洗選別資料出土状況…………… 38	Fig. 59 SK03 平面図 …………… 82
Fig. 25 国領遺跡出土石器 1 …………… 40	Fig. 60 SK04 平面図 …………… 82
Fig. 26 国領遺跡出土石器 2 …………… 41	Fig. 61 SK05 平面図 …………… 83
Fig. 27 国領遺跡出土石器 3 …………… 42	Fig. 62 SK06 平面図 …………… 83
Fig. 28 国領遺跡出土石器 4 …………… 44	Fig. 63 SK07 平面図 …………… 84
Fig. 29 国領遺跡出土石器 5 …………… 45	Fig. 64 井森杉地区中世遺構配置図…………… 85
Fig. 30 国領遺跡出土石器 6 …………… 46	Fig. 65 SB03 平面図 …………… 86
Fig. 31 国領遺跡出土石器 7 …………… 48	Fig. 66 SB04～SB08 平面図 …………… 87
Fig. 32 国領遺跡出土石器 8 …………… 50	Fig. 67 SB04～SB07 立面図 …………… 88
Fig. 33 国領遺跡出土石器 9 …………… 51	Fig. 68 SK08～SK21 平面図 …………… 90
Fig. 34 国領遺跡出土石器 10 …………… 53	
Fig. 35 国領遺跡出土石器 11 …………… 54	

Fig. 69	SK22~SK24 平面図	91			
Fig. 70	SX01 平面図	92	Fig. 84	国領遺跡B-1-III	110
Fig. 71	SX02 平面図	92		グリットサンプリングポイント	111
Fig. 72	確認調査・石風呂地区出土土器	93	Fig. 85	国領遺跡B-1-III	
Fig. 73	蓮町I地区出土土器	93		NRM INT. E-4 A/m	111
Fig. 74	蓮町II地区出土土器	95	Fig. 86	国領遺跡B-1-III	
Fig. 75	井森杉地区出土土器1	97		INT. RAT. (10 mT/NRM) %	112
Fig. 76	井森杉地区出土土器2	99	Fig. 87	国領遺跡B-1-III	
Fig. 77	井森杉地区出土土器	100		DEAMG. (10 mT) INT. E-4 A/m	
Fig. 78	試料採取地点土層模式図および分析結果	105	Fig. 88	国領遺跡B-1-IV	
Fig. 79	NRM 強度で規格化した段階交流消磁実験による磁化強度の変化	107		グリットサンプリングポイント	113
Fig. 80	国領遺跡A-1-III		Fig. 89	国領遺跡B-1-IV	
	グリットサンプリングポイント	109		NRM INT. E-4 A/m	113
Fig. 81	国領遺跡A-1-III		Fig. 90	国領遺跡B-1-IV	
	NRM INT. E-4 A/m	109		DEMAG. (10 mT) INT. E-4 A/m	114
Fig. 82	国領遺跡A-1-III		Fig. 91	国領遺跡B-1-IV	
	INT. RAT. (10 mT/NRM) %	110		INT. RAT. (10 mT/NRM) %	114
Fig. 83	国領遺跡A-1-III		Fig. 92	縄文時代草創期の空間利用想定図	119
	DEMAG. (10 mT) INT. E-4 A/m				

## 表 目 次

Tab. 1	ブロック別石器組成表	16	Tab. 9	井森杉地区C-1-IV	
Tab. 2	配石構成礫重量分布	24		グリット SK-104 埋土柱状サンプル	
Tab. 3	土坑出土遺物組成表	26		分析結果	104
Tab. 4	母岩別資料一覧表1	29	Tab. 10	国領遺跡出土のサヌカイト製石器・	
Tab. 5	母岩別資料一覧表2	30		石片分析結果	115
Tab. 6-1	母岩別資料一覧表3	31	Tab. 11	国領遺跡出土のサヌカイト製石器・	
Tab. 6-2	サヌカイト一覧表	31		石片の原材産地推定結果	116
Tab. 7	出土石器観察表	70	Tab. 12	供試材の履歴と調査項目(国領遺跡)	
Tab. 8	井森杉地区C-2-I				118
	グリット西壁柱状サンプル分析結果		Tab. 13	化学組成	118
		104			

## 図 版 目 次

- |   |  |
|---|--|
| <p>PL. 1 縄文時代草創期の遺構</p> <p>1) 調査地遺景</p> <p>2) SK-104 完掘状況 (東から)</p>   | <p>1) 蓮町 I 地区全景 (南から)</p> <p>2) SD02 近景 (南西から)</p> <p>3) 旧河道 2 土層断面 (西から)</p>  |
| <p>PL. 2 縄文時代草創期の石器</p>   | <p>4) SD01 近景 (南から)</p>  |
| <p>PL. 3 縄文時代草創期の遺構 1</p> <p>1) 土層断面 (B-2-II グリッド北壁)</p> <p>2) ブロック 2 北半尖頭器未製品集中部 (南から)</p>   | <p>PL. 15 中世蓮町 II 地区遺構</p> <p>1) 蓮町 II 地区全景 (北から)</p> <p>2) SK02~05 (北から)・旧河道 3 検出状況 (北から)</p> <p>3) SK01~05・旧河道 3 調査後 (北から)</p> <p>4) SK02・03 近景 (南から)</p> <p>5) SK04 近景 (南から)</p>                                    |
| <p>PL. 4 縄文時代草創期の遺構 2</p> <p>1) SK-101 検出状況 (南から)</p> <p>2) SK-101 完掘状況</p> <p>3) SK-105 断面 (北から)</p> <p>4) SK-102 断面 (南から)</p> <p>5) SK-104 検出状況 (東から)</p> <p>6) SK-104 断面 (南から)</p> | <p>PL. 16 中世蓮町 II・井森杉地区遺構</p> <p>1) SK01 (鍛冶炉) (西から)</p> <p>2) 同完掘状況 (西から)</p> <p>3) SK05 検出状況 (南から)</p> <p>4) SB01 検出状況 (東から)</p> <p>5) 井森杉地区中世面全景 (南から)</p>  |
| <p>PL. 5 縄文時代草創期の遺構 3</p> <p>1) ブロック 1 (西から)</p> <p>2) ブロック 2・3・4 (西から)</p>   | <p>PL. 17 中世井森杉地区遺構</p> <p>1) SK17 (北東から)</p> <p>2) SX01 (北から)</p> <p>3) SB04~08 (西から)</p> <p>4) SB04・P20 (北東から)</p> <p>5) SK23・24 (南から)</p> <p>6) 掘立柱建物址群 (北から)</p> <p>7) SB03・P5 (北から)</p> <p>8) SB04・P24 (北西から)</p> |
| <p>PL. 6 縄文時代草創期の遺構 4</p> <p>1) ブロック 1 南西部配石 a (南から)</p> <p>2) SK-103 (西から)</p>   | <p>PL. 18 中世蓮町 I・II 地区出土土器</p> <p>PL. 19 中世蓮町 II・井森杉地区出土土器</p> <p>PL. 20 中世井森杉地区出土土器</p> <p>PL. 21 中世井森杉地区出土土器</p>   |
| <p>PL. 7 国領遺跡出土石器 1</p> <p>PL. 8 国領遺跡出土石器 2</p> <p>PL. 9 国領遺跡出土石器 3</p> <p>PL. 10 国領遺跡出土石器 4</p> <p>PL. 11 国領遺跡出土石器 5</p> <p>PL. 12 国領遺跡出土石器 6</p>                                    |  |
| <p>PL. 13 中世石風呂地区遺構</p> <p>1) 石風呂地区全景 (南から)</p> <p>2) 石風呂地区検出柱穴群 (北から)</p>  |  |
| <p>PL. 14 中世蓮町 I 地区遺構</p>   |  |

## I 歴史的環境

近年の埋蔵文化財の発掘調査により、春日町の歴史も徐々に明らかとなりつつある。本章では、これら近年の発掘調査の成果も盛り込み縄文時代および中世を中心として春日町とその周辺の歴史を振り返りたいと思う。

〔旧石器時代〕

七日市遺跡がある。遺跡はAT火山灰層の下層より石器ブロック・礫群といった遺構のほか、チャートを主な石材とする5,000点以上の石器が、3時期の文化層を持って出土している。出土した石器はナイフ形石器・小型部分加工石器・スクレイパー等のほか、第2文化層より刃磨製石斧とこの製作に深い関連を持つと思われる砥石が出土していることが注目される。このほか丹波地方ではAT火山灰層を挟んで2つの文化層をもつ板井・寺ヶ谷遺跡や、西木ノ部遺跡が知られている。

〔縄文時代〕

草創期の遺物は、前述の七日市遺跡よりチャート製の有舌尖頭器が出土しているほかは、草創期の遺物が出土・採集されている遺跡は見当たらない。近隣の福知山市では、武者ヶ谷遺跡から線紋文系の尖底深鉢土器が出土している。近畿地方では、当該期の土器・土器群の様相について不明な点が多く、武者ヶ谷の出土資料は重要である。また、隣接する篠山盆地では藤岡山遺跡が知られる。同遺跡では、黒色火山灰層中より緑色チャート製の尖頭器・サヌカイト製の削器等が出土している。後期では、多利遺跡群小向地区で完形の粗製深鉢土器が出土し、また水上町鴨内地区で後期の土器破片と共に礫石錘等が出土しており、この地域の縄文時代の資料も蓄積されつつある。

〔弥生・古墳時代〕

竹田川右岸の野々間遺跡で銅鐸が2例発見された。その母村と見られるのが対岸の七日市遺跡で、弥生時代前期から古墳時代にかけての住居跡・周溝墓などの遺構が多数検出された。当時の拠点集落であったと考えられている。このほか当時の日本海地方と瀬戸内地方との交流を考える上で興味深い銅剣形石剣が採集された野村遺跡などが所在する。

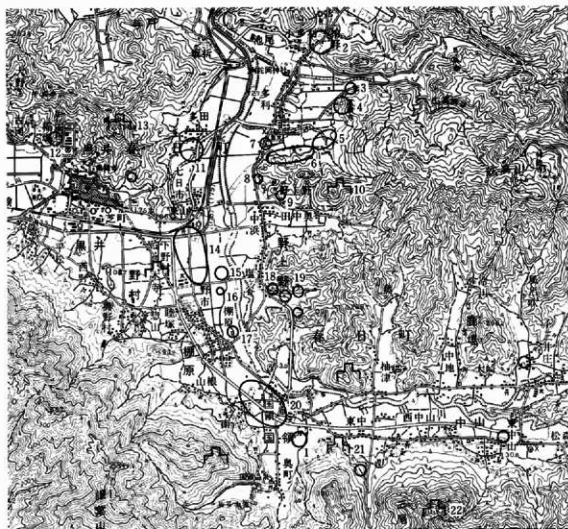
古墳では、春日町多利地区に全長37mを測る前方後円墳の二間塚があり、現在では県指定史跡に指定されている。後期古墳は数多く春日盆地の東方に、多利向山古墳群・松ノ本古墳群・多利古墳群、その北方にはカナツキ古墳・柏野古墳群、盆地の南には西野々古墳群が盆地を取り囲む形で所在する。

〔歴史時代〕

律令制の行政組織である「里」に係わる山垣遺跡が国領遺跡の北方に位置するほか、七日市遺跡でも奈良時代から平安時代にかけての大規模な建物群が検出されている。墨書土器、円面硯などの遺物からみて官衛的性格を持つ遺跡と考えられる。市島町には、白鳳時代に建立された特異な伽藍配置を持つ三ツ塚廃寺がある。三ツ塚廃寺を中心とした三ツ塚遺跡群などとともに当時の「丹波」を知る上で興味深い。

〔中世〕

国領遺跡B・C地区で平安時代末～鎌倉時代の建物跡などが検出され、また青白磁小壺・和鏡・鉄製品などを副葬品としてもつ土壌墓を検出した多利・前田遺跡が所在する。このほか、中世城郭・城館では、黒井の集落を見おろす猪ノ口山の山頂に国指定史跡の黒井城跡がある。黒井城は建武3（1336）年



1. 国領遺跡(今回調査地) 2. 柏野古墳群 3. カナツキ古墳 4. 松ノ本古墳 5. 多利遺跡群  
 6. 多利古墳群 7. 芝ヶ西古墳群 8. 二間塚古墳 9. 野上野寮跡 10. 野上野城跡 11. 多田  
 散布地 12. 兵主古墳 13. 黒井城 14. 七日市遺跡 15. 山垣遺跡 16. 野村遺跡 17. 榎原散布  
 地 18. 野々間遺跡 19. 塩ヶ谷古墳 20. 国領遺跡 21. 河津館跡 22. 三ツ尾城跡

Fig. 1 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/50000 福知山・蘇山)

に当時春日部荘を領有した赤松貞範が築城したもので、その後16世紀に城主となった萩野直正の手により補修・改修を受けたとされる。天正年間に明智光秀の丹波攻略によって落城したがその遺構は現在もよく残されている。典型的な中世山城と言われるが、石垣・縄張りなど近世的な要素も見られるようである。この黒井城を中心として、朝日城・野村城・三尾城などの出城が周囲の山々に点在する。



## II 調査に至る経緯

### 1 調査に至る経緯

国領遺跡は、兵庫県水上郡春日町国領字蓮町・石風呂・井森杉地区に所在する。昭和58・59年に近畿自動車道舞鶴線建設工事に先立ち実施した調査の結果、A地点と仮称した地区は中世から近世の複合遺跡であることが判明した。この仮称A地点の周辺には広範囲に微高地が発達し、これらの微高地上に遺跡が広く展開することが予想された。昭和61年、この仮称A地点の中央を流れる一級河川国領川の河川改修工事が計画された。兵庫県教育委員会では、工事計画範囲を検討した結果、計画範囲内に遺跡が存在する可能性があるため、同年8月・10月の2回に分けて確認調査を実施した。この確認調査は、第1次を社会教育・文化財課技術職員別府洋二・久保弘幸の両名が担当し、第2次を同技術職員村上泰樹・市橋重喜（平成2年5月死去）の両名がそれぞれ担当した。この2次におたる確認調査の結果、5箇所の地区（石風呂、蓮町Ⅰ・Ⅱ、井森杉、丹地区）で遺構が検出された。これらの確認調査の成果をもとに、国領川河川改修工事担当部局である兵庫県柏原土木事務所と遺跡の取り扱いについて協議した結果、丹地区を除く4箇所の地区について全面調査を実施することになった。

昭和61年10月9日～11月7日にかけて村上・市橋の両名が第2次確認調査と並行して石風呂地区・蓮町Ⅰ地区の調査を実施した。調査の結果、石風呂地区では柱穴群が検出されたが、柱穴の遺存状況が悪く建物として識別できる柱穴はなかった。また調査区の北側では旧国領川の河道跡（旧河道1）が検出された。蓮町Ⅰ地区では、地割り溝と推定される「L」字状の溝と柱穴群、護岸石をもつ旧河道跡が検出された。柱穴跡は石風呂地区と同様遺存状況が悪く、建物として識別できる柱穴はなかった。

翌62年5月21日～8月5日にかけて近畿自動車道を挟んだ南側、国領川上流域の蓮町Ⅱ・井森杉地区の調査を実施し、さらに新たに発見された古墳状の高まりの確認調査を実施した（第3次確認調査）。調査は村上・久保の両名が担当し、青木哲哉（立命館大学講師）、三原慎吾が補助員として、調査に参加した。井森杉地区の調査は当初中世遺構面だけの調査と考えたが、中世面の調査途中に、チャート製のスクレーパー1点が出土し、下層に旧石器時代ないし縄文時代草創期の遺構が存在する可能性が強くなった。急速の下層遺構の調査について柏原土木事務所と協議した結果、井森杉地区と隣接する蓮町Ⅱ地区の中世面の調査が終了した段階で確認調査を実施し、遺構が検出された場合は、全面調査を実施することになった。井森杉地区下層の確認調査の結果、縄文時代草創期に比定される石器ブロック群が検出されたため、全面調査を実施した。調査が終了した時点で森永速男氏（兵庫県立産学工業大学理学部）・市川 浩氏（神戸大学理学部）・糸田千鶴氏（神戸大学大学院自然科学研究科）・安川克己氏（神戸大学理学部）の御好意で熱残留磁気分析による炉床探査を実施した。この成果は、本書Ⅶ2に掲載している。また地形的分野では青木氏の現地での指導を得て、調査終了後、断ち割りトレンチを設定し、遺跡の立地についての検討を行った。

### 2 整理調査の経過

整理作業は昭和63年度、平成元年度、平成2年度の3箇年に渡って実施した。

昭和63年度の整理は、石器・土器の水洗い、ネーミング等の基礎的な仕事を中心に行い、以上の作業

が終了した時点で土器を中心に接合・復元作業を実施した。これと並行して、土坑内の脂肪酸分析を朝北海道測量図工社に、また火山灰分析を檀原 徹氏（株式会社京都フィッション・トラック）に、サヌカイト原産地同定を薬科哲男・東村武信氏（京都大学原子炉実験所）にそれぞれ委託し、成果を頂いた。

平成元年度は石器を中心に接合・復元作業を実施した。とくに作業の中心が石器であるため、接合復元作業は入念に行った。これらの作業が終了後、実測、遺物写真撮影を行った。また、本年度は遺物整理作業中に発見した鉄滓の科学分析を大澤正巳氏にお願いした。また前年度に依頼したサヌカイト原産地同定の結果、資料点数が不十分であることが判明し、本年度新たに分析資料を追加した。

平成2年度は、トレース・レイアウト等の報告書作成作業を行うとともに、昨年度整理中に見つかった碗形鉄滓・鍛造刺片の分析を大澤氏に再度依頼した。以上の経過を経て国領遺跡発掘調査報告書を刊行した。

なお整理段階で依頼した各分析の結果は、本書VIIに掲載しているが、紙面の都合上多くを割愛している。各分析担当者の方々には詳細な分析結果を賜ったが、その全てを掲載していないこととお断りするとともに、各分析者の方々に深くお詫びする次第である。

### III 微地形と層序

#### 1 遺跡周辺の微地形

国領川は標高 120 m 付近から扇状地を形成しつつ北に流下し、標高 105 m 付近で竹田川に合流する。今回調査を実施した井森杉、蓮町、石風呂地区は、いずれもこの扇状地中央に位置し、現国領川に沿う位置を占めている。

扇状地は、その頂部より扇形の等高線を描いて広がっている。しかし、標高 113 m 付近から扇状地中央部に突出した形で南北に長い微高地が形成されており、井森杉地区はその先端に位置している。微高地の東に接して国領川が流れており、西側は微凹地となっている。微高地の先端は、井森杉地区のほぼ中央にあり、現状で約 50 cm 程度の段差をもっている。これより北には遺構は分布しない。

蓮町地区は、国領川の東に位置しており、国領川に沿う緩やかな傾斜面となっている。井森杉地区より約 1～3 m 低く、国領川との比高差も小さいがわずかながら微高地が形成されており、遺構はその上に位置している。標高は、108.5 m～111 m である。

石風呂地区は、標高 107 m～108 m にあり、主要部はやはり国領川の東に位置する。蓮町地区から続く傾斜面上にあって、わずかな微高地となった部分に遺構の分布が見られる。

既述のように確認調査では、35 か所の坪掘りを実施したが、全面調査範囲を除くといずれも等高線図に示されるとおり、微凹地であったことを示す堆積状況が確認されている。従って、遺構面は国領川に沿って飛び石状に形成された微高地上に分布しているものと考えられる。中でも、上位に位置する井森杉地区が、遺物などから判断して最も早く居住地として開発されたものであろう。

#### 2 全面調査区の層序

以下では、全面調査区の層序について記載をおこなうが、中世の層序については、各地区の中世遺構面の項で詳述するので、ここでは基本的層序の解説にとどめ、縄文時代およびそれ以前の層序を主体として記述をおこなう。

##### a. 井森杉地区

井森杉地区では、現表土（耕土・床土—第 I 層）下に、わずかに灰色砂質シルトを基本とした、中世の遺物包含層が堆積している（第 II 層）。国領川の旧河道が検出された調査区東南部では、この中世包含層を浸食して、旧河道内の堆積物が観察された。

一方調査区北半は、南半より約 50 cm 低く、微凹地となっている。ここでは、現表土下には灰色砂礫（第 V 層）が堆積しており、遺物包含層は存在しなかった。

調査区南半では、中世の遺物包含層下に黄褐色砂質シルト層が堆積している（第 IV 層）。上部では、ほとんど礫を含まない淘汰された堆積物で構成されるが、ラミナは観察されなかった。第 IV 層は、北側ほど暗色化し、暗褐色を呈するようになる。この第 IV 層が、縄文時代草創期の遺物を包含している。縄文時代草創期の土坑内の堆積物は、主として暗褐色砂質シルトであり、第 IV 層が黄褐色を呈する部分でも、土坑内の埋土はわずかに暗色を帯びていた。第 IV 層は、水成層が土壌化したものと考えられ、本来暗い色調を呈していたものが、何らかの要因で脱色された可能性を考えておきたい。



Fig. 2 調査区周辺の微地形等高線図 (50cm コンタ)

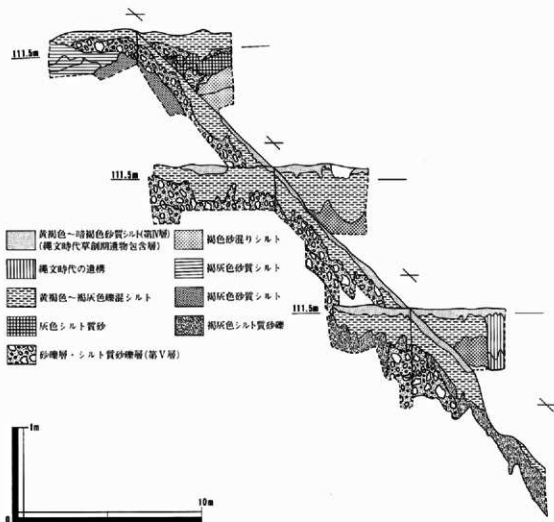


Fig. 3 井森杉地区層序パネルダイアグラム

第IV層以下は、シルト・砂礫が複雑な堆積を見せつつ、下位ほど粒径は粗くなる（第V層）。これは扇状地を構成する堆積物と考えられる。

#### b. 蓮町I地区

蓮町I地区の層序は、第I・II層以下が第V層となっており、中世・縄文時代の遺物包含層はともに分布しない。中世の遺構は、第V層上面から検出された。

ただし、調査区南隅では、第V層が急斜面の高まりを見せ、井森杉地区から続く微高地の先端と考えられた。この部分では第IV層が遺存しており、鍛冶炉はここで検出されている。

蓮町I地区の西側は、国領川の旧河道が第V層を浸食して検出され、河道内の堆積物から多数の中世遺物が出土している。

#### c. 石風呂・蓮町II地区

蓮町II地区の層序は基本的に下層からV層→IV層→クロボク層→II層→I層の順である。この地区における中世遺構の確証面はクロボク層上面である。このクロボク層は中砂湿りりで砂質が多く純粋な堆積ではなく、上方からの二次堆積と推察される。II層の遺物包含層は上下2層に分けられ、上層はほぼ全域に堆積するが、下層は調査区の南西隅に一部遺存している。

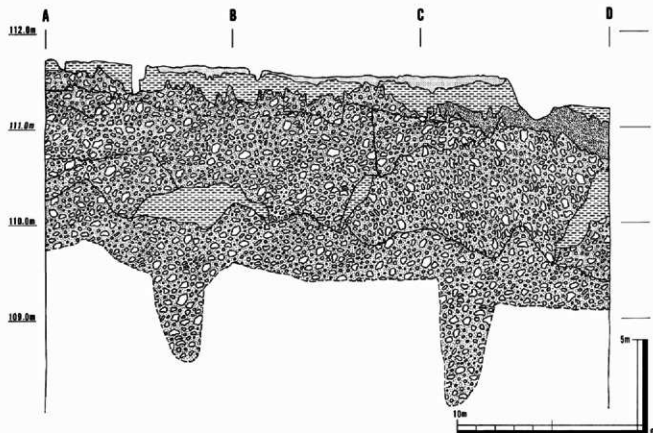


Fig. 4 井森杉地区深掘断面図

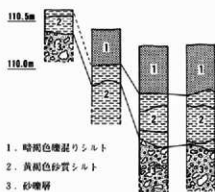


Fig. 5 蓮町地区下層確認調査  
地層柱状図

#### d. 土壤中火山灰の抽出分析

縄文時代草創期遺構の調査にあたって、第IV・V層の堆積物に含まれる火山灰の分析を東京都フィッシュン・トラックに委託して実施した。その詳細は巻末に譲るが、第IV・V層からは、アカホヤ火山灰(K-Ah)、始良 Tn 火山灰(AT)に由来する火山ガラスが検出された。

AT火山ガラスは、特に濃集する層は認められず、第IV・V層には降灰層準は存在しないものと判断されている。アカホヤ火山灰に由来するガラスは、上位ほど出現頻度が増すが、やはりガラス含有のピークは認められない。こうしたことから、第IV・V層の測定試料はAT降灰以降、アカホヤ降灰以前と考えられる。またSK-104の埋土でも、火山灰の抽出分析を実施したが、その成果については後章で詳述する。

石風呂地区の層序はI層を除去した段階でIV層が露呈する。I層は耕作土以外に盛土層で構成され、その堆積は80cm前後と厚く堆積している。蓮町II地区で認められたクロボク層はここでは後世に人為的な削平を受けたと考えられ、その痕跡が旧河道埋土中に認められる。II層包含層は当地区では旧河道埋土最上層に、蓮町II地区II層(下層包含層)と同質の層が認められるが、これらの層が対応するかについては断言できない。

両地区におけるII層包含層内の遺物は少なく、遺存状況の良好な遺物は出土していない。

## IV 確認調査の成果

### 1 第1次確認調査

第一次確認調査対象地区は、近畿自動車道舞鶴線の北側、国領川下流域である。調査は2×2m規模の坪を、12箇所(No.1~11)設定し、人力によって掘り下げを行った。調査の結果、坪2・3から中世とものと考えられる柱穴が検出され、周辺に遺跡の広がり予想された。また坪2に近接する坪1では遺構は検出されなかったが、ほ場整備事業に伴って氷上郡教育委員会の手で実施された周辺の確認調査の成果では遺構が確認されていた。そこで坪1の北側に0.5×3mの坪1Bを設定し確認を行った。その結果、坪2で遺構を検出した土層と同一の層が確認され、坪1と1Bとの間に遺構分布の境界があると予想された。

この他の坪では、若干の遺物が出土したもののいずれも国領川の旧河道または氾濫原と思われる砂礫層が検出され、遺構は分布しないと判断した。

出土した遺物はごく少量であるが中世に属すると考えられる土器が出土した。

坪掘りの結果から、遺跡は坪1Bから2にかけての範囲(蓮町I地区)に及び、坪3が位置するやや高位にある水田面(石風呂地区)に広がりをもつと判断される。

### 2 第2次確認調査

第2次確認調査は、昭和61年10月に実施した石風呂・蓮町I地区の全面調査と並行して実施した。確認調査の対象地区は、近畿自動車道舞鶴線の南側、国領川上流域である。確認調査を実施するにあたり、2×2mの坪を水田一筆に1箇所配し、必要に応じて坪の拡張および新たに坪を設定する方法をとった。調査は調査対象地区北端より開始し、計23箇所(No.12~34)の坪を設定した。

確認調査の結果、蓮町II地区・井森杉地区・丹地区の3箇所遺構の存在が確認された。

蓮町II地区(坪No.12・13)

坪13からは南北に走る溝(旧河道)と柱穴が確認された。この河道内から備前焼の播鉢、須恵器碗、土師器皿をはじめとする中世の土器が多数出土した。さらに遺構の広がりを知るため坪12を設定したが、遺構は検出されなかった。しかし周辺の地形を観察すると坪12・13を含む範囲に遺構が存在する可能性が高い。遺物は坪13検出の柱穴・旧河道内より須恵器碗(5)、備前焼播鉢(6)が出土している。

井森杉地区(坪No.14~17)

坪16から土坑が検出された。そこで、遺構の広がりをも面的に把握するため坪15・17を設定し調査したところ、坪17から柱穴が検出され建物址の存在が明らかになった。遺跡の北限・南限を知るため新たに坪14・18を設定し掘削したが、いずれも遺構の検出がなかった。しかし坪14では遺構を検出した土層がほぼ水平に堆積しており、また平安時代末から鎌倉時代に比定される土器が多量に出土した点を考慮すると、遺構が坪14付近まで広がる可能性が高いと判断される。

遺物は坪15の柱穴内より土師器皿(1)、瓦器碗(3)が出土した。

丹地区(坪No.22)

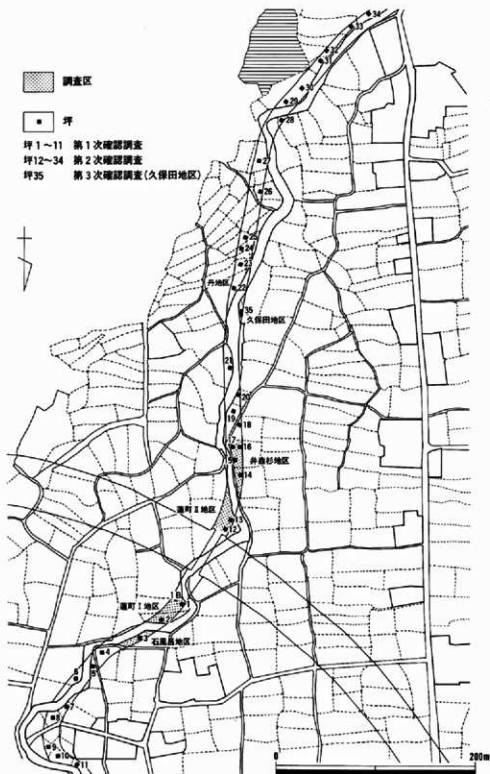


Fig. 6 確認調査坪配置図

坪 22 より柱穴が 1 個検出されたため、新たに坪の北側を  $1 \times 2$  m の規模で拡張したところ、柱穴がさらに 1 個検出された。遺構は 3 層暗灰褐色土を除去した段階、砂礫層上面で確認した。検出した柱穴内から、(2) の瓦器碗が埋置された状態で出土した。遺跡の広がりは、坪 22 の南側に設定した坪 23 までは及んでいない。当地区の西側は現国領川で限られているところから、遺跡の中心は坪 22 の東側に展



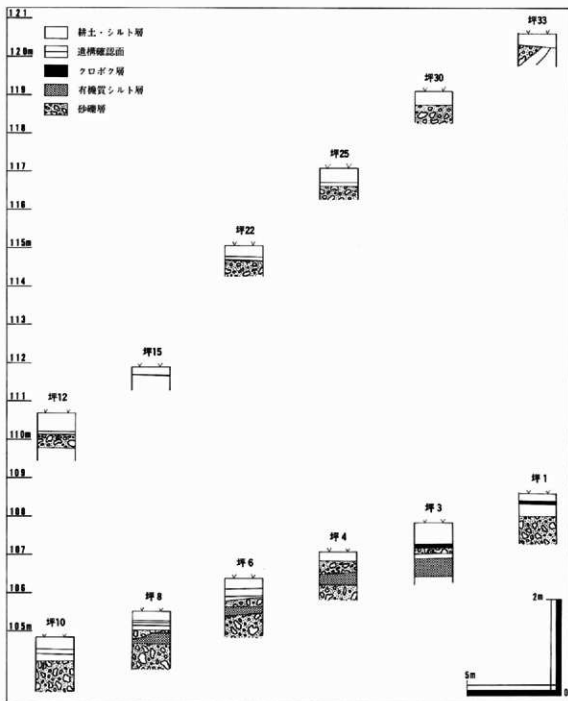


Fig.7 確認調査柱状土層図

聞いていると判断される。

上記した以外の坪では、坪25 耕土中より中国製青磁碗（7）、白磁碗（8）が出土している。

### 3 第3次確認調査

昭和62年に実施した蓮町II地区・井森杉地区の全面調査と並行して実施した。

久保田地区（坪No.35）

前年度に実施した第2次確認調査の際、国領川左岸に古墳状の高まりが認められたため、トレンチによる確認調査を実施した。古墳状の高まりに対し、南北方向に幅1m、長さ10mのトレンチを配し調査

した。調査の結果、近世から現代に比定される遺物が出土し、古墳ではないことが判明した。

以上が国領川河川改修工事に伴う確認調査の概要である。遺構を検出した石風呂地区、蓮町Ⅰ・Ⅱ地区、井森杉地区、丹地区の5箇所の地区はいずれも扇状地の微高地上に立地し、遺跡の立地する地理的条件が整っている。

確認調査で検出した柱穴、土坑等の遺構は、集落の存在を予想させる。検出した遺構の時期は、井森杉・丹地区では平安時代末から鎌倉時代に、蓮町Ⅰ・Ⅱ地区は南北朝時代から室町時代にそれぞれおさまると考えられる。

また、これらの遺構以外に遺物を包蔵する旧河道が蓮町Ⅱ地区で、現国領川に沿って検出されている。この旧河道内から南北朝時代後半から室町時代前半に比定される備前焼播鉢(6)が出土していることは注目される。

確認調査の結果、上記した5箇所の地区については、遺構が存在し全面調査の必要がある。ただ国領川上流の丹地区は、工事にかかる範囲が極めて狭小で確認調査の際、全面調査の結果となった。したがって丹地区の調査は終了している。

井森杉地区の全面調査中に縄文時代草創期に比定される石器工房址の存在が明らかになり、当初予定していた全面調査が終了した後、縄文時代草創期の遺構の確認調査を実施している。この確認調査の成果は、本章では触れず、V章でその概要を記載している。

最後にこの点についてお断りしておく。

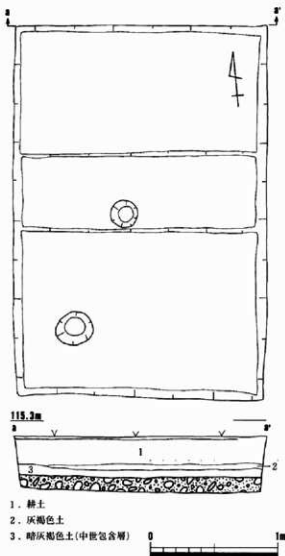


Fig. 8 第2次確認調査坪22平面図(丹地区)

## V 縄文時代草創期文化層の調査

### 1 概要

井森杉地区では中世の遺構面調査の際、中世遺構の検出面を形成する黄褐色～暗褐色砂質シルト層上面で、チャート剝片・挟入石器等の出土を見た。このため、下層遺構面の有無を確認するために、井森杉・蓮町Ⅱ両地区全域で、坪掘りによる確認調査を実施した。

確認調査は、調査区全域に5mグリッドを設定し、これを4等分した2.5m×2.5mの範囲を掘り下げる方法でおこない、井森杉地区15箇所、蓮町Ⅱ地区7箇所の坪で調査をおこなった。その結果、井森杉地区西半で良好な状況で遺存した縄文時代草創期の遺構面が検出されたため、全面調査を実施した。なお他の地区では確認調査において当該期の遺構・遺物を検出することはできなかった。

井森杉地区での調査は、確認調査の成果に基づき、約294m<sup>2</sup>の範囲で実施された。その結果、石器ブロック、土坑・配石を検出し、1,532点の遺物が回収された。このほかに、掘削土壌の水洗選別、中世遺構・包含層内出土、および表面採集の遺物がある。

本章では、これらの遺構・遺物について記載をおこなうが、特に重要なものを除き、原位置を保って出土したものに限定して記載する。

### 2 遺構

#### a. 概観

今回の調査によって検出されたのは、石器ブロック4基、土坑7基である。ブロック4を除いて、ほぼその全域を調査区内で把握することができた。また土坑も、SK-104を除いてすべて調査区内で完結している。

このほか、大型の礫が検出され、配石遺構の可能性のあるものが6基存在している。調査区内には、一部で石器ブロックと重複しながら、遺物包含層の下位にある礫層が露出している部分があり、出土した礫のすべてを人為的な遺構とするには慎重とならざるをえない。ブロック2では、調査当初集石遺構と考えられていた部分が、発掘の進展に伴い礫層の露出と判断された例もある。しかし礫層中の礫は、1kgを超えるような大型のものが少ないことから、ここでは、1. 礫の重量が1kgを超えるもの、2. 下位の礫層が露出したものではないことが調査によって確認されたものを中心に配石遺構として取り上げることにする。

#### b. 石器ブロック

上述のように、石器ブロックは4基が検出されている。最大のブロック1が南に位置し、その北側に接してブロック2・3が、さらにブロック3の北にブロック4が位置している (Fig. 9)。各ブロックの識別は、遺物の分布状況から比較的容易であるが、平面的出土状況をさらに客観化するために、遺物分布傾向面図を作成して検討をおこなった (Fig. 10)。

各ブロックの組成は、Tab. 1に示した通りである。最大のブロック1は、全体の67%の遺物量を占めており、重量でも全体の70%を占めている。ブロック2・3は近似した規模のブロックである。ブロック4はもっとも遺物が少なく、また分布密度も低いブロックである。

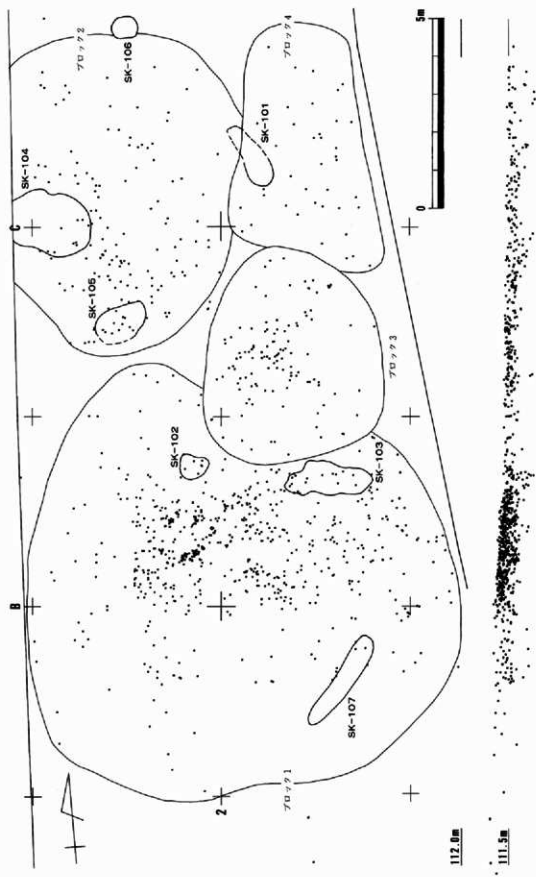


Fig. 9 石器平面・垂直分布図

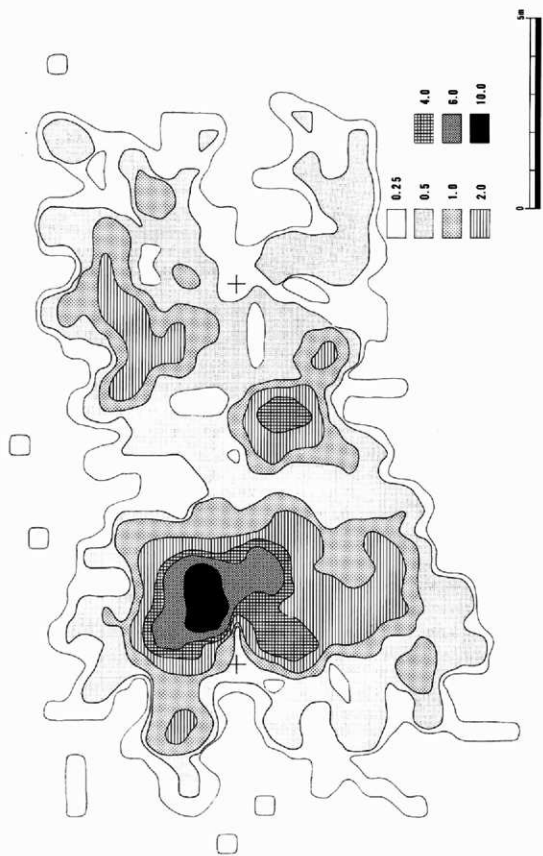


Fig. 10 石器出土傾向図

Tab.1 ブロック別石器組成表

ブロック	器種別組成 (上段チャート、その他 中段サヌカイト)															重量組成	重量%			
	TP	PO	KN	AH	SC	NO	DE	PE	RF	UF	PF	PR	FL	CH	CO			CS	HS	合計
1		9	1		6	2	2		15	16	124	15	77	346	10	14	6	643	3073.5 g	98.7
	2							1	1				4	1	13			22	40.2 g	1.3
	2	9	1	0	6	2	3	1	15	16	128	15	78	359	10	14	6	665	3113.7 g	100
2		8			2				5	7	24	1	27	39	2	2	1	117	900.7 g	99.3
	1										1	1	8					11	6.0 g	0.7
	1	8	0	0	2	0	0	0	5	7	25	1	28	47	2	2	1	129	906.7 g	100
3		3		1	1				1		9		14	59	1	5	1	95	244.1 g	94.3
									1			1	1	11				14	14.7 g	5.7
	0	3	0	1	1	0	0	0	2	0	9	1	15	70	1	5	1	109	258.8 g	100
4		1			1				1	1	1	5	18			1	1	30	126.3 g	93.1
	2								1	1		1	2					7	9.3 g	6.9
	2	1	0	0	1	0	0	0	1	1	2	1	6	20	0	1	1	37	135.6 g	100
外													2	3				5	11.9 g	100
													2	3				5	11.9 g	100
合計	0	21	1	1	10	2	2	0	21	24	158	17	125	465	13	22	9	891	4356.5 g	98.4
	5	0	0	0	0	1	1	2	0	6	1	4	34	0	0	0	0	54	70.2 g	1.6
	5	21	1	1	10	2	3	1	23	24	164	18	129	499	13	22	9	945	4426.7 g	100

(表中の重量には、CS、HSを含めていない。HSにはチャート以外の石材も含む)

器種組成は、各ブロックとも類似した点が少なくない。有舌尖頭器、尖頭器未製品、スクレイパーは、ほぼ安定して組成される器種である。また、二次加工のある剥片、使用痕のある剥片も一部で欠けるものの安定した器種といえる。

各ブロックの組成の主体を占めるのは、石器製作に伴う剥片・碎片で、いずれのブロックでもその組成に占める比率は76～87%に達している。

ブロックを形成する遺物は、いずれも扇状地を形成する礫層を覆う、黄褐色～暗褐色砂質シルト層中より検出されている。その垂直分布は、海拔111.3m～111.7mの間にあり、ほぼ包含層の傾斜に沿って分布しているといえる。

#### ブロック1

ブロック1は、最大規模のブロックである。東西に長いやや不整形な楕円形の分布領域を形成しており、特にその西半中央付近で、遺物の密集度が最大となる。このブロック中心の東に接して、遺物分布が急減する部分が見られるが、この付近には中世の土坑・柱穴等の遺構が分布しており、傾向面図のコンタラインもその影響を受けたものと思われる。

ブロック1の組成で過半数を占めるものは碎片であり、尖頭器調整剥片(押圧剥片を含む)がこれに次いでいる。この3器種で72.3%を占めており、尖頭器製作を主体としたブロックの機能を明確に示している。

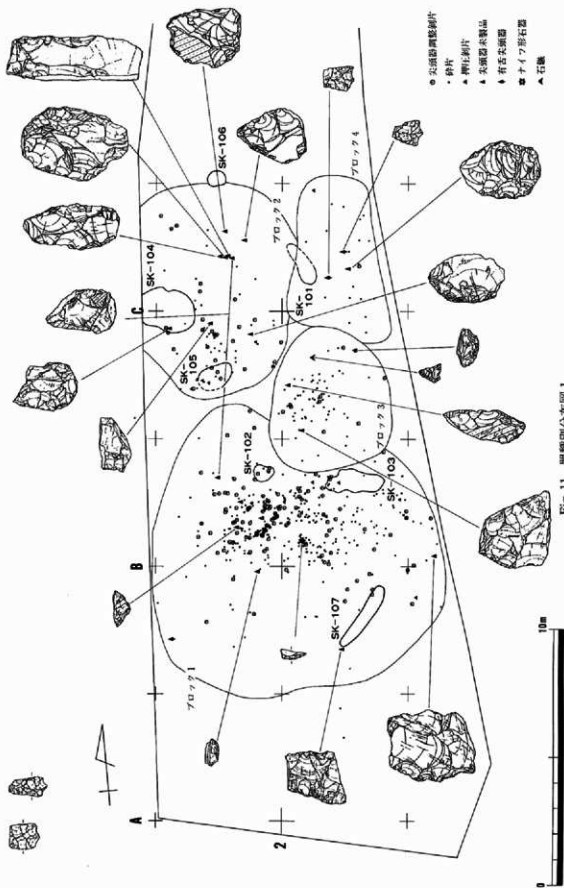
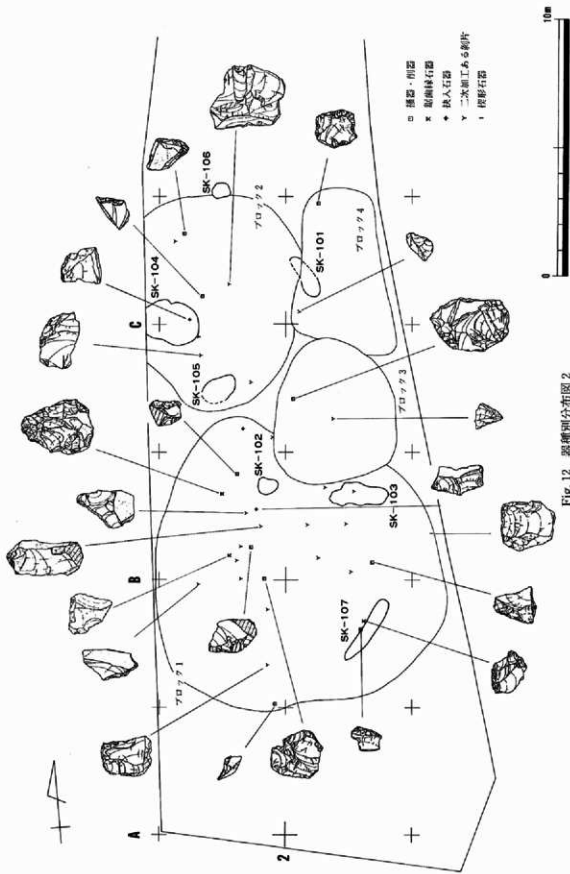


Fig. 11 遺物分布図 1





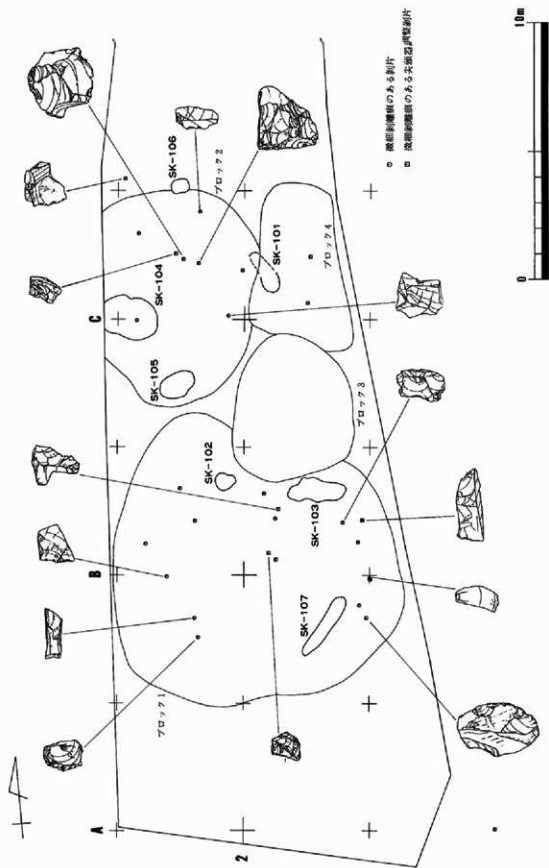


Fig. 13 器種分布図 3

ブロック北半の密集部には、尖頭器調整剥片・砕片が高い密度の分布を見せる。同じ密集部内に尖頭器未製品5点が分布しており、うち1点はブロック2の未製品と折れ面で接合する。

この密集部から離れた、ブロック南東～東部に、尖頭器未製品2点が分布する。特に、SK-107の南で出土した尖頭器(No.252)は、本遺跡出土のチャート製尖頭器未製品の中で、最も完成度の高いものである。一方ブロック西～北西部では、サスカイト製有舌尖頭器2点が出土している。うち1点は出土位置を記録できなかったが、ブロック2との境界近くで出土したものである。

その他の主要石器の分布は、ほぼ遺物分布の密度に則して、密集部およびその周辺に集まっている。しかし分布図からは、大きく東西に分離しうような空間を、ほぼブロック中央に看取することができる。挟入石器が西半のみに分布するが、他の器種は、東西でその組成が近似することが注目される。

使用痕のある剥片の分布は、3分される。ブロック西半中央の遺物密集部の西辺、東辺およびブロックの東縁である。こうした分布状況は、スクレイパー類、二次加工のある剥片とは異なり、尖頭器未製品のうちでも、素材段階に近いものや有舌尖頭器の分布状況に近似している。

ブロック1には、60母岩が分布する。ブロック内での母岩識別率は、42%である。母岩がブロック内で分布が完結するものは13母岩である。

ブロック1では、石器製作時に台石として使用された可能性の高い、重量が1kgを超える礫、ないしは平坦面を持つ礫が検出されている。その分布状況は、必ずしも遺物密集部とは整合していないが、その中でも密集部内で検出された砥石は注目される。ブロック南西部の遺物分布が散漫な領域で検出された大型礫、および密集部西半の礫を、配石として後述する。なお、ブロック東半で見られる礫分布の集中は、下位の礫層の一部が露出したものである。

ブロック1内では、3基の土坑が検出された。いずれもブロック辺縁部に位置している。土坑内からの出土遺物には、顕著なものは見られない。

## ブロック2

ブロック2は、調査区北西部に位置する。調査区内でその全域を調査しえたか否か微妙であるが、傾向面図から判断するならば、大きな欠落はないものと思われる。やや不整形な分布領域を見せ、相対的に規模の大きい南半と、やや小さな北半とに分離できる。

ブロック2の組成でも、尖頭器調整剥片(押圧剥片含む)、砕片で55%を占め、ブロック1と同様に尖頭器製作との強い関連が伺われる。

組成の中で注目されるのは、尖頭器未製品である。出土点数では8点と、ブロック1におよばないが、ブロック内に占める割合は、6.1%と他のブロックを凌駕している。遺物の内容でも、他のブロックの尖頭器未製品が、むしろ製作途中で破損した部分的資料が中心であるのに対し、ブロック2では素材段階に近いものが多数を占めており、突出した存在となっている。

尖頭器製作に関わる遺物の分布はブロック内で大きく2分される。南半のSK-104と105の間の空間に、尖頭器調整剥片、砕片の集中が見られ、北半に尖頭器未製品の顕著な密集が認められる。この密集部分では、尖頭器未製品が折り重なって出土しており、貯蔵状態を示す可能性が高い。また、サスカイト製有舌尖頭器1点(No.5)が、確認調査時にCライン北側付近で出土している。

他の器種は、ブロック中央で南北に長い散漫な分布を見せ、特に集中状況を伺うことはできない。使用痕のある剥片の分布は、ブロック北半に偏っており、尖頭器未製品の分布に似た傾向を示している。

ブロック2には、32母岩が分布する。ブロック内での母岩識別率は、64%である。2母岩がブロック内で分布が完結するものである。

ブロック2内では、尖頭器未製品が密集するブロック北半と、ブロック4との境界に位置するSK-101の北端で配石と考えられる礫の分布が認められた。SK-101北端部では拳大以下の礫数個がまとめて置かれた状況で検出されている。その性格は明瞭ではないが、配石に含めて後述する。

土坑は、3基が検出された。いずれもブロック辺縁部に位置しており、うちSK-104・105からは遺物の出土が見られた。なかでもSK-104では、土坑底から尖頭器未製品とこれに接合する尖頭器調整切片2点が出土している。

### ブロック3

ブロック3は、ブロック1と4に挟まれる位置にある。南半にまとまりのよい円形の分布領域、北半にやや密度の低い領域があり、全体では瓢形の分布領域を占めている。

ブロック1・2と同様、尖頭器調整切片(押圧切片含む)、碎片の占める割合が73%と高い。ブロック南半では尖頭器調整切片はやや少ないが、碎片が円形のまとまりを見せ、その周辺に尖頭器未製品が分布する。

ブロック北半では遺物分布は散漫であるが、尖頭器未製品と、石礫の出土が目される。

ブロック1・2とくらべ、その他の器種は貧弱である。ブロック南半に、スクレイパー、二次加工のある切片各1点が分布するのみにとどまる。また使用痕のある切片は、本ブロックには分布しない。

ブロック3には、21母岩が分布する。ブロック内での母岩識別率は、27%である。ブロック内で分布が完結する母岩は認められない。

なお、ブロック3内では、土坑および明瞭な配石遺構は確認できなかった。

### ブロック4

識別されたブロック中最も構成遺物が少なく、遺物分布も散漫なブロックである。

ブロックを構成する遺物は37点と、最大のブロック1の1/20でしかない。遺物分布状況も、明瞭な中心を見出すことができず、ブロックの主要部分は調査区外にあるものと推測される。

ここで注目すべきは、尖頭器未製品、有舌尖頭器であろう。他のブロックでも、有舌尖頭器および調整の進んだ、ないしは素材段階に近い尖頭器未製品はブロック辺縁部に偏って分布する傾向が見られたが、ブロック4での分布状況はそうした例に合致している。

その他の器種は貧弱であり、スクレイパー、二次加工のある切片各1点が、ブロック西縁で検出されているにすぎない。使用痕のある切片は、2点がブロック中央に散漫な分布を示している。

ブロック4には、8母岩が分布する。ブロック内での母岩識別率は、30%である。ブロック内で分布が完結する母岩は認められない。

ブロックの北半では、散漫な分布を見せる配石1基が識別された。またブロックの西端では、土坑1基が検出されている(SK-101)。

### c. 配石 (Fig. 14・15)

概要で述べたように、配石については認定基準を設定してはいるが、これは遺物包含層には大型の礫は含まれていないことを前提としている。しかし、遺跡の現状では、下位の礫層の起伏によって随所に礫が露出していたため、礫層ないしはそこから遊離した礫と、人為的に配置された礫の識別は困難な部分が少なくなかった。

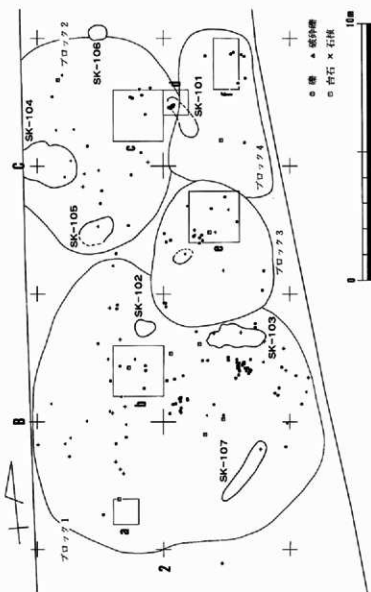


Fig. 14 配石分布图

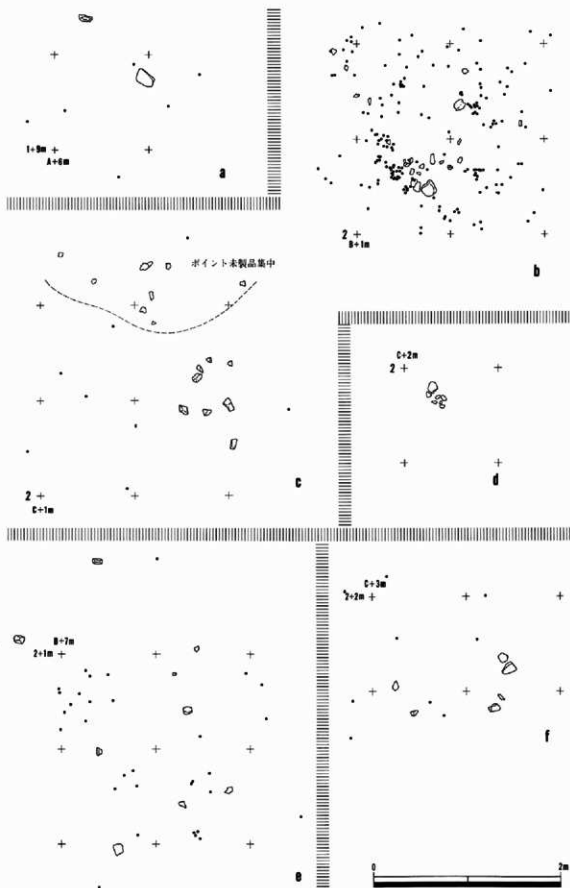


Fig. 15 配石平面図

特にブロック1東半の礫密集部は、当初礫群かと判断して調査していたが、その後下位の礫層の露出と判断された部分である。

配石の分布は調査区の全域で、ほぼブロックに整合しているが、破砕痕のある礫・石核の分布とは必ずしも合致しているとは言えない。ここでは6例を取上げ、その記載をおこなう。

#### 配石 a

ブロック1の南西部に位置する。大型礫2点を中心に、ごく散漫に遺物の分布が認められる。礫は1点が直立、1点が平坦面に上に斜位で検出されている。周辺には下位の礫層の露出は全く認められず、人為的な配石遺構である可能性が高い。

#### 配石 b

ブロック1の西半に位置する。遺物密集部内において、多様な大きさの礫から構成されている。配石の内側の空間では遺物分布が散漫で、その外縁に沿って遺物の分布密度が高い部分が認められる。なお礫のうち1点は、砂岩を用いた砥石である。

#### 配石 c

ブロック2の東に位置する。尖頭器木製品の密集部に接して、拳大を主体とした礫6点が1×0.8mの範囲に分布している。配石の南に散漫な遺物分布が認められる。

#### 配石 d

ブロック2の東縁、SK-101上面に一部が重なる位置にある。周辺には遺物が分布せず、礫7点のみが一括して置かれた状況にある。礫は全く剥離痕の見られないもので、100g以下というごく小さな礫も含まれていたが、付近に礫層の露出は見られず、人為的な配置と判断された。

#### 配石 e

ブロック3の北半に位置する。拳大の礫5個が2.0×1.5mの範囲に分布し、この周辺にややまとまった遺物の分布が見られる。礫のうち1点は、平坦面をもつ台石と思われるものである。また破砕礫も4点が含まれる。

#### 配石 f

ブロック4の北半に位置する。拳大の礫5個から構成され、その南に散漫な遺物分布が認められる。

Tab.2 配石構成礫重量分布

	200	400	600	800	1000	1200	1400	1600
a			1				1	
b	2							
c		3			1	2		
d	6							
e	2	2			1			
f	2	1		1			1	

#### d. 土坑 (Fig.16)

確認調査の時点で、SK-101・104が検出されたため、土坑については全面調査の当初から、慎重な対応を実施し、計7基を検出することができた。III章でも述べたように、遺物を包含するシルト層は、調査区北側ほど暗色化し、暗褐色ないし暗黄褐色を呈する。このため遺構のベースとなる黄褐色シルト層との識別は容易で、遺構の輪郭もとらえやすかった。しかし調査区南半では、遺構内充填土と下位の層準の色調による判別が困難となっており、ある程度掘り下げが進行した時点で、土坑内に堆積したわず

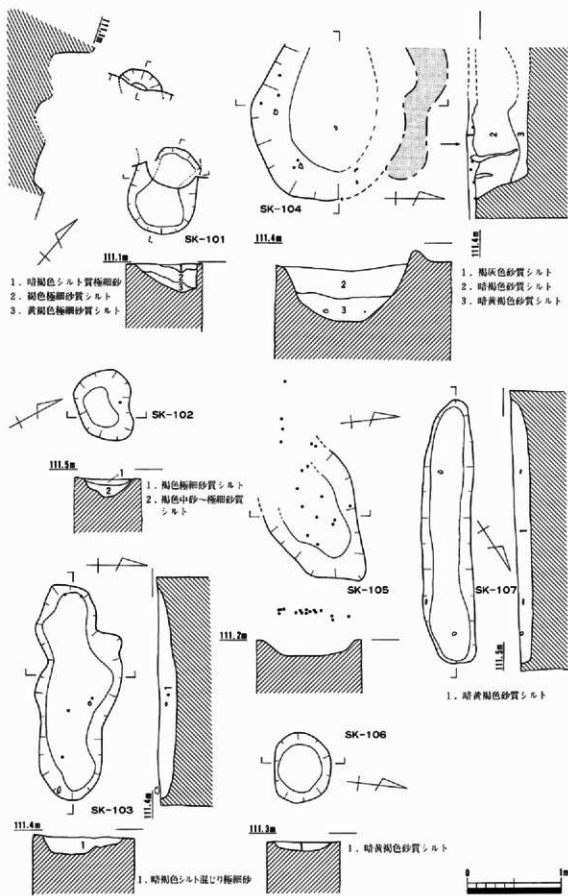


Fig. 16 土坑平面図

Tab.3 土坑出土遺物組成表

ブロック	遺物組成 (上段チャート、その他 中段サモサイト)														合計	重量組成	重量%	
	TP	PO	KN	AH	SC	NO	DE	PK	RF	UF	PF	FL	CH	CO				CS
SK-101											1					1	1.0g	100
											1					1	0g	0
											1					1	1.0g	100
SK-102												1				1	0.2g	100
																1	0g	0
																1	0.2g	100
SK-103											1	2	1	2		6	44.8g	100
																6	0g	0
											1	2	1	2		6	44.8g	100
SK-104		1				1			1	2	3				2	10	39.6g	99
		1				1			1	2	3	1			2	11	37.1g	100
SK-105											6	2	7	1	16	7.4g	86	
											1				1	1.2g	14	
											7	2	7	1	17	8.6g	100	
SK-106															0	0g	0	
															0	0g	0	
															0	0g	0	
SK-107											1		1	1	3	39.4g	100	
															3	0g	0	
											1		1	2	3	39.4g	100	
合計		1				1			1	2	11	5	10	3	37	129.6g	98.1	
		1				1			1	2	12	6	10	3	39	131.1g	100	

かに暗色の砂質シルトが識別しうる状態であった。

このため、SK-102・103・105・107などは、本来の遺構面よりかなり掘り下げられた状況でようやく検出されたものと思われる。

#### SK-101

ブロック2と4の境界に位置している。既述のように、確認調査の段階で検出されたが、中央部を深掘りによって所ち割った時点での検出であったため、平面形に若干不確実な要素がある。複数の土坑が重複していた可能性も絶無ではない。

歪んだ長楕円形を呈し、掘り込みは一部を除いて急斜面におこなわれている。土坑底は凹凸が激しく少なくとも3段程度の凹凸があったようである。

土坑内には砂質シルトを主体として、3層に分層される堆積が観察された。堆積は断面観察からは、自然堆積と判断される。土坑内からの出土遺物はほとんど見られず、わずかに水洗選別によって1点のチャート剥片が検出されたにすぎない。

#### SK-102

ブロック1の西半で検出された。歪んだ形状を呈し、断面形は椀底状を呈する。土坑底は一部にわずかな段を有している。土坑内は砂質シルトを主体とする堆積物で充填されており、2層に分層された。

出土遺物は1点である。土坑検出面より上位で検出され、調査後土坑上面に分布していたことが確認されたものである。

#### SK-103

ブロック1の東半に位置する。不整な長楕円形を呈する。本土坑も、掘り下げが進行してから検出されたもので、本来の遺構面はより上位にある。現状では浅くゆるやかな断面形を呈しており、土坑底はほぼ平坦になっている。土坑内の堆積は細分できず1層と判断された。

出土遺物は6点が認められた。検出時の経過から、出土遺物には土坑検出面より上位で出土したもので、土坑輪郭内におさまるものを含んでいる。

#### SK-104

ブロック2の西半に位置する。調査区外に一部が延びている。



確認調査時に検出されたが、その際に土坑北半は断ち割っており、輪郭の復原は断面で実施した。確認調査当初は、土坑であることを認識しなかったが、土坑北縁に沿って隙まじりのシルトが土手状の盛り上がりを見せており、後にこれが土坑掘削時に排出された下層の土であろうと推測された。従って、本土坑については、本来の遺構面をとらえられたものと考えている。

卵形の平面形を呈し、急斜度の掘り込みを見せる。土坑底はほぼ水平である。

土坑内の堆積は2層に分離された。いずれも砂質シルトを主体としている。遺物包含層である黄褐色砂質シルトがその上面を覆っている。

遺物は8点が出土した。遺物の出土状況は、土坑の下端付近に分布するものと、土坑を覆う黄褐色シルト層ないしは土坑上面付近に分布するものに大別される。土坑底からは、尖頭器未製品、およびこれに接合する剥片等が出土している。この土坑底の尖頭器に接合する剥片が、同じブロック2内(土坑外)から出土しており、土坑がブロックと同時期に形成されたことが確認された。従って、土坑上面付近の遺物は、土坑の埋没後、二次的に移動したものと考えておきたい。

#### SK-105

ブロック2の南半に位置する。不整形な形状であるが、その東半は、確認調査時に掘削されたため不明である。しかし、遺物がほぼ土坑中央を西へ長く延びる分布を示しており、これが土坑の範囲を示していると考えられる。

遺物分布が土坑検出面より上位にあり、本来の遺構面からはかなり掘り下げられた時点で検出された土坑といえよう。

断面形は、現状では浅い皿状を呈する。埋土は暗黄褐色砂質シルトである。

#### SK-106

ブロック2の北縁で検出された円形の、浅い皿状の土坑である。出土遺物は見られなかった。

#### SK-107

ブロック1の南東縁に位置する、長大な土坑である。

断面形は浅いU字形を呈し、埋土は砂質シルトを主体としている。埋土の分層はできなかった。

やはり、本来の遺構面より掘り下げた状態で検出されたものと思われる。

土坑内より4点の遺物が出土している。また、本土坑南縁で、尖頭器未製品が出土している。

#### e. 炉址

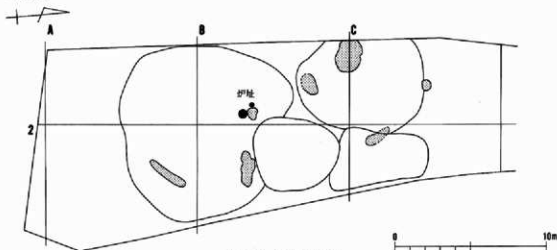


Fig. 17 炉址の位置

今回の調査では、肉眼で炉址と認定しうるものは検出されなかった。しかし、A-1-III、B-1-III、B-1-IVグリッドで、森永達男氏らによって実施された熱残留磁気の分析によって、2か所の受熱地点(炉址)が検出されている(Fig. 17)。その詳細は、後章に同氏による御寄稿をいただいている。

炉址の位置を、遺物分布図に投影してみるならば、ブロック1の遺物密集部の西縁に相当している。

#### f. 母岩別資料

全ブロックを通じて、64母岩(444点)が識別された。母岩識別率は29%である。出土遺物が尖頭器調整剥片、砕片を主体としているため、識別には困難が伴った。中でも尖頭器素材の良質なチャートは、砕片、小型の剥片段階では、識別が困難である。

母岩を構成する礫層、および母岩の岩相上の特徴は、Tab. 4~6に示した通りである。

ここでは便宜上、母岩をその平面分布の状況から、下のように分類して、順を追って記載する。

1. 1ブロック内で分布が完結する母岩
2. 分布が2ブロックにわたる母岩
3. 分布が3ブロックにわたる母岩
4. 分布が4ブロック、またはブロック外にまでおよぶ母岩

#### 1ブロック内で分布が完結する母岩

単一ブロック内で分布を完結する母岩は、18母岩を数える。うち16母岩がブロック1に、2母岩がブロック2に分布している(土坑出土のものを含む)。

ブロック1での分布は遺物密集部に合致しており、ほぼ遺物分布の密度に沿った分布を見せている。しかし各母岩ともに狭い領域に高密度に分布するという傾向は、必ずしも認められず、むしろブロック内である程度の広がりをもっている。

さらに詳細に見るならば、ブロック西半の比較的狭い領域にのみ分布する母岩と、西半、東半にやや離れて分布しているものと大別できそうである。ブロック西半中央における遺物の密集が石器製作の中核であったとすれば、前者の母岩は特にこれと強い関わりをもつものと言えよう。

ブロック2ではSK-104の周辺に、2母岩が分布している。共に接合資料を含むが、特に母岩7はSK-104の内外で尖頭器未製品と尖頭器調整剥片が接合するものであり、土坑の時期を決定する根拠となるものである。

#### 2ブロック間に共有される母岩

2ブロック間に分布する母岩は30母岩を数え、全母岩の半数近くを占める。うち20母岩が1-2ブロック間に、7母岩が1-3ブロック間に分布しており、ブロック1-4、ブロック2-3、ブロック2-4は各々1母岩を共有するにすぎない。各ブロック内での分布状況は、ブロック内で遺物密度が最も高い部分によく一致している。

接合例は5母岩に認められ、うち2母岩(母岩15・22)はブロック1-2間での接合例、他はブロック内での接合である。

ブロック内での接合例では、ブロックの中心部と縁部の間での接合が認められる(母岩12・20)。このうち母岩20は、ブロック1・2内で各々1例の接合が見出された。

一方ブロック1-2間での接合例は、2例ともブロックの中心からやや離れた位置にあるものが接合している。母岩22の例は、尖頭器未製品が折れたものの接合例である。

ブロック1-3間に分布する母岩は、ブロック1内では密集部からやや離れた南、および西側に集まる

Tab.4 母岩別資料一覧表 1

母岩 番号	器 種 別 数 量 (合計欄下段は重量g)												分 布 ブ ロ ッ ク								
	PO	SC	NO	DE	PE	RF	UF	PF	FL	CH	CO	CS	合計	1	2	3	4	外	土坑	?	
1							2		2				4 18.1	4							
2									7	1			8 69.1	3	4	1					
3						1		3	2				6 25.8	3	3						
4									4				4 13.4		3				SK-104 1		
5						1			2	2		1	6 45.7	3	1			1			1
6			1					1	1	6			9 16.1	7		1					
7	1						1	2					4 26.8		1				SK-104 2		1
8									2		1		3 10.9	3							
9									2	1	1		4 47.7	4							
10		1							3	1	1		6 58.5	3	2	1					
11	1	1							2				4 113.0	3			1				
12							1	1	2		2		7 163.5	6	1						
13	1							3	1				5 8.9	3	1						1
14	1								2				3 99.2	3							
15						1	1						2 24.0	1	1				SK-104 1		1
16	1							1	1				3 62.3	1	4	1					
17	1	1				2	3	6	1	1			15 216.8	8	4	1					2
18								3					3 4.3	2	1						
19	3					3		2	2	2	1		13 110.9	9	3	1					
20		1						2	2	7		3	15 351.9	10	4						
21	4						1	9	4	4			22 169.3	14	2	3	2				1
22	2						1	1	1				5 79.4	4	1						

Tab.5 母岩別資料一覧表 2

母岩 番号	器種別数量 (合計欄下段は重量g)											分布ブロック								
	PO	SC	NO	DE	PE	RF	UF	PF	FL	CH	CO	CS	合計	1	2	3	4	外	土坑	?
23	2												2 20.5	1		1				
24						1		4					5 3.2	4						1
25							1		1				2 15.1		1		1			
26									5				5 5.7	3	2					
27								1	1	1			3 8.6	1						2
28						1	1	4		1			7 11.3	3	4					
29							1	4	2				7 7.0	6	1					
30	1					1	1	2	1				6 21.6	4		1				1
31		1						1					2 9.9	2						
32									2				2 87.7	1		1				
33								2		4			6 2.2	4	1					SK-104 1
34						1			1				2 42.0	2						
35								4	3	2			9 8.33	7	1		1			
36								4		1			5 2.5	4	1					
37							1	1	1	1			4 4.5	2	1	1				
38								4		4			8 6.0	4	1	3				
39								1	2		1		4 84.0	3		1				
40		1				1		2					7 7.6	3		1				
41								4					4 2.5	4						
42								1	1				2 3.0	2						
43							3	1	4	4			12 18.4	4	2	2		1		SK-103 1
44								2	1				3 2.8	2						1

Tab.6-1 母岩別資料一覧表 3

母岩 番号	器種別数量 (合計欄下段は重量g)												分布ブロック								
	PO	SC	NO	DE	PE	RF	UF	PF	FL	CH	CO	CS	合計	1	2	3	4	外	土坑	?	
45								1	1	1	1		4 99.03	3							1
46	1								1				2 43.0		1	1					
47						1		1					2 2.1	2							
48								3	1				4 4.4	4							
49						1				1			2 20.0	2							
50									2	1	1		4 68.5	2	2						
51	1	2	1			1	2	14	1	3	1		26 83.7	19	5	2					
52				2			3	4	5	1			15 143.4	10	5						
53							1	6	11	1	1		20 105.3	13	4	1	2				
54								3	1	1			5 3.5	4	1						
55								2		1			3 2.1	3							
56								1		1			2 0.8	2							
57						2		3	1	10			16 6.6	11	1	1	2				1
58								4		5			9 3.5	6		2					1
59								7	2	7			16 6.9	7	7						2
60								3		10			13 4.5	11	1						1
61							1	1		6			8 2.8	1	3						3
62										7			7 1.6	6	1						
63	1							1		9			11 5.1	7	1		1	1			1
64								1		18			19 6.7	14	2	2	1				

Tab.6-2 サヌカイト一覧表

	器種別数量 (合計欄下段は重量g)												分布ブロック								
	有	SC	NO	DE	PE	RF	UF	PF	FL	CH	CO	CS	合計	1	2	3	4	外	土坑	?	
	5	1		1	1	2		8	5	35			58 77.9	19	10	14	7			2	6

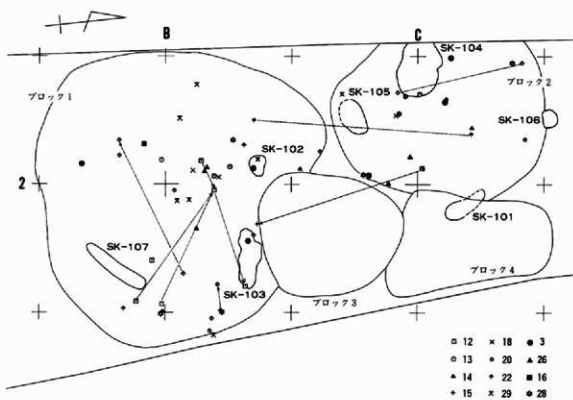
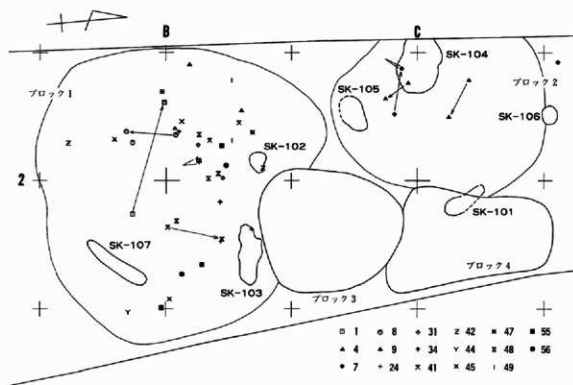


Fig. 18 母岩別資料分布図 1

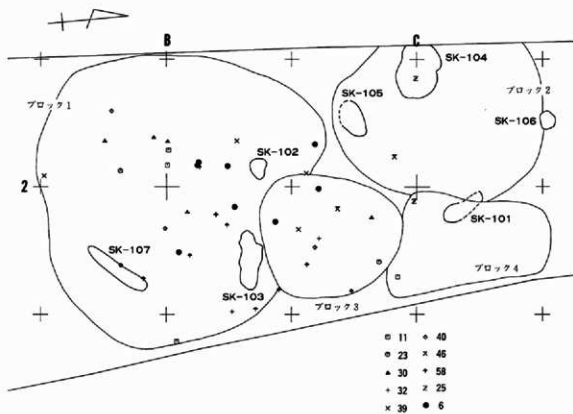
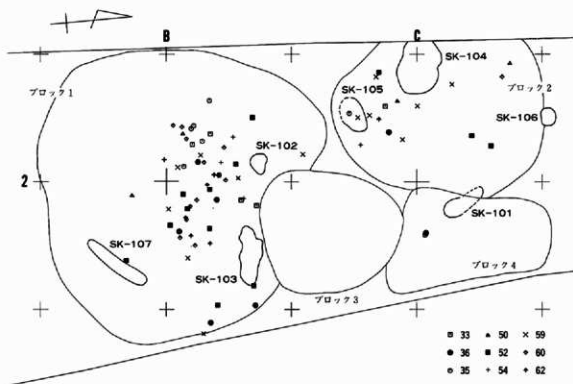


Fig. 19 母岩別資料分布図 2

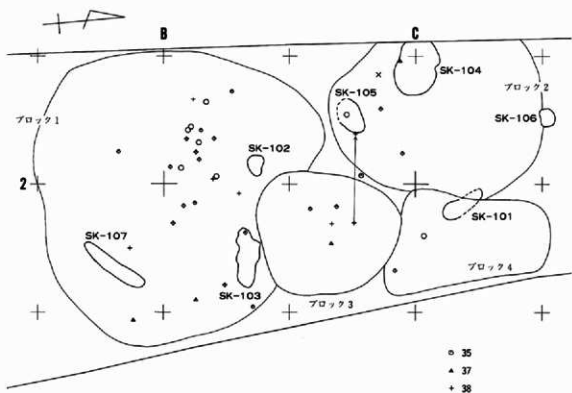
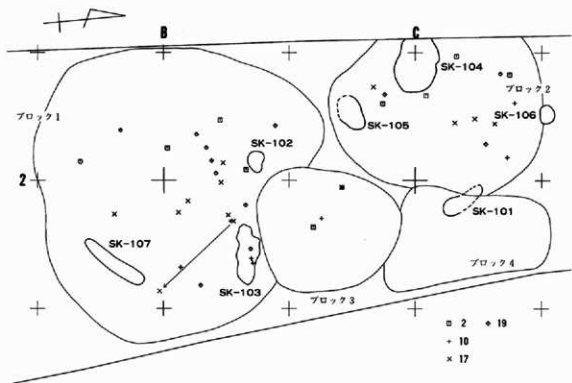


Fig. 20 母岩別資料分布図 3



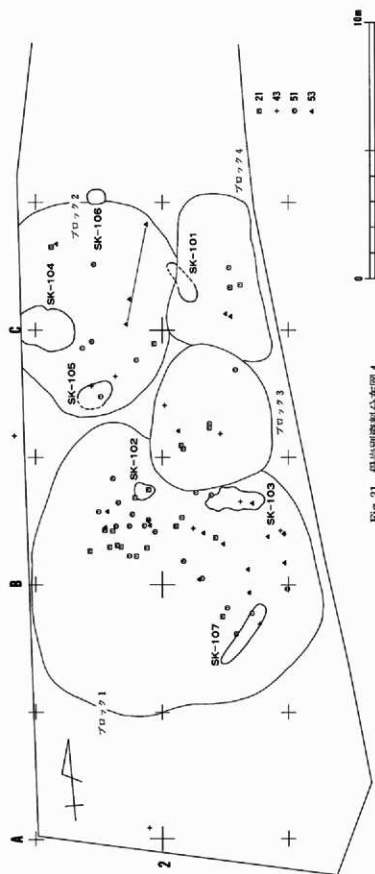


Fig. 21 母岩別資料分布図4

傾向が見られる。ブロック 2-3、2-4 間の分布は、ともに 2 点ずつの母岩別資料である。

なお、2 ブロック間に分布する母岩では、ブロック 1-2 間に分布する母岩 13、14、22、ブロック 1-3 間に分布する母岩 11、23、30、ブロック 2-3 間に分布する母岩 46 がそれぞれ尖頭器未製品を含んでいる。

### 3 ブロック間に共有される母岩

3 ブロック間に共有される母岩は、ブロック 1-2-3、または 1-2-4 に分布するものに限定され、ブロック 2-3-4 に共有される母岩はない。

ブロック 1-2-3、1-2-4 に共有される母岩は、ブロック 1 内ではほぼ一様に、ブロック中心部に高い分布を示す。しかしブロック 2 内での分布は特徴的で、ブロック北半の尖頭器密集部周辺に濃密な分布を見せている。またブロック 3 内では、ほぼブロック中心部に重複する分布が見られ、ブロック 4 では 1 点のみが分布するにとどまる。4 ブロックに共有される母岩またはブロック外にも分布が見られる母岩

4 ブロックに共有される母岩、およびブロック外にも分布する母岩は 7 母岩である。

4 ブロックに共有される母岩は、おおむね各ブロックの中心を主体として分布している。ブロック外にも分布する母岩もほぼ同様の傾向が見られるが、母

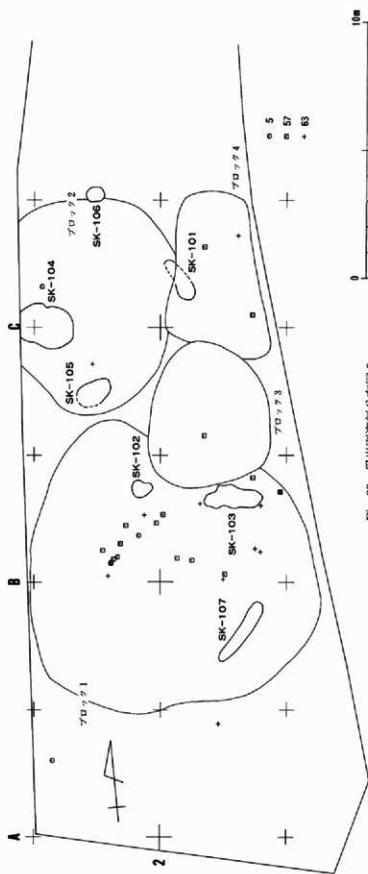


Fig. 22 母岩別資料分布図5

岩43、63は明確な分布の中心をもたず、全般に散漫な分布を見せており、ブロック1内でも密集部を外れたブロック西半に分布している。

母岩53も同様な傾向を見せる。ブロック1内では、ブロック東半にまとまって分布し、他のブロックではごく散漫に分布している。ブロック2内での接合例は、剥片と剥片との接合である。

これに対し、母岩5・21・51・57は、ブロック1の密集部にかなり明確な分布の中心をもち、他のブロックにはそれぞれ数点ずつが分布している。

#### サヌカイトの分布

国領遺跡出土のサヌカイトは、合計47点があるが、分析の結果、二上山産、岩屋産がともに認められた。数量的には、二上山産が優勢であるが、ともに製品を含んでおり、特にいずれかの産地の石材が、製品として優先的に用いられた形跡はない。サヌカイトは、すべてのブロックに分布しているが、その分布状況はほぼチャートの分布状況に比例している。

ブロック1で、チャートの密集部分の周辺にまとまる傾向が見られるほか、ブロック2・3では遺物分布の中心に重なった分布を見せる。

ブロック4では、ほぼ中央にまとまる傾向が見られる。

サヌカイトのうち、剥片、有

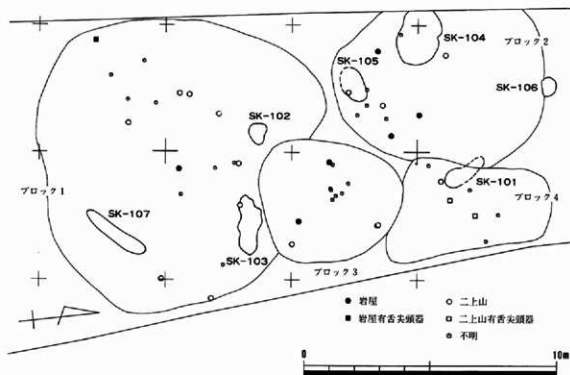


Fig. 23 サヌカイト分布図

舌尖頭器を除く製品は、ブロックの中心部に分布する傾向が見られるのに対し、有舌尖頭器は、ブロックの中心部・遺物の集中部を離れて分布している。後述するように、こうした分布状況は、遺跡内における空間利用のありかたと関わるものと思われ、注目すべきことといえる。

産地別の分布状況は、遺物が微小で同定不可能であったものが多いため、不確定の要素を含んでいるが、同定済のもののみからは、特段に偏った状況は看取できない。

サヌカイトの搬入形態とともに、注意を要するであろう。

#### 水洗選別資料の分布

全面調査を実施した井森杉地区、および蓮町II地区の確認調査においては、発掘土壌の水洗を実施し、微小遺物の採集に努めた。

調査区を50cmの方眼に区切り、各方眼ごとに土壌の採集をおこなった。ただし、調査の都合上、すべての発掘土壌を水洗することは不可能であったため、第1回目の精査（遺物包含層上面から約3cm程度）の土壌のみを水洗した。

その結果、井森杉地区・蓮町II地区ともに、微小な碎片が回収された。

その総数は、井森杉地区で144点、蓮町II地区で8点であった。

碎片の分布は、井森杉地区ではブロックの遺物分布にほぼ比例している。ブロック1南方には、比較まとまった碎片の分布が見られる。この範囲は肉眼的には遺物の分布が極めて散漫であったためブロックを設定しなかった部分であり、大型の遺物はないというものの、ごく小規模な石器製作（微小な二次加工を中心とする）が行われていたものと考えられる。

全面調査を行わなかった調査区北部でも、少数の碎片が検出されているが、これらはむしろ調査区南部からの二次的な堆積によるものである可能性が高いであろう。ただし、調査区北部では、全面の土壌

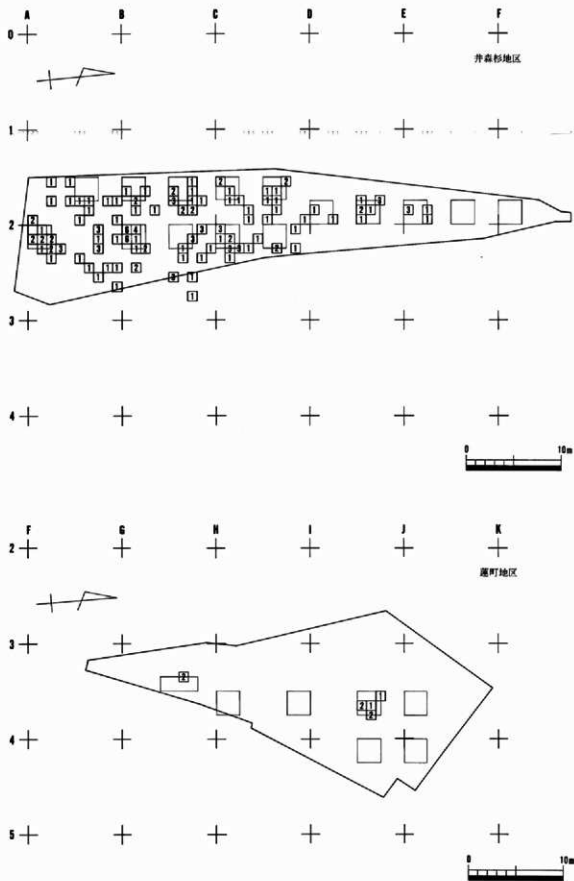


Fig. 24 水洗選別資料出土状況

を採集したのではなく、確認調査の坪掘りの範囲に限られることを付言しておきたい。

蓮町II地区では、調査区のほぼ中央部にややまとまって碎片が分布している。他にまったく遺物が出土していないことから、その評価は困難である。層位からみるならば、井森杉地区で遺物が含まれていた層より下位にあたるものと考えられるが、上層の土壌がクラックなどによって混入していないという保証はない。したがってここでは、あえてこれを下位の文化層といった見方は取らないこととした。

### 3 遺物

今回の調査において縄文時代草創期の遺物として石器1,532点の出土・採集を見たが、その内分はナイフ形石器1点・石核1点・有舌尖頭器5点・尖頭器3点・尖頭器未製品19点・スクレイパー10点・鋸齒縁石器3点・抉入搔器3点・楔形石器1点・二次加工のある剥片23点・使用痕のある剥片25点・剥片130点・石核19点・母核1点・尖頭器調整剥片182点・碎片496点である。本節ではこれらの内、図化した物を中心に述べることとする。

#### ナイフ形石器 (Fig. 25-1)

1はナイフ形石器とした。緑灰色のチャート製である。素材となる剥片を縦位にもちいて、その打面縁から側縁にかけて急角度の二次加工が施されている。刃部は背面左側縁に設けられ、0.1mm程度の微細な剝離痕が連続する。下半を欠損するが、折れ面の風化も進んでいる。隣接するほ場整備事業に関わる調査においても、サヌカイト製の切出形のナイフ形石器が、出土したと聞かす詳細は不明である。

石核 (Fig. 25-2)

2は浅い凹基核である。左図の面は細かく調整されるが、右図の面は比較的急角度であり荒く仕上げられている。縁辺の側面観はジグザグ状を呈する。淡緑色のチャート製である。

#### 有舌尖頭器 (Fig. 25-3~7)

有舌尖頭器はいずれもサヌカイト製であり、上半を欠損する形で出土している。舌部の形態を観察すれば、舌部長は短いものの逆三角形を呈し、返刺を有する1群と理解できよう。また、舌部から返刺にかけては緩く内湾する。縁辺は、正面観がほぼ直線状を呈するが側面観はジグザクを見せる。また器面には、押圧剝離の調整痕を留めるものの、全体に荒い印象を受ける。

3はその一部が残る資料であるが、サヌカイト製であること、器面に残る押圧剝離の痕から有舌尖頭器とした。

4は右図左側の返刺を欠損する。左図の面には押圧剝離の痕をよく留めている。

5は右図左側縁の背面からの調整剝離が深く急角度であり、あたかも肩を有するような形態を示す。舌部の逆三角形が明瞭である。

6は他に比してやや細身の形状を示す。舌部も細くやや長く残されている。

7は返刺、舌部ともにやや不明瞭ではあるが、器面には押圧剝離の痕をよく留めている。

#### 尖頭器 (Fig. 25-8~10)

尖頭器の基部と考えられる資料のみの出土である。

8は上下両端に折れ面が観察される。節理によって調整剝離痕は階段状剝離が著しい。基部の形状は、急角度の調整剝離によって内湾している。

9は、特に基部の末端に細かく調整剝離が加えられている。折れ面は、大きな力が加わったのか著し

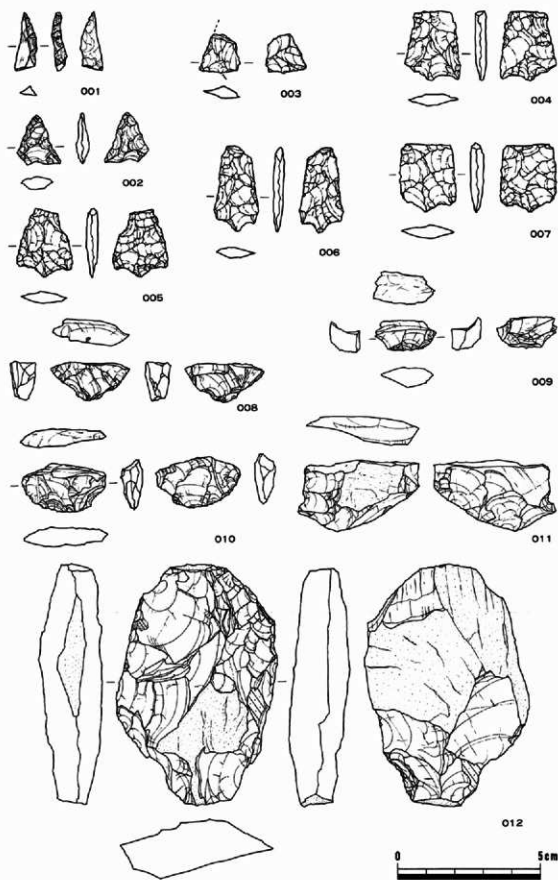


Fig. 25 阳原遗址出土石器 1

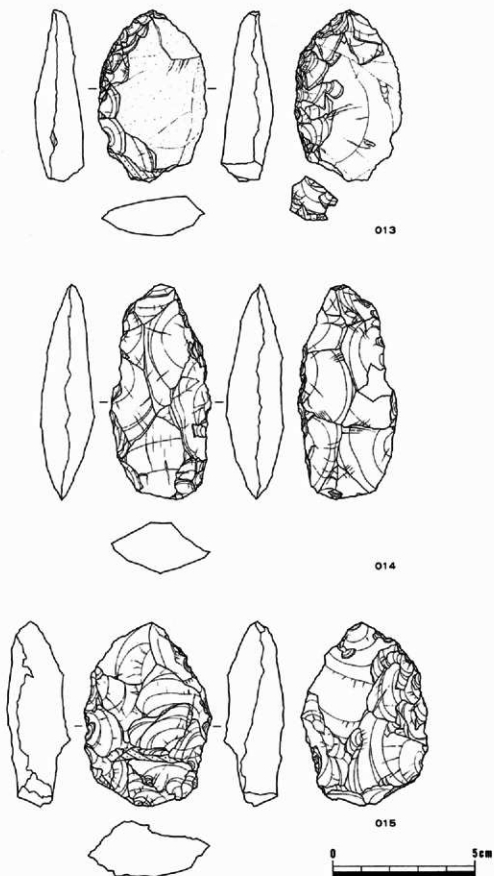


Fig. 26 國領遺跡出土石器 2

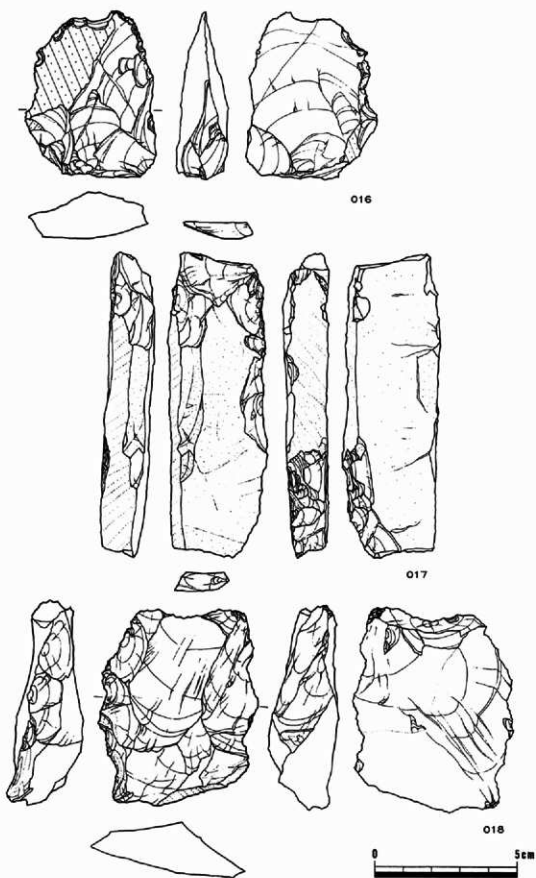


Fig. 27 國領遺跡出土石器 3



い湾曲を示す。

10は、右図に見える調整剝離は平坦剝離を示すが、左図の調整剝離は比較的急角度で形状が整えられている資料である。

#### 尖頭器未製品 (Fig. 25-11~Fig. 29-24)

剝片または板状の礫を素材として、片面・および両面に平坦剝離を主に用いた物を尖頭器未製品として一括した。資料の多くは折れ面を有しており製品として完成した場合の大きさを類推できるものは少ない。

11は、おそらく尖頭器の基部にあたるどころかと考える。右図の上方向からの剝離面が素材剝片のものと思われ、背面に礫面を持つ剝片にたいして周囲から平坦剝離が施されている。

12は厚さ約4cm程度の板状の礫を素材として平坦剝離を周囲から施しているが、特に右図左側縁下部の、やや内湾する部位に対する調整はきわめて細かい。図の上下両端には礫面が残されたままであり、長さを減じる調整は見られず、5cm前後の製品を目指したものである。

13は、やや肉厚で背面に礫面を広くとどめる横長の剝片を横位にもちいている。調整剝離は打面側に集中してみられる。この剝離は平坦剝離を意識していると思われるが、ほとんどが貝殻状の寸詰まりな剝離となっており打瘤も除去しえていない。これも、現形から約4cm程の製品となるであろう。

14は灰緑色のチャート製である。左図の下方向からの剝離痕が素材の面と思われるが、素材の形状は復元しがたい。左図右側縁に対する両面からの調整は細かいものであるが、全体に大きな剝離によって形状を整えている。本遺跡の尖頭器未製品としては、整った形態を示す資料である。

15は、肉厚な剝片をもちい、周囲から調整剝離を施している。左図の左側縁に見える剝離痕は比較的急角度であるが、平坦剝離を盛用する。特に左図右半部に対する調整は入念である。打面・打瘤は除去されずに残存するが、素材剝片の主要剝離面に直径1mm程度の打撃痕が観察されることから、なんらかのアクシデントにより製作途中で廃棄されたと想像できる。また、素材剝片の末端部にも礫面が見られ、約4cm程の製品を目指したものであろうか。

16は縦長の打面側が肥厚する剝片を素材としている。打面縁に見られる調整が平坦剝離であることから、尖頭器の未製品と考えたが、右図右側縁、左図右側縁の調整が急角度で正面観が鋸歯縁状を示し、かつ右図左側縁に微細な剝離痕を有している点から、他の器種として利用された可能性も残る資料である。

17は緑色チャートの板状の礫を素材として、左図上方は平坦剝離が施され、右図左下は急角度に調整されている。上下両端には折れ面が見られるが、この折れ面が調整剝離の剝離痕を切っている。

18は、荒く急角度の調整剝離を見せる。素材剝片の、主要剝離面上部に広がる、幅広い剝離痕の左側に見える潰れが打面と思われる。

19は横長剝片をもちい、調整剝離はその腹面に顕著に見られ、打面縁より平坦剝離が施されている。素材となった剝片自体がそれ程大きなものではなく、製品となっても大きく変形するものとは考えにくい。

20は、石核の底面を取り込んだ剝片を素材として、図に見える節理面および礫面より、主として平坦剝離が加えられている。素材の打面・打瘤は残置されている。下端は折損する。

21は、左図に残る大きな面が素材の主要剝離面で、末端に折れ面を有する横長の剝片を素材として、両面に比較的大きな調整剝離を行っている。基部に当たる部位の調整は細かく入念である。右図左上の

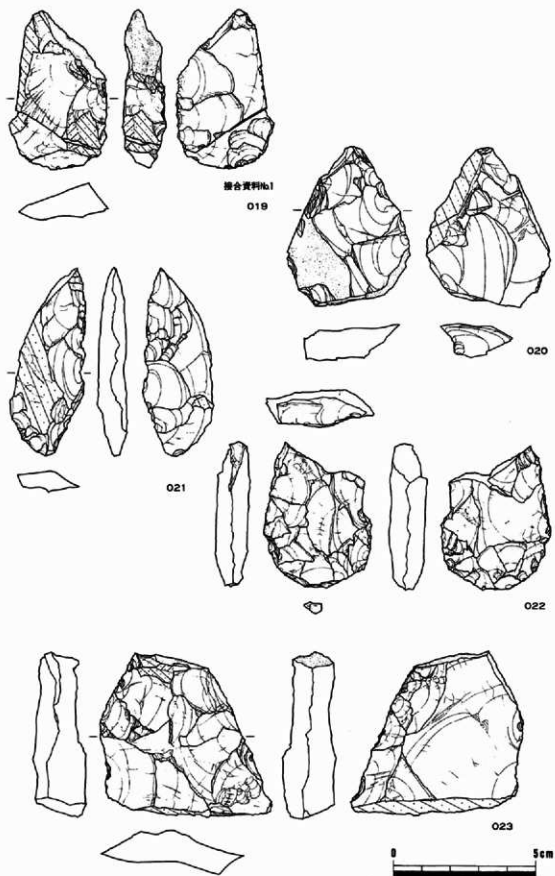


Fig. 28 国領遺跡出土石器 4

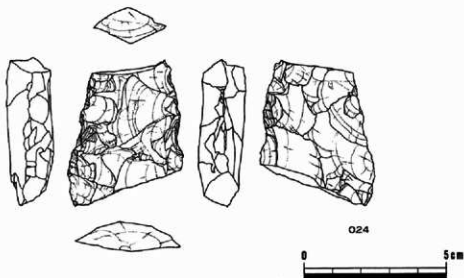


Fig. 29 国領遺跡出土石器 5

部分に押圧剝離の痕跡を留める。

22 は、両面共にネガティブな面で覆われるほど調整は進むが、器体中央付近で節理により著しい階段状剝離を見せる。基部付近は細かく急角度な調整である。最終的には節理によって折れている。

23 は、大形の剝片を素材として、その背面には両側縁から、腹面には左側縁にやや急角度で調整剝離が施されている。下半部は節理面によって折損する。

24 は両面に調整剝離度を見せるが、左図の両側縁に見られる調整は急角度であり断面形は凸レンズ状となる。全体に稜の摩耗が著しい。

スクレイパー (Fig. 30-25~Fig. 30-34)

素材に対して、連続的な調整剝離を加え、刃部を形成するものをスクレイパーとして分類した。この中で、急角度の調整剝離によって刃部が急斜度なものを振器とし、調整剝離が浅く、振器に比して緩斜度の刃部を幅広に持つものを削器として扱った。

(I) 振器 (Fig. 30-25~Fig. 30-28)

25 は肉厚な剝片に対して、その一端に腹面側から急角度の調整剝離によって刃部を作出している。素材の打面側は、折れにより消失している。

26 は、節理の著しく目だつ方形に近い剝片を素材として、その末端に背面側より 90° に近い急斜な角度で、調整剝離を施して刃部を作り出している。刃部の正面観は内湾している。

27 は、右面の下方にポジティブな面を見せ剝片を素材とする。両面に末端が階段状となる平坦剝離が施され、素材の厚みを減じようとする調整が目だつ。また大きさの点からも他の尖頭器未製品と大差がないことから、尖頭器未製品を転用したものと考えられる。先端に腹面側からの急角度な調整加工により直線状の刃部を持つ。

28 は板状の小礫を素材として、その 1 面から 90° に近い急斜度の調整剝離を加えて、尖頭状の刃部を作出している。石錐の可能性も残るが、肉厚な点、尖頭部の角度の開きよりスクレイパーと判断する。灰黒色のチャート製で、全体に稜の摩耗が著しい。

(II) 削器 (Fig. 30-29~34)

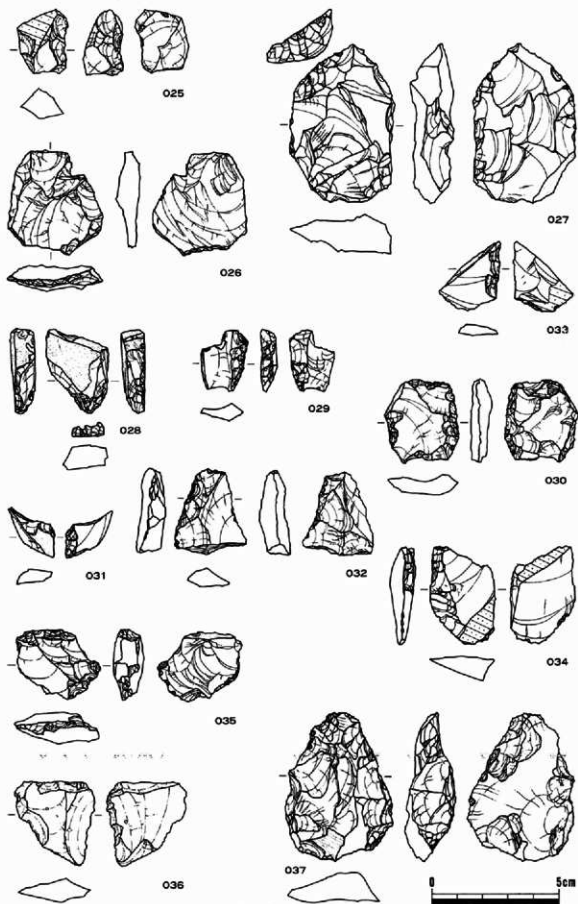


Fig. 30 固鎮遺跡出土石器 6

29は素材剥片の最も肥厚する部位に、背腹両面より調整剥離を施して直線的な刃部を作出している。特に、腹面側からの調整剥離は細かく入念である。

30は濃い緑色のチャート製の剥片を素材としている。右図中央から右の大きな面がポジティブな面で、右上に潰れが見え、打点と思われる。調整剥離は背腹両面から施されて、直線状の刃部を形成している。刃部の稜には若干の摩耗がみられる。

31は剥片の極めて薄い部位に、背面より調整剥離を加えて、刃部を作出している。打面は折断により除去されている。調整剥離は平坦剥離に近いもので、刃部は非常に緩斜度に仕上がっている。右図の下端部に見える剥離痕は、他の面と比較して風化が浅いが、調査中の傷か否か判別できない。

33は、素材剥片の両端を折断し、背面からの調整剥離により刃部を作出している。31と似た形態を示す。

32は、左図の左側縁には急角度で、また右図の右側縁に平坦剥離を見せる。刃部は、右図の左側縁上方に設けられ、細かい調整剥離により弧状の刃縁となる。折れは節理面からなる。

34は、素材剥片の背面左側縁に、緩斜度の調整剥離により刃部を作り出している。また、刃部に接する形で微細な剥離痕が不連続に見られる。

#### 鋸歯縁石器 (Fig. 30-35~37)

素材剥片に調整剥離を加え、その側縁に鋸歯状の刃縁を有する石器を鋸歯縁石器とした。

35は、下半に折れ面を有する剥片を素材として、その折れ面から2回、背面から1回の調整剥離を施して刃部を作出している。

36は、サヌカイト製剥片を素材として、その打面側に背腹両面から急角度の調整剥離を加えて、刃部を作出している。

37は、横長の剥片を素材としているが、背面に周囲からの調整剥離痕を、腹面にも平坦剥離の痕跡を見せ、尖頭器未製品を素材とした可能性も残る。背面左側縁上方に、細かく急角度の調整剥離によって刃部を作出している。

#### 挟入搔器 (Fig. 31-38~40)

素材剥片に調整剥離を加え、その側縁に挟入状の刃縁を有する石器を挟入搔器とした。

38は肉厚な方形の剥片を素材として、腹面右側縁に背面から1回の剥離によって、挟入部を作出している。打面・打瘤は残されている。礫面には、河川の転磨によると考えられる径1mm程度の裂痕が観察される。

39は、茶灰色のチャート製であるが、節理が縦横に入る極めて粗悪な石質である。肉厚の方形の剥片の末端部に、非常に細かい調整剥離を加えて挟入部を作り出している。この挟入部の隣にも、背面に1~2mm前後の微細な剥離痕が連続している。

40は、緑灰色チャートの縦長剥片を素材として、背面側から1回の調整剥離によって挟入部を作出している。側縁全体に1mm以下の微細な剥離痕を持つ。上下両端には折れ面を持つ。

#### 楔形石器 (Fig. 31-41)

41は、サヌカイト製資料としては、大形の剥片を素材としている。素材を縦にちぎ、上下両端に階段状の寸詰まりの剥離痕を留めている。

#### 二次加工のある剥片 (Fig. 31-42~Fig. 32-54)

剥片の縁辺に、連続してあるいは不連続な調整剥離痕を持つが、スクレイパーのような整った刃縁を

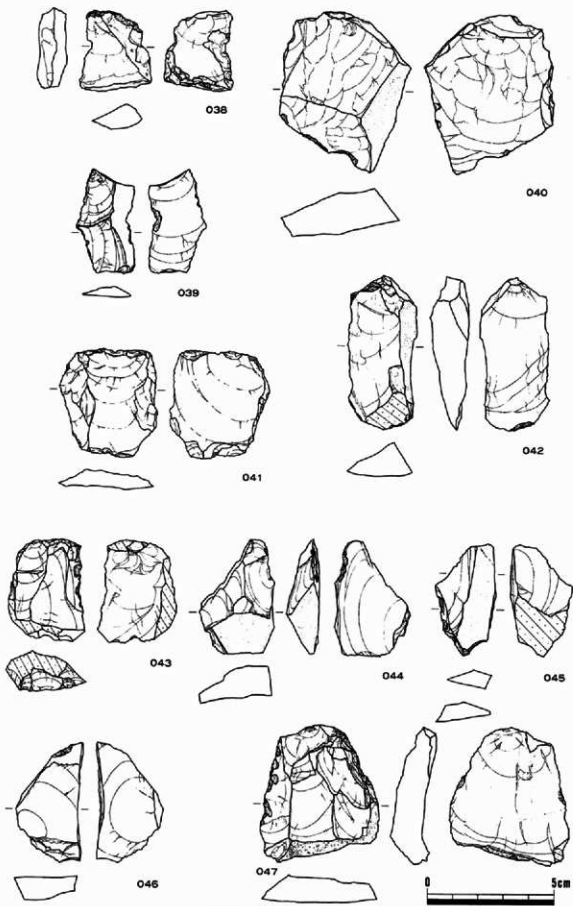


Fig. 31 國領遺跡出土石器 7

作出していないものを、二次加工のある剥片として一括した。

二次加工のある剥片に使用されている剥片は、希に 42・43 のように両側縁が並行する整った剥片もあるが、大きさ・形状共にバラエティーに富んでいる。また打面・打瘤もそのまま残されているものと、折れによって消失しているものの両方がある。

42 は、節理が目だら、光沢のない緑色のチャート製で、縦長剥片の末端部に細かい調整剥離を見せる。また、その剥離痕に連続する形で径 1mm 以下の微細な剥離痕が認められる。

43 は、石核の節理面を側面に取り込んだ内厚な縦長剥片を素材として、その末端に腹面より急角度の調整剥離を施している。この調整剥離により、末端の正面観は著しい屈曲を見せる。調整剥離の部位・角度からみて、スクレイパーの未製品と考えることも可能であろう。末端のほかにも、背面右側縁に不連続な調整剥離を見せる。

44 は、横長剥片の末端に背面側からの細かい調整剥離を見せる。打面も折れ面によって消失している。この折れ面には細かい剥離痕が伴い、意図的な折断と見ることができよう。

45 は、接合資料から剥片剥離に際して、縦割れをおこしたものを素材としていることがわかる。左図の左側縁の角度のついた素材面と、末端部に調整剥離がみられる。また、左図上方のシャープなエッジには、1～2mm 前後の微細な剥離痕が観察される。

46 は、下半を欠損する剥片の背面右側縁に、2回の調整剥離が見られる。

47 は、末端に最大幅を持つ剥片を素材として、その両側縁に調整剥離が見られる。左側縁の調整剥離が顕著ではあるが、不連続である。

48 は、打面部が折れによって消失した剥片の背面右側縁に、腹面側から細かく調整剥離が加えられている。この調整剥離により、背面右側縁の正面観は内湾する。

49 は、サヌカイト資料で、これも打面部は折れによって消失している。折れ面に対して、背面側からの調整剥離が観察される。

50 も、折断によって全体の形状を整えた後、右図の上部に 2 枚の剥離痕が観察される。なお、左図の左側縁に微細な剥離痕を見せる。

51 は、下半を欠損するが、両側縁がほぼ並行する良好な剥片を用いている。調整剥離は腹面の打面付近の側縁に見られ、また背面には腹面の調整剥離に連続する形で微細な剥離痕が認められる。

52 は内厚大形の剥片を素材として、図で言えば腹面の縦方向に 2 回の調整剥離を加え、打面・打瘤を除去し、側縁に数回の加撃をおこない抉入状の側縁としている。背面に残る右側縁からの平坦剥離が最終の調整剥離となる。また、素材の末端には 2mm 程度の微細な剥離痕がかなり顕在化して認められる。

53 は、背面の打面部から折れ面にかけて、急角度の調整剥離が認められる。調整剥離の間隔が広く、縁辺の正面観はジグザグ状となる。

54 は、打面・打瘤は折れにより消失している。腹面の左に広がる石核の面に、背腹両面から調整剥離が加えられている。石核の面からの調整剥離は緩斜度で、背面からは急角度の調整剥離となる。

使用痕のある剥片 (Fig. 32-55～Fig. 33-67)

剥片の縁辺に 1～2mm 前後の微細な剥離痕を、連続あるいは不連続に有するものを使用痕のある剥片として扱う。微細な剥離痕のあり方では、連続するもの・不連続なもの、急角度を見せるもの、また微細な剥離痕の残された縁辺がジグザグ状になるもの・抉入状になるものなど様々である。これら微細

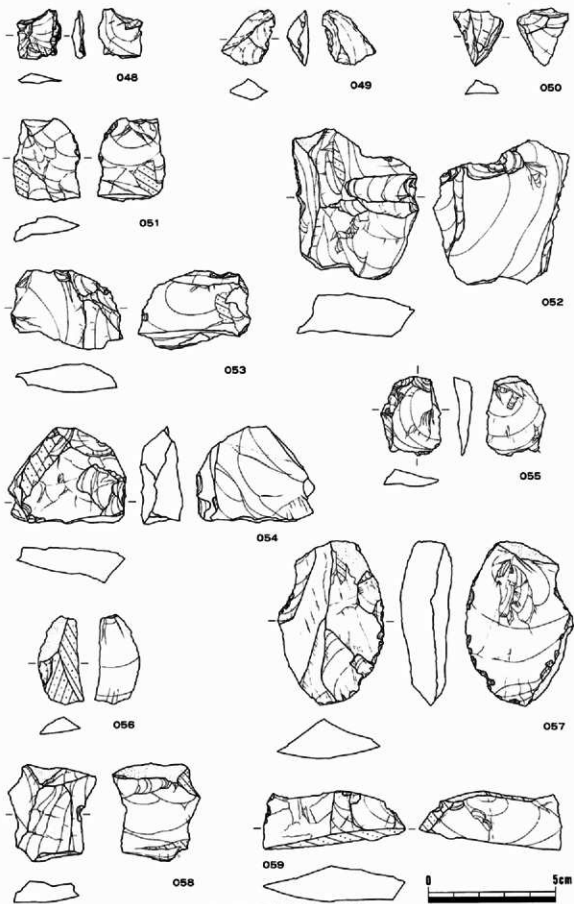


Fig. 32 圍領遺跡出土石器 8



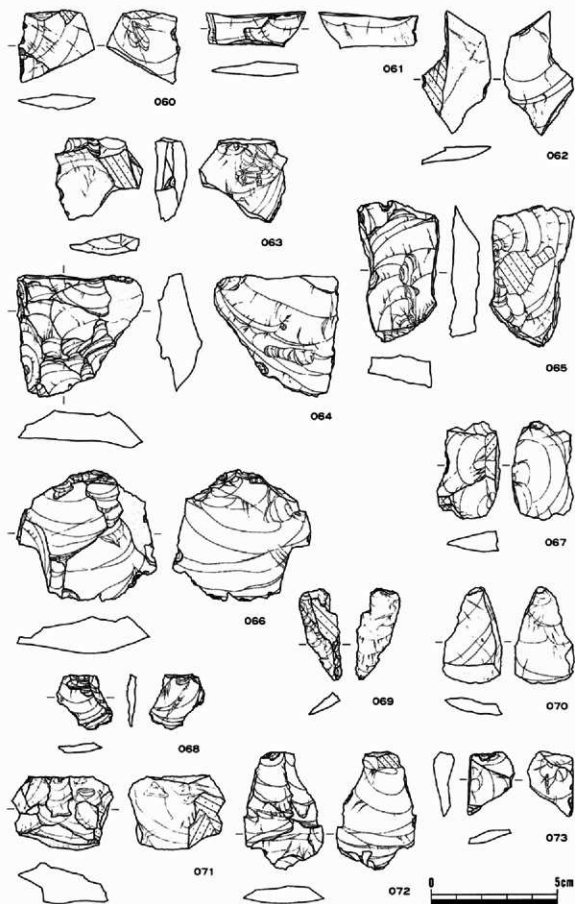


Fig. 33 閩侯遺跡出土石器 9

な剝離痕の形成は使用によるものばかりでなく、遺物の埋没過程をはじめとして様々な要因が考えられよう。ここでは、遺物整理作業中に使用痕のある剝片と分類したものを図に提示し、説明を加えることにする。

55 はやや縦長の剝片を素材に、背面左側縁に図化できない程の微細な剝離痕を有する。

56 は、背面がほぼ碌面と節理面によって覆われる縦長剝片の、背面に唯一残されている剝離痕のある部位の側縁に、径1mm前後の微細な剝離痕が見られる。緑灰色のチャート製である。

57 は肉厚な縦長剝片を用い、背面右側縁のほぼ全体と、その腹面側・左側縁の上部に1~2mmの微細な剝離痕を有する。特に、背面右側縁に当たる部位の、微細な剝離痕は顕著であり、側縁の正面観・側面観ともにジグザグ状を呈する。

58 は、末端がヒンジフラクチャーを見せる、肉厚な剝片の背面両側縁に、1mm以下の図化できない程の微細な剝離痕を有する。種の摩耗の著しい資料で、微細な剝離痕も何らかのダメージによる可能性がある。

59 は緑色のチャート製で、やや肉厚な剝片である。打面近くで節理によって下半を大きく欠損している。微細な剝離痕は、背面左側縁に2mm前後で連続して見られる。

60 も打面近くで節理によって下半を欠損している。微細な剝離痕は、背面左側縁に2mm前後で連続して見られる。

61 は、上下両端に折れ面を有する剝片の腹面右側縁に、1~2mm前後の微細な剝離痕が連続して見られ、側縁の正面観は挟入状となる。

62・63 は下半に折れ面を有する剝片を素材に、62 は腹面左側縁に1mm以下の微細な剝離痕が連続してある。63 は背面左側縁に、背面側は不連続に、腹面側は連続して1mm以下のそれを見せる。

64 は肉厚の剝片の末端に、微細な剝離痕が連続している。

65 は肉厚の横長剝片の右側縁に、1~2mmの微細な剝離痕を持つ。

66・67 は剝片の末端に微細な剝離痕を有する例で、66 は大形の剝片のほぼ周囲に微細な剝離痕が見られるものの、末端の背腹両面に残された1mm程度のそれが顕著である。67 は横長剝片の末端におなじく、2mm前後のものを見せ、縁辺の正面観が挟入状を示す。

#### 剝片・石核 (Fig. 33-68~Fig. 36-90)

本遺跡より出土した剝片の形状は、縦長・横長・方形に近いものなどバラエティーに富む。また器厚の点からもそれが薄いもの・肉厚なものと同様に乏しいと言ってよい。これら残された剝片の大きさについては、(Fig. 36-90)が大形の部類であり、尖頭器の素材になるような剝片は乏しいといえよう。剝片については、16点を図示した。

82 は、打面と作業面とが入替わる交互剝離を示す石核であるが、作業面に残る剝離痕は、末端が階段状剝離を見せる寸詰まりなものである。

83 は灰黒色チャートの亜角礫をもちいる。平坦な節理面を打面として、剝片剝離作業が進んでいる。82同様作業面に残る剝離痕は寸詰まりで貝殻状となる。裏面は非常に複雑な様相を示すが、おそらくチャート特有の割れを示す1枚の剝離面と思われ、力は右図の右下より加わっている。

84 は、広く両面に節理面を見せる、亜角礫の小口の1面を打面として、表裏の節理面が作業面となっている。小形の方形の剝片の剝離痕が観察される。碌面には、激しい転磨を受けたと思われる1mm程度の裂痕が目につく。

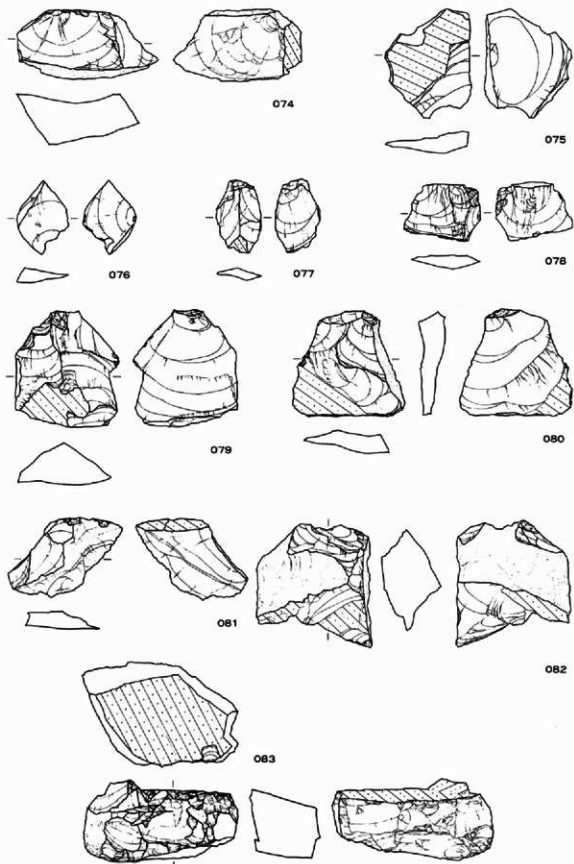


Fig. 34 固頓遺跡出土石器 10



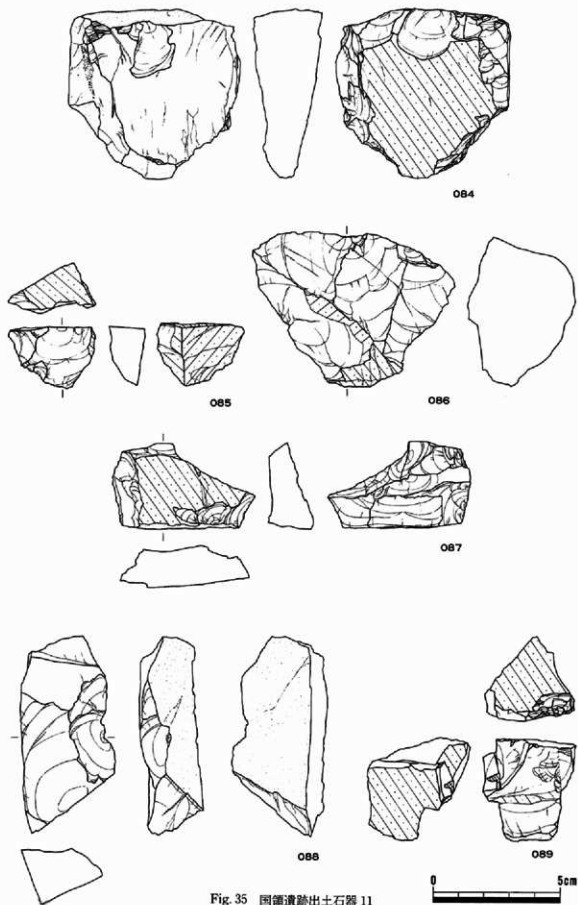


Fig. 35 围坝遗址出土石器 11

85 は作業面のほかは全て節理面を持つ。打面はこの節理面上を転位するが、作業面は1面である。まず、右図に広く残る節理面を打面とし、次いで上面からの剥離へと進んでいる。

86 は拳大の歪角隙をもち、隙面を打面とし節理面を作業面に設定している。85 同様に、打面は隙面上を移動する。まず、左図の左

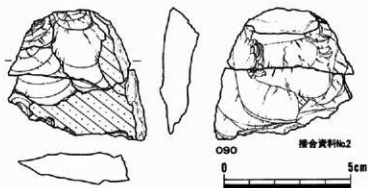


Fig. 36 国領遺跡出土石器 12

を加撃して1枚の剥片を剥離したのち、上面に打面を転位して剥片剥離が進む。

87 は左図の下方にポジティブな面が見え、分割隙を素材としたものであろう。剥片剥離作業は主として、左図の右側面・上面を形成する折れ面を打面として、もとの分割面が作業面となって進む。

88 は板状隙を素材とする。長軸方向の両端に折れ面が見え、この折れ面と隙面とが打面となる。母核 (Fig. 35-89)

89 は母核とした。三角柱状の分割隙である。正面上方からの打撃を示す面がポジティブな面、分割面であろう。上面の節理面に細かく寸詰まりの剥離痕が多く残されているが、打面を形成するためのものであろうか。

#### 尖頭器調整剥片 (Fig. 37-91~Fig. 39-159)

尖頭器製作に係わる調整加工によって生じる剥片を、尖頭器調整剥片として一括する。本来ならば、個々の遺物について記述をするべきではあるが、紙幅の関係もあり、ここでは属性分析を中心として述べることにする。なお、資料数の少ない第4ブロックは分析の対象から除外した。図版は背面の構成をもとに以下のように配列した。なお、103・105・106・120・141・144・145 はサヌカイト資料である。

1. 押圧剥離によると考えられるもの。
2. 尖頭器製作によって生じる側縁を取り込む形で、尖頭器の主軸に対して縦に剥離されたもの。
3. 背面に隙面を留めるもの。
4. 背面にポジティブな面を有するもの。
5. 背面を構成する剥離痕の剥離方向が主要剥離面のそれと同方向を示すもの。
6. 背面を構成する剥離痕の剥離方向が主要剥離面のそれと同方向と逆方向を示すもの。
7. 背面を構成する剥離痕の剥離方向が主要剥離面のそれと同方向と横方向を示すもの。
8. 背面を構成する剥離痕の剥離方向が主要剥離面のそれと同方向と逆方向と横方向を示すもの。

属性分析は、打面形状・末端形状・背面構成・長幅比についておこなった。以下、各項目に従って述べていくことにする。

#### 1. 打面形状

凡例の通り7種類に分類した。(Fig. 40-1)

- A. 隙面打面
- B. 節理面打面
- C. 1枚の剥離痕もしくは剥離面

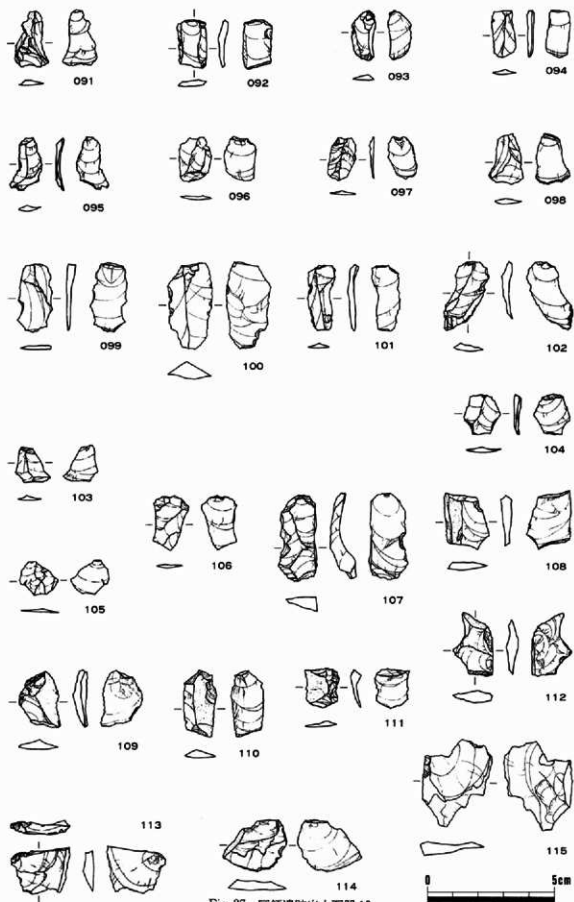


Fig. 37 關嶺遺跡出土石器 13

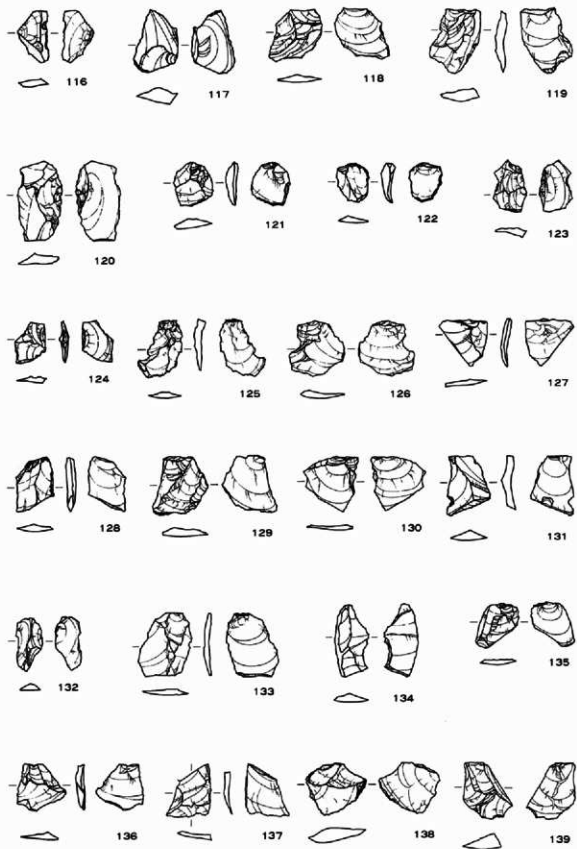


Fig. 38 固領遺跡出土石器 14



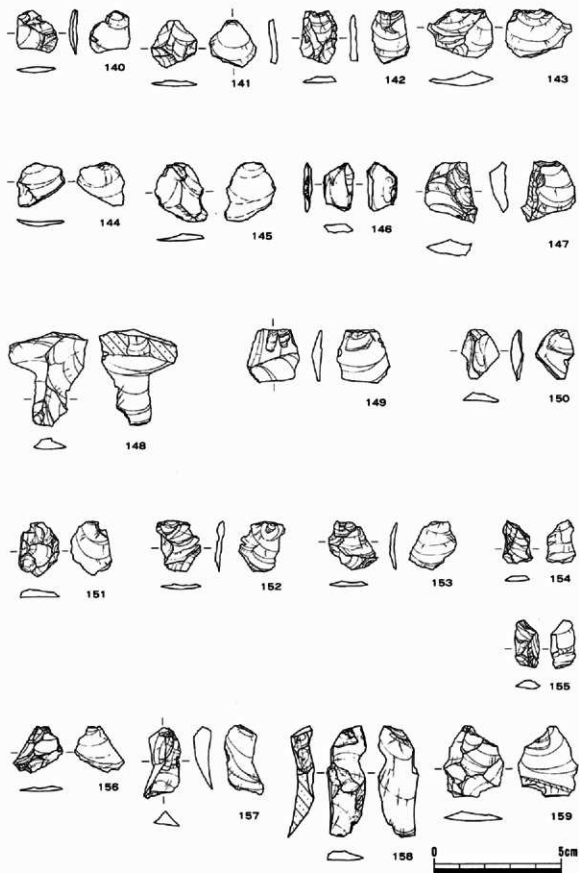


Fig. 39 高河遺跡出土石器 15



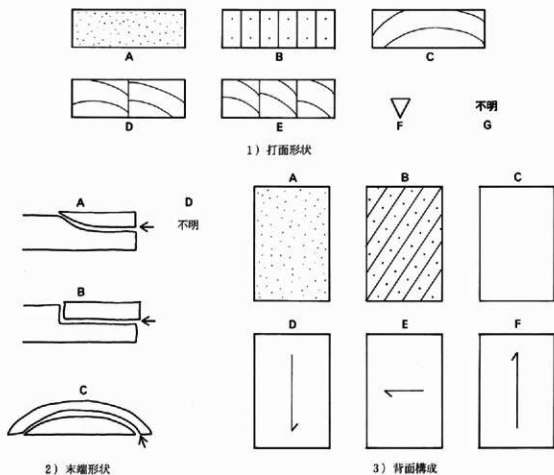


Fig. 40 出土石器属性分析凡例

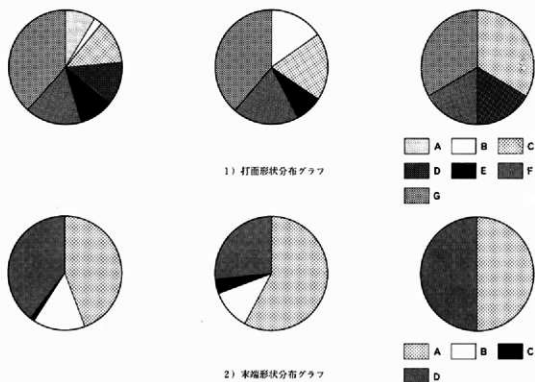


Fig. 41 尖頭器調整剝片打面・末端形状分布グラフ

- D. 2枚の剝離痕もしくは剝離面
- E. 3枚以上の剝離痕もしくは剝離面
- F. 点状打面
- G. 不明

各ブロック別にその (%) を集計したものが (Fig. 41-1) である。

各ブロックともに不明なものが多く、打面がはじけたり、打面部を欠損するものがいかに多いかということが読み取れよう。このほかでは、単剝離面打面もしくは点状打面のものが多く、礫面打面の割合が低い。特に礫面打面のものが存在するのは第1ブロックだけであり、第2・第3ブロックには見あたらないことが興味深い。

## 2. 末端形状

凡例の通り4種類に分類した。(Fig. 40-2)

- A. フェザースを示すもの
- B. 階段状剝離を示すもの
- C. 剝片の側面観が弧状を呈し末端に素材の面を取り込むもの
- D. 不明

各ブロック別にその (%) を集計したものが (Fig. 41-2) である。

各ブロックともにフェザースを示すものが、他を圧倒する傾向がある。打面形状と同じく末端形状も、不明のものの数量が多い。階段状剝離を示すものの割合が相対的に低いが、折れ面との見分けがつきにくいものも多く、また尖頭器未製品に残された剝離痕には、階段状剝離を見せるものが多いことから、実際にはBの割合が多くなっていくと思われる。

## 3. 長幅比 (Fig. 42)

各ブロックともに、ほぼ1:1を中心にして分布を示す。尖頭器調整剝片の形状も、方形に近い形状を示すものが多い。これら1群の中で、第1ブロックにおいて2:1のライン付近に分布する1群が存在する。幅においては、各ブロックとも10~20mmのゾーンに集まる傾向が看取できる。

## 4. 背面構成

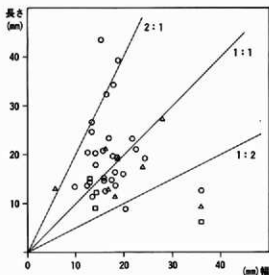


Fig. 42 ブロック別尖頭器調整剝片長幅比

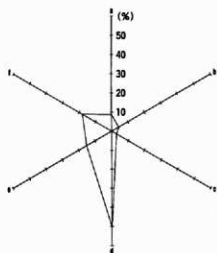


Fig. 43 尖頭器調整剝片背面構成ヒストグラム

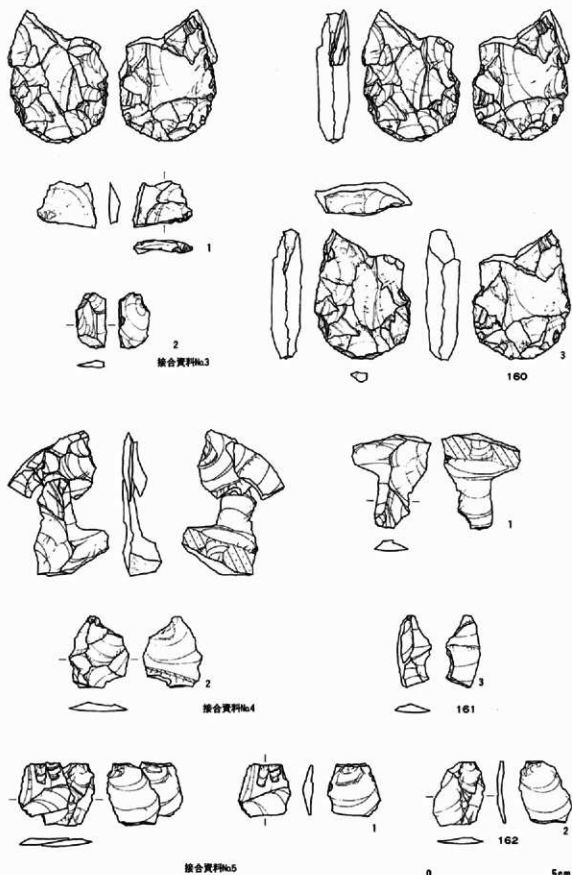


Fig. 44 国領遺跡出土石器 16

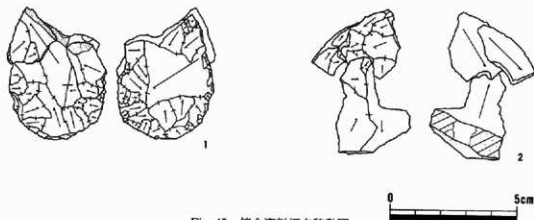


Fig. 45 接合資料打点移動図

各資料の背面を構成するそれぞれの面を、資料から抽出し、主要剥離面の剥離方向を基準に以下の通りに6種類に分類した。(Fig. 40-3)

- A. 稜面
- B. 節理面
- C. ポジティブな面
- D. 主要剥離面の剥離方向と同方向の剥離痕
- E. 主要剥離面の剥離方向と直交する方向の剥離痕
- F. 主要剥離面の剥離方向と逆方向の剥離痕

抽出した各面を集計し、ヒストグラムにしたものが (Fig. 43) である。

Dが総数の51%を占め、他を圧倒する。尖頭器製作の初期の段階を示すと考えられるA・Cを比較すると、Aが9%・Cが3%である。打点の移動を示すE・Fはそれぞれ15%・18%で、打点が尖頭器未製品をはさんで正反対の位置に動くものが若干多い傾向を示す。これらの傾向は、各ブロック別に見てもほぼ同じである。

これらのおおの分析の結果をさらに有機的に結び付け、さらには尖頭器製作工程の復元に、様々な角度から応用していかなくてはならないのであるが、今後の課題としておきたい。

また、本遺跡では尖頭器製作の過程で生じたこれら尖頭器調整剥片の中に、その縁辺に微細な剥離痕を持つものがある。例を挙げれば94・100・101・128・131・148などがそうである。

尖頭器調整剥片を利用して使用痕のある剥片としたと考えられる。

#### 接合資料 (Fig. 44~Fig. 48)

今回の整理作業において21組49点の接合関係を見た。尖頭器製作に関係する資料、剥片剥離作業に関係する資料とを中心に記述する。

#### 接合資料 No. 3 (Fig. 44-160・Fig. 45-1)

尖頭器未製品と尖頭器調整剥片2点の接合である。1の右側の斜め下方向からの剥離面が素材面であり、稜面も有することから、尖頭器製作の初期段階の接合と見られる。3・4の尖頭器調整剥片はともに、尖頭器本体に対して斜め方向への剥離を示す。

#### 接合資料 No. 4 (Fig. 44-161・Fig. 45-2)

尖頭器調整剥片3点の接合である。図の上方からの剥離の後、打点が下方に移動して1が剥離される。再び打点を上方に移して、1の剥片剥離方向とほぼ直行する方向で2・3の剥片が剥離されている。

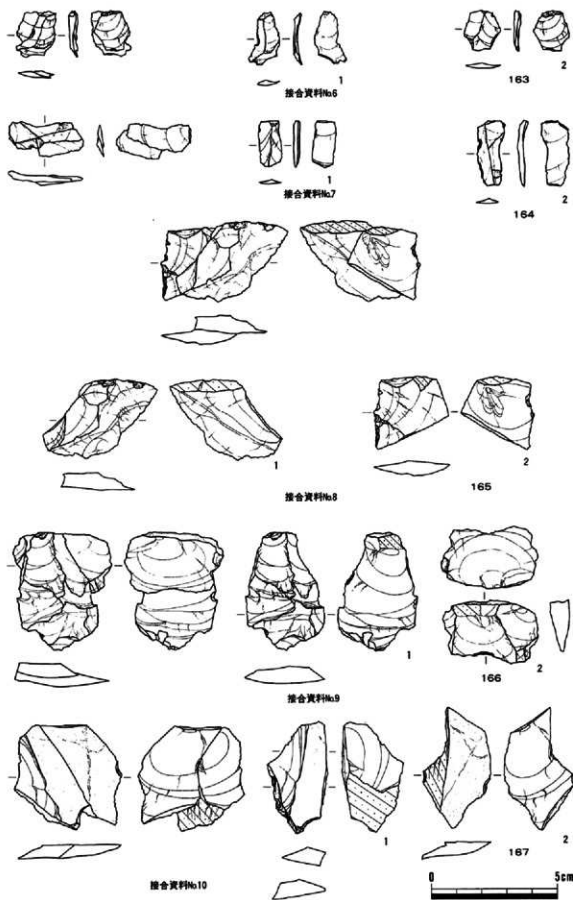


Fig. 46 图頓遺跡出土石器 17

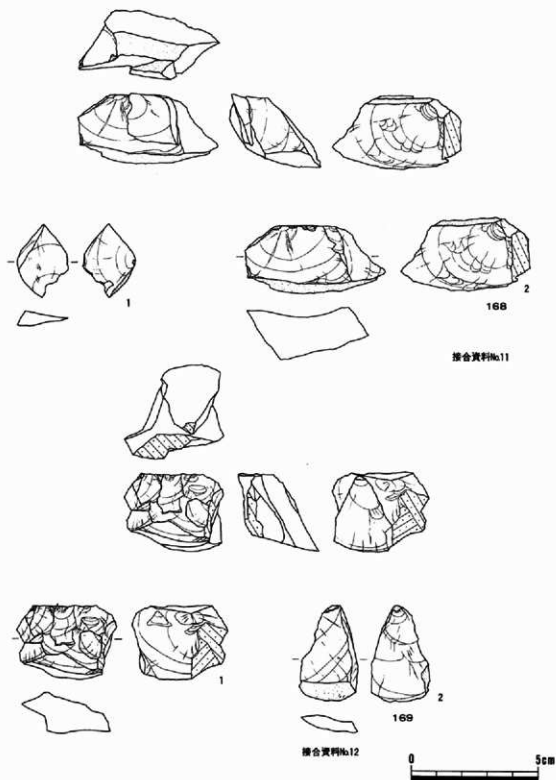


Fig. 47 国領遺跡出土石器 18

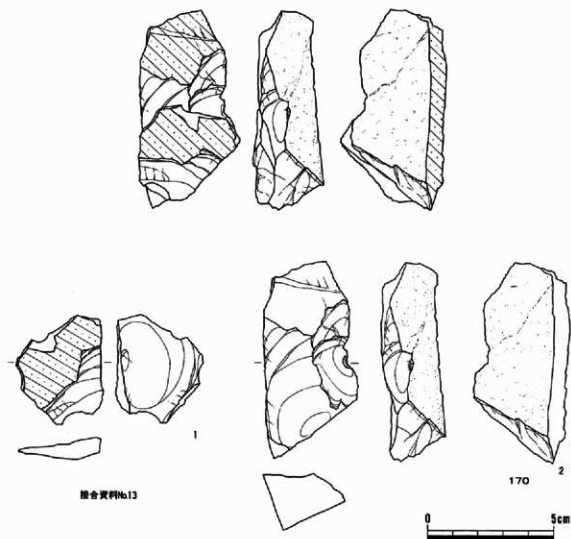


Fig. 48 岡領遺跡出土石器 19

**接合資料 No. 5 (Fig. 44-162)**

尖頭器調整剥片 2 点の接合である。2 点の剥片の剥離方向に対して直行する方向の剥離の後、打点を 90° 移動して、1・2 が剥離されている。

**接合資料 No. 6・接合資料 No. 7 (Fig. 46-163・164)**

両資料とも押圧剥片 2 点の接合である。前者は、先行剥離面の剥離方向と、主要剥離面の方向とが同方向を示し、後者は、先行剥離面の剥離方向が、主要剥離面の剥離方向と逆になっている例である。

**接合資料 No. 8~接合資料 No. 12 (Fig. 46-165~Fig. 47-169)**

いずれも、剥片と剥片との接合資料例である。特に、No. 11・No. 12 は同一母岩資料であり、板状礫を素材として、打面と作業面とが固定されて、主として肉厚な剥片が剥離されている工程を、よく著している。

**接合資料 No. 13 (Fig. 48-170)**

剥片と石核の接合関係である。石核は、礫面と節理面とを持つ板状の礫を素材としている。石核の長軸方向の両端に見える折れ面を打面として、剥片が剥離された後、打面を礫面に移して 1 が剥離されている。

## 4 小 結

### 遺物の分布とブロックの性格

器種として一括した尖頭器未製品であるが、その内容は3者に大別されよう。すなわち、1. 二次加工が進行していない、素材段階に近いもの、2. 二次加工が進行した製品段階に近いもの、3. 加工途上で破損したものである。

これらのうち1、2は、ブロック内でも剥片、碎片が密集した中心部からは、やや離れた位置に分布するという点は既に記載した。一方3は、むしろこうした密集部に分布する傾向が認められる。

その最も典型的な例は、ブロック2北半の、尖頭器密集部であろう。

この尖頭器密集部では、母岩識別作業の結果、6点中1点が他に同一母岩をもたない単独資料、1点が識別不可能であり、3点がそれぞれ母岩14、17、19、22に分類された。

これらの母岩別資料の分布を再検討するならば、識別された母岩はいずれもブロック1に同一母岩の分布が認められた。

母岩14、22では、ブロック1の片縁部に1点の同一母岩資料が分布する。これに対し、母岩17、19では、ブロック1に尖頭器調整剥片、碎片の顕著な集積が認められる。また母岩19では、ブロック3の西端でも、折損した尖頭器未製品1点が検出されている。

母岩21は、尖頭器未製品4点を含む。未製品は、ブロック1に2点、ブロック3、4に各1点が分布している。

尖頭器調整剥片、碎片はブロック1の遺物密集部を中心とした分布を見せており、この中に尖頭器基部破片1点が位置している。一方、先端・基部ともに欠いているが二次加工の進行した尖頭器(No. 252)が、ブロック1の西南縁に位置している。

ブロック2に分布する2点は、尖頭器調整剥片と碎片である。

ブロック3には二次加工の進行していない未製品1点を含む、合計3点が分布しており、いずれもブロックの中心に位置する。またブロック4には、やはり二次加工の進行していない尖頭器未製品と尖頭器調整剥片が分布している。

このような分布の傾向から、器種別分布の項でも記した各ブロック内の尖頭器未製品および関連遺物の分布状況を推定するならば、次のようにまとめられる。

ブロック1における顕著な尖頭器調整剥片、碎片の集積と、特に母岩17、19に見られるような分布傾向は、ブロック1の中心部での盛んな尖頭器製作活動と、そこで製作された半製品(未製品)のブロック辺縁部、特にブロック2北半への移動を示しているものと思われる。

一方、サヌカイト有舌尖頭器は、その製作を示す押し彫りによる微小な剥片、碎片が認められないことから、遺跡内ではほとんど製作されていないものと考えられる。その分布領域を見るならば、ブロック2北半、ブロック4、およびブロック1西端にあって、チャート製尖頭器未製品のうち先に1.2に分類したものの分布領域に共通している。有舌尖頭器はすべて破損品であるが、遺跡内での製作が認めにくい以上、それは使用に伴う破損と見なければならぬ。破損のほとんどが先端部であることも、これを示唆している。使用の結果、回収されて遺跡に持ち込まれた有舌尖頭器と、チャート製尖頭器未製品の分布傾向の一致は、両者が分布する空間が、石器製作活動に直接かかわらない日常的活動の場であった可能性を示すものであろう。



他の器種では、特に使用によると思われる磨耗の進んだエンドスクレイパーが、ブロック2の北半に分布することが注目される。これ以外不定形なスクレイパー類では、分布が上述の領域とは必ずしも合致しておらず、むしろ二次加工のある剥片の分布領域に似た分布を見せている。

#### 土坑・配石とその性格

今回の調査で検出された土坑は、形態・深さ・出土遺物等に共通性が乏しく、その機能は明らかではない。尖頭器未製品を検出したSK-104では、土坑内埋土の脂肪酸分析を実施したが、植物に由来する脂肪酸が検出されたのみで、土坑の機能を特定するには至らなかった。

他の土坑では分析はおこなわなかったが、埋土の性状に大きな相違点は認められなかった。

出土遺物から見ると、SK-102、104、105、107での出土遺物は、おおむね尖頭器製作に伴う遺物の範疇に含められようが、その場での製作、ないしは一括した廃棄を示すような集中した出土状況は認められない。

配石は、その認定基準自体がなお検討を要するかもしれない。配石としてあげたものの様相は一様ではなく、集中した遺物を伴うもの、礫のみが集中するもの、散漫な遺物を伴うものなどが認められる。当然のことながら、前者はブロックの中心部に、後2者はブロックの辺縁部に位置する傾向があり、機能的に同一であると考えすることは困難である。特に後2者の位置が、前段で示した「石器製作活動に直接係わらない日常的活動の場」にあることは指摘しておきたい。

現在のところ、土坑・配石の機能を推察する根拠は乏しく、将来の検討課題として上げておきたい。

#### 石材について

本遺跡で使用された石材は、チャートとサヌカイトの2種類である。石材比率は、比較的入手が容易であったと考えられるチャートが圧倒的に多く、全資料中の95%を占めている。しかし本遺跡で使用されたチャートは、節理が顕著であり、石質は良いとは言えない。礫面に河川による転磨を受けたと見られる裂痕を留めるものも多く、おそらく近隣の河川から採集されたものと考えられるが、肉眼的な観察でも近接する七日市遺跡のそれと比較すれば良質の石質を持つものは少ない。この現象は、国領遺跡が形成される時点において、すでに近隣の良質のチャートの採集が、困難になったことを示すものであろうか。

器種別にみると、有舌尖頭器は全点がサヌカイト製であるのに対し、尖頭器・尖頭器未製品は全点がチャート製であり、これら2つの器種間で石材の明確な「使い分け」が看取される。他の器種では楔形石器を除けば全資料の石材比率に比例するかのようになり、チャート製遺物がサヌカイト製遺物を凌駕する。

#### 石器組成

石器組成は遺物の項で述べたとおり、ナイフ形石器・石鏃・有舌尖頭器・尖頭器・尖頭器未製品・スクレイパー・鋸歯縁石器・抉入掘器・楔形石器などのツールのほか、二次加工のある剥片・使用痕のある剥片・剥片・石核・母核・尖頭器調整剥片からなる。これらの内、特に問題となってくるのはナイフ形石器であろう。ナイフ形石器は下半を欠損する1点のみの出土であり、他の器種の点数と比較しても安定しているとは言えず、有舌尖頭器・尖頭器との共存性を積極的に論じえない。逆に、他の遺物の中に、このナイフ形石器に伴う遺物が存在する可能性は否定できないが、本遺跡のブロックの中で安定した存在を示す遺物である、スクレイパー・二次加工のある剥片などを近接する七日市遺跡の第2・第3文化層のそれと比較した場合、大きさ・形状・調整加工のあり方など共通性を見いだすのが、有舌尖頭器・尖頭器を中心とする石器群の中で捉えられよう。スクレイパーでは藤岡山遺跡で刃部に相対

する刃に折れ面を持つサヌカイト製の削器が報告されるが、本遺跡でも折れ面のリングが取戻しその付近に細かい剝離痕が付着する折れ面を持つものが存在する。有舌尖頭器・尖頭器・これらスクレイパーを中心の利器として、これに鋸歯縁石器をはじめとする他の器種が付随して、本遺跡の石器群を構成すると理解する。

## 尖頭器

### A = 素材について

先述したように本遺跡の有舌尖頭器はサヌカイト製で、尖頭器・尖頭器未製品はすべてチャート製である。尖頭器未製品から尖頭器の素材を考えると、板状の礫を素材とするものと剝片を素材とするものとの2つに大別できよう。これらの内、剝片を素材とするものは素材剝片の剝離方向の主軸を尖頭器の主軸に当てるものが3点で、素材剝片を横位置に用いるものが4点である。先述した通り、本遺跡で出土した剝片には大形の部類に属するものは量的に少なく、また石核の大きさ、石核に残された剝離痕にも尖頭器の素材となりうるような剝片が得られたとは考えにくい点が、問題点として指摘できよう。

### B = 形状について

本遺跡の尖頭器の形状については、製品としてほぼ仕上がった資料がないことから、正確にその形状を復元することは困難であるといえるが、尖頭器未製品の長幅比をもとに、本遺跡で製作されたであろう尖頭器の形状を類推したい。(Fig. 49) 有舌尖頭器・尖頭器・尖頭器未製品の長幅比を表したグラフである。○は有舌尖頭器、●は完形の尖頭器未製品、▲がその欠損品であることを示す。有舌尖頭器の分析対象は、わずか4点であるがまとまりを持つ。上半を欠損しているため、幅の点において斉一性を指摘できる。尖頭器未製品は完形のものが長さ40~65mm、幅40mmを中心として広がりを持つものに対して、欠損品で幅30mmを中心とする一群がある。これらの内、完形品では素材自体がほぼその大きさを示しているものがあり、また欠損品の中にその2/3が残されているものがあることを考えれば長さで

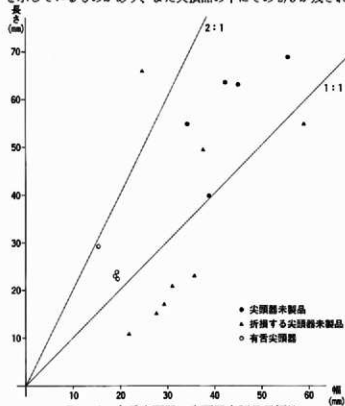


Fig. 49 有舌尖頭器・尖頭器未製品長幅比

50mmを中心とする1群と20~30mmを中心とするものとの2群の尖頭器が国領遺跡を形成した人間の道具箱の中に存在したのではないかと類推できる。

### C = 尖頭器の製作行程

本遺跡から出土した、尖頭器未製品および尖頭器調整剝片でその製作行程を簡単に復元してみたい。有舌尖頭器については、おそらくサヌカイト製剝片を素材として調整剝離<sup>3</sup>、押圧剝離を加えて、最終段階で舌部付近に挟り込みを持たせて、返刺<sup>2</sup>を作出している。尖頭器は素材に対し、打点を頻りに動かしながら平坦剝離を中心とした調整剝離<sup>4</sup>を施し、素材の厚みを減しながら形状を整えて、押圧剝離<sup>5</sup>が施されている。

## 注

1. 本遺跡でも大量のチャート礫を採集しているが、節理が顕著なものが多く、素材のチャート礫が現国領川の近辺で採集された可能性も残される。
2. 楔形石器に使用されているサヌカイト製剥片はその大きさの点で、他のサヌカイト製造物との差異が指摘できる。
3. サヌカイト製の調整剥片の中に、礫面をもつサヌカイト製造物が希であることから原礫を素材としたとは考えにくい。
4. この平坦剥離を施す過程で著しい階段状剥離の跡が残され、この階段状剥離が原因となって尖頭器未製品として残されている例が多い。
5. 岐阜県の糟淵遺跡の報告では、ある程度整った尖頭器の素材から、最終段階で有舌尖頭器と尖頭器とが製作される工程が図示されているが、本遺跡では石材、形状などからみても有舌尖頭器と尖頭器との製作が技術的にはほぼ同じ工程を進めながら、別途に持たれたと考えられる。

岐阜市教育委員会 「糟淵遺跡」1989

## 凡例

本文中の表で用いた略号は下の通りである。

TP：有舌尖頭器 PO：尖頭器 KN：ナイフ形石器 AH：石錘 SC：スクレイパー NO：挟入石器 DE：齧歯縁石器  
PE：楔形石器 RF：二次加工のある剥片 UF：微細剥離痕のある剥片 PF：尖頭器調整剥片 PR：押圧剥片 FL：剥片  
CH：砕片 CO：石核 CS：破砕礫 HS：卵石・台石

Tab. 7 出土石器観察表

図番号	器 種	出土ブロック	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量 g	石材	母岩№
0 0 1	ナイフ形石器	1	19.7	6.9	3.3	0.4	Ch	---
0 0 2	石鏃	3	17.0	15.6	4.0	0.8	#	---
0 0 3	有舌尖頭器	1	13.2	14.2	3.3	0.6	An	---
0 0 4	#	4	23.8	19.4	3.7	2.1	#	---
0 0 5	#	4	22.9	19.3	4.1	1.7	#	---
0 0 6	#	2	28.9	15.1	3.6	1.8	#	---
0 0 7	#	ブロック外	23.3	19.5	3.8	2.2	#	---
0 0 8	尖頭器	1	13.2	27.8	8.2	3.1	Ch	21
0 0 9	#	1	9.4	20.2	10.4	1.8	#	13
0 1 0	#	3	17.3	29.5	7.3	4.0	#	23
0 1 1	尖頭器未製品	2	25.7	40.8	10.3	12.5	#	51
0 1 2	#	2	81.3	51.4	19.0	94.6	#	14
0 1 3	#	2	58.6	37.5	15.4	39.2	#	46
0 1 4	#	2	74.7	35.7	18.1	43.0	#	---
0 1 5	#	4	63.9	44.7	19.1	54.9	#	21
0 1 6	#	2	57.8	44.5	15.0	45.1	#	17
0 1 7	#	2	104.6	29.3	14.8	86.7	#	---
0 1 8	#	1	79.0	60.9	21.0	76.8	#	11
0 1 9	#	1,2	47.1	32.0	13.6	21.4	#	22
0 2 0	#	2	56.2	44.1	12.7	34.4	#	19
0 2 1	#	3	66.5	24.8	9.0	15.9	#	19
0 2 2	#	SK104	40.1	38.0	11.2	24.1	#	7
0 2 3	#	3	55.0	59.6	17.1	60.9	#	21
0 2 4	#	1	51.4	39.2	13.3	33.1	#	21
0 2 5	スクレイパー	1	26.9	24.3	12.2	5.0	#	51
0 2 6	#	1	43.2	37.6	8.0	13.9	#	11
0 2 7	#	3	61.8	40.6	13.7	44.6	#	17
0 2 8	#	1	35.9	22.9	18.8	9.5	#	---
0 2 9	#	1	23.4	17.0	5.9	1.8	#	51
0 3 0	#	4	31.9	28.3	6.0	7.6	#	---
0 3 1	#	1	25.6	12.4	4.7	1.5	#	40
0 3 2	#	1	34.0	28.1	9.1	8.1	#	10
0 3 3	#	2	29.4	22.6	3.9	2.4	#	20
0 3 4	#	1	29.9	30.2	10.6	7.8	#	31
0 3 5	鉋歯縁石器	1	34.7	23.7	10.5	8.8	#	52
0 3 6	#	1	32.5	31.9	9.2	8.5	An	---
0 3 7	#	1	58.0	42.0	13.5	34.5	Ch	52
0 3 8	挟入掻器	1	31.7	27.8	11.0	9.9	#	6
0 3 9	#	1	35.1	23.5	0.5	4.2	#	51
0 4 0	#	不明	54.1	50.5	17.9	59.3	#	---
0 4 1	楔形石器	1	41.5	37.4	7.2	12.4	An	---

注) Ch はチャート、An はナズカイトを表わす。

## VI 中世遺構面の調査

### 1 概要

中世の遺構面は、北から石風呂地区、蓮町Ⅰ地区、蓮町Ⅱ地区、井森杉地区の4箇所を確認された。遺構の検出状況は井森杉地区・蓮町Ⅱ地区を除き遺構の遺存状況は悪かった。

石風呂地区では、平安時代末から鎌倉時代に比定される柱穴群を確認したが、調査区の西半は東から西へ流れる旧国領川（旧河道1）によって削られている。したがって柱穴群の西側への広がり是不明で、また建物址として識別できる柱穴はなかった。

石風呂地区の南側、国領川を挟んだ蓮町Ⅰ地区は南北朝～室町時代前半の範疇で捉えられる「L」字状の溝（SD01）を中心に柱穴群が分布し、調査区の北端には旧国領川（旧河道2）が東西方向に流れ、「L」字状溝と連結している。この旧河道埋土中からは丹波焼播鉢が数点出土している。

近畿自動車道を挟んだ南側に位置する蓮町Ⅱ地区は、旧国領川（旧河道3）が調査区の西端を南から北に流れ、旧国領川が埋没した後に調査区の北半では掘立柱建物址が2棟（SB01・02）および柱穴群が検出された。調査区の南端では、鍛冶炉（SK01）、木棺墓（SK02～04）が旧河道埋没後掘削されている。この旧河道内からは室町時代初頭の備前焼播鉢が出土している。またSB01からは、南北朝時代後半に比定される丹波焼播鉢が出土している。

この蓮町Ⅱ地区の南側、国領川を挟んだ井森杉地区では平安時代後期葉から鎌倉時代を中心としたSB03～08の掘立柱建物址が6棟検出された。建物址は調査区の南半に集中し、とくにSB04～08の5棟は、ほぼ同一の位置に、僅かに棟軸方位をかえて重複して建てられている。この建物址群の西側および北側には15基の焼土坑が認められる。SB03の柱穴からは瓦器碗・土師器皿が埋納された状態で出土し、地鎮祭の様相を呈している。

以下、石風呂地区、蓮町Ⅰ地区、蓮町Ⅱ地区、井森杉地区の順で個々の遺構について説明する。

### 2 遺構

#### a. 石風呂地区

##### 旧河道1

調査区の東側で、調査区を南西から北東方向に流れる旧河道が検出された。この旧河道は、耕土を除いた段階で確認された。旧河道西側の立ち上がり部分は明瞭に確認されたが、東側の立ち上がりは、河道内の洪水層が厚く堆積し、また河道確認面の土層が洪水層と類似していることから識別が困難であった。

旧河道の西側立ち上がり部分は2段になっており、上段・下段とも鋭角に立ち上がっている。下段の埋土は、粗砂混じりのシルト層で旧河道本来の堆積層である。上段の埋土は砂層・礫層が交互に堆積し、河道内に強い洪水があったことを示唆している。この洪水によって本来の河道の上端幅が拡張され2段の立ち上がりを形成したと理解される。

遺物は旧河道下層（シルト層）より瓦器碗が出土している。また、上層からは、中国製青磁碗の見込み部の周縁を打ち欠いてつくったメンコ（9）が出土している。

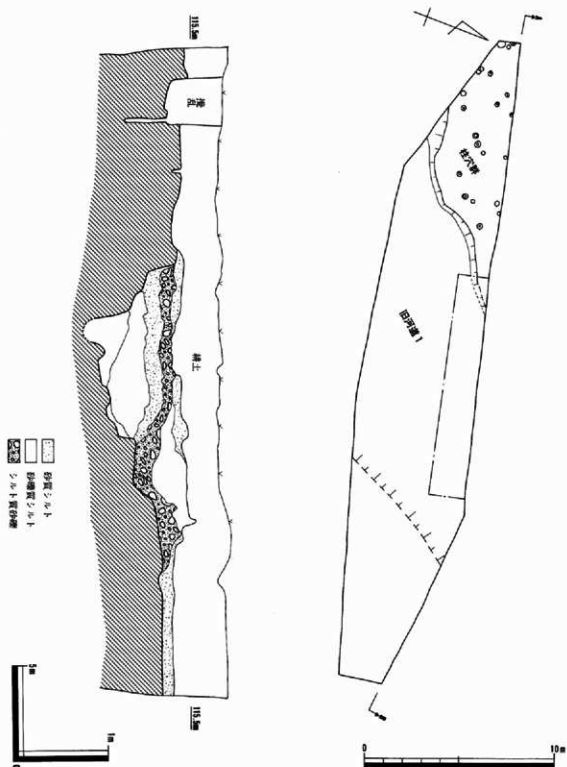


Fig. 50 石風呂地区遺構配置図

#### 柱穴群

柱穴は調査区の西側で11個検出されたが、調査区が狭小なため建物址としての並びは識別できなかった。柱穴掘形の規模は直径20~30cmを測り、平面形は楕円形ないしは円形を呈する。柱の痕跡は直径15cm前後と比較的小さい。検出面からの深さは、浅いもので15cm、深いものでは50cmを測る。遺物は土師器・瓦器の細片が出土したが、図化できるものはなかった。

#### b. 蓬町1地区

蓬町1地区は、当初クロボク層上面で遺構の検出に努めたが、遺構の識別が非常に困難であったため

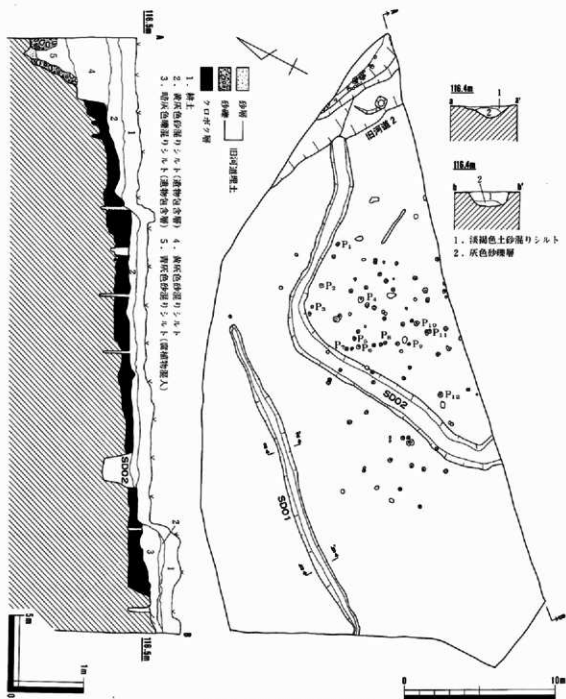


Fig. 51 蓮町 I 地区遺構配置図

クロボク層を除去し、黄褐色シルト層上面で遺構を検出し調査した。この結果各遺構の上端をかなり深く削平する結果になってしまった。遺構のなかでも深度の浅い柱穴は消滅してしまい、建物址の存在は指摘できるが、建物址の内容については明らかにすることができなかった。

#### 旧河道 2

調査区の北東端に位置し、調査区を西から東へ横切る形で検出した。旧河道の北側立ち上がり部分は調査区外に延びているため、旧河道南側の立ち上がり部分を調査した。

旧河道は、2層を除去した段階クロボク層上面より切り込まれているが、検出面は、クロボク層より下層の黄褐色シルト層上面で検出した。旧河道の深さは、クロボク層上面から 1.1m を測り、比較的浅

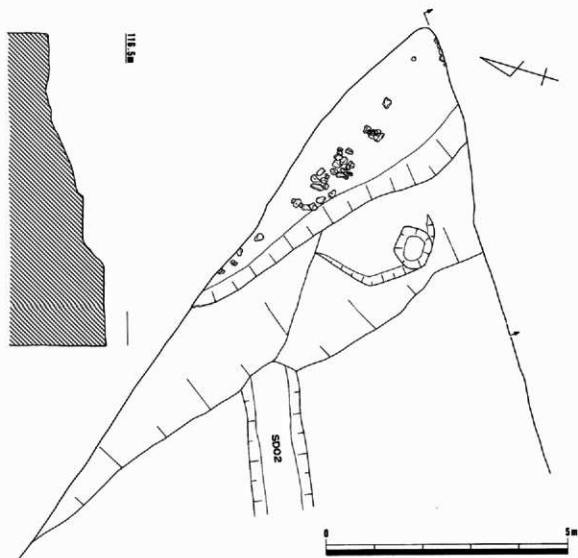


Fig. 52 旧河道 2 平面図

い。河底には東西方向に 1.8 m の間隔で木杭が打ち込まれている。この杭より南側には長さ 15~30 cm 大の河原石が偏在している。とくに河底中央部付近に河原石が集中している。これらの河原石は、その後堆積した洪水層（砂礫層）によって原位置をとどめていないが、これらの杭・河原石は護岸施設の痕跡である可能性がある。旧河道内の埋土は、最下層に腐植物を混入した砂層が堆積し、その後、洪水（砂礫）層が河道西側立ち上がり部分と、河底に厚く堆積している。洪水礫の上層は、腐植物を混入する 4 層が堆積している。この 4 層の上に SD02 の埋土が堆積している。その後、5 層が緩やかに堆積し河道の埋没が完了している。

遺物は最下層より漆碗の破片と土師器皿 (11) が、5 層は (12・13・16) の土鍋、(17) の羽釜をはじめ丹波焼罎鉢 (22) が出土している。上層の 4 層からは土鍋 (14)、産地不明罎鉢 (19) が出土したほか、瀬戸・美濃系不明品 (25)、中国製青磁碗 (26) が出土している。

#### SD01

調査区の西端を北東から南西方向に走る溝である。溝の北東端は調査区内で終結するが、南西端は、調査区外に延びる。溝はクロボク層上面により掘り込まれているが、検出面は下層の黄褐色シルト層上面である。



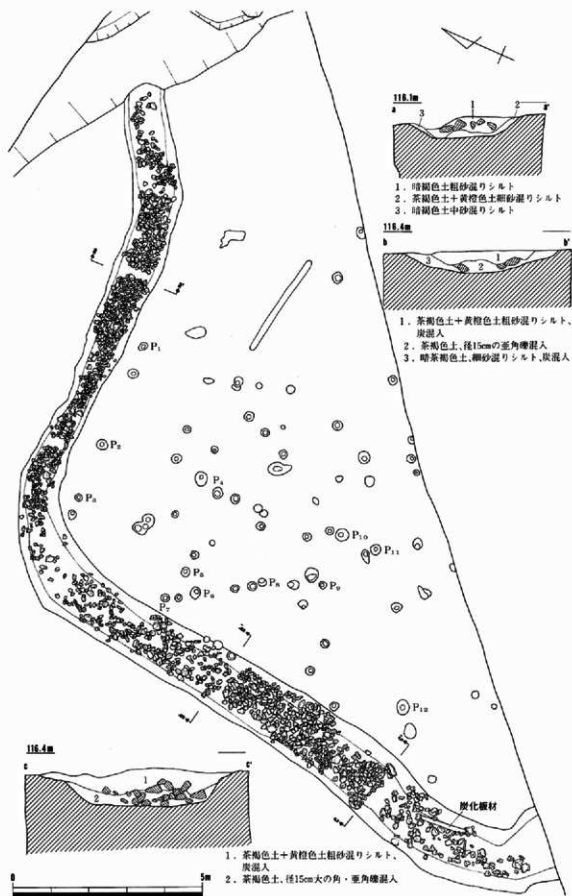


Fig. 53 SD02 および周辺の柱穴群

溝の幅は中央部付近で1 m前後を測り、溝の北東・南西端付近は40～50 cmと幅を減ずる。溝の深さは15 cm前後と浅く、断面形はU字状を呈する。溝の埋土は2層に分かれ、下層は砂礫層(2層)、上層は砂混じりシルト(1層)の順で堆積している。

遺物は上層より(21・23)の丹波焼播鉢が、下層からは(20)の丹波焼播鉢と小壺の底部(24)が出土している。

#### SD02

溝は調査区のはほぼ中央で逆し字状に屈曲した形で検出された。溝の北端は旧河道と連結し、南端は調査区外に延びる。溝はクロボク層上面より掘り込まれているが検出面はクロボク層の下層、黄褐色シルト層である。したがって溝の検出状況は悪く、とくに溝の北辺はその傾向が強い。比較的遺存状況の良い溝の南辺では幅70 cmを測り、深さは溝の南端では、クロボク層上面から42 cmの深さである。溝の断面形はU字形を呈する。溝底の比高は、溝の南端と北端では31 cmの高低があり、北に行くに従って低くなっている。

埋土は3層に分かれる。最下層(3層)は、多量の炭化物が混入した細砂混じりシルトである。2層は5～15 cm大の角・亜角礫が多量に混入している。上層は茶褐色土と黄褐色土が混ざり合い、非常に固く締まっている。以上の土層堆積状況から判断して、2・3層によって溝は人為的に埋められた可能性が高い。

遺物は2層中より瓦質羽釜(18)、土師器皿(10)・土鍋(15)が出土している。また溝底から炭化した板材が出土している。

#### 柱穴群

柱穴群は、その多くがSD02で区画されたなかに位置し、柱痕が確認できたものは66個を数える。これらの柱穴で建物址として識別できるものはなかった。これは遺構の検出がクロボク層上面では困難であったため、下層の黄褐色層まで掘削し、遺構を検出したことに起因している。検出した柱穴はその埋土に炭を含むもの(P1～P12)と含まないものに分かれる。埋土に炭を含む柱穴はSD02より東側に集中し、西側には広がらない。また埋土に炭を含まない柱穴はSD02に切られているものもあり、SD02よりも西側に広がる状況が看取される。このような状況から判断して、埋土に炭をもつ柱穴は、SD02に関連した建物址の柱穴である可能性が指摘できる。炭を含まない柱穴は、SD02より古いことから建物址は少なくとも2時期あったと推察される。柱穴の堀形は直径20～40 cmを測り、円形を呈する。検出面からの深さは5～20 cmと一定していない。確認された柱痕は直径10 cm前後とほぼ同一の法量をもつ。

柱穴内からは土師器・瓦器の細片が出土したが、図化できるものはなかった。

#### c. 蓮町II地区

##### 旧河道3

調査区の西端を現国領川に沿って南北方向に走る形で検出された。旧河道はHラインより北側では大4層を、Hラインより南側では旧河道氾濫層(1層・砂礫層)をそれぞれ除去した段階で、河道の東側立ち上がり部分を検出した。河道の西側立ち上がり部分は調査区外に延びている。旧河道検出面からの深さは南側で70 cm、北側で80 cmを測り、河底の比高は10 cmで南側が高い。

旧河道内の埋土はHラインを挟んで北と南側では堆積状況が異なる。北側では比較的緩やかな埋没状況が見られるのに対し、南側では最下層(3層)より上層は埋土中に多量の礫を含み、河道内の埋没速度が早かったと推察される。

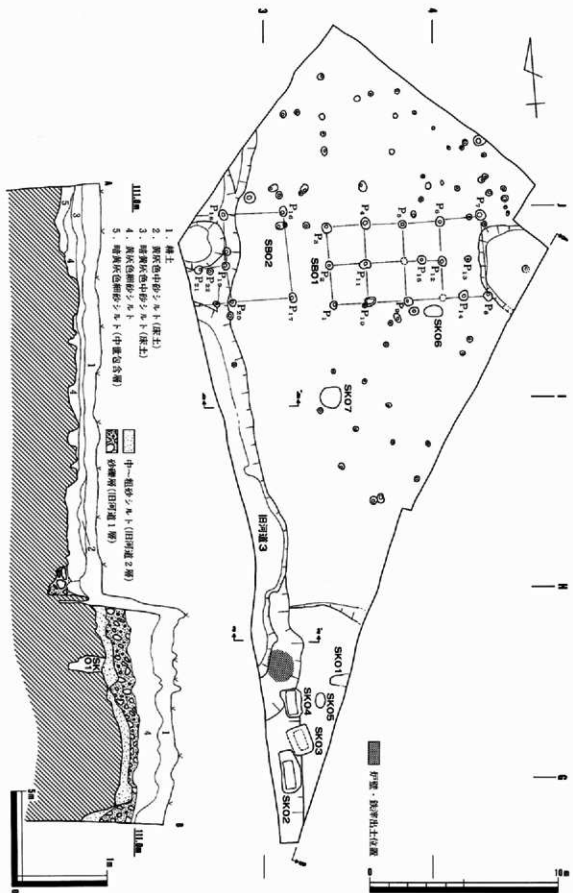


Fig. 54 蓮町II地区遺構配置図

この旧河道と他の遺構と重複関係は明瞭である。旧河道の北側で検出したSB02は旧河道が埋没を完了した4層上面より構築されている。また旧河道南側では旧河道埋土3層の堆積が終了した段階で、鍛冶炉(SK01)が廃棄された際生じた炉壁・鉄滓が投棄されていた。その後、旧河道内に第2層が堆積し、この2層上面より木棺墓(SK02~04)、土墳(SK05)が掘り込まれている。

選町II地区で出土した遺物の多くはこの旧河道内からの出土である。最下層3・6層からは須恵器碗(36)、壺(39)が出土し、2・5層からは土師器皿(27)、瓦器碗(35)が出土している。最上層の1層砂礫層からは土師器皿(28・29)・土鍋(31~34)、須恵器碗(37)・鉢(38)・甕(40・41)が出土している他、備前焼播鉢(42)、丹波焼鉢(43)が出土している。

#### SB01

調査区の北側、I-3・4区に跨って検出した。検出面は4層を除去した段階、黄褐色シルト層上面である。建物址は東西桁行4間(9.6m)、南北梁行2間(4.1m)の規模をもち、東西に長い掘立柱建物址である。建物址は北側桁行P8・P9間と東側梁間P7・P8間の柱穴を欠いており、P10は柱を抜き取っている。柱穴間は、桁行方向で1.9~2.2mと一定ではなく中央の柱間が狭くなっている。梁行の柱間は2m前後である。柱の堀形は大きいもので直径56cm、小さいもので直径40cmの規模で円形ないしは楕円形に掘り込まれている。深さは15~40cmで、建物址各隅に位置する柱穴は深く掘られている。柱の痕跡は直径20cm前後とほぼ一定している。東西方向を棟軸とした方位はN87°Wである。

遺物はP4掘形底面より丹波焼播鉢(44)が出土している。

#### SB02

調査区の西端、I-2・3区からJ-2・3区に跨って位置する。SB01の西側に近接して棟軸をほぼ同一方向にもつ建物址である。建物址の西側は調査区外に延び建物の全容は不明である。検出面は東側

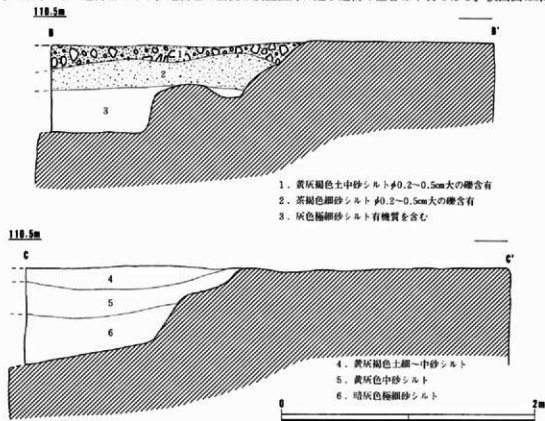


Fig. 55 旧河道3土層断面図

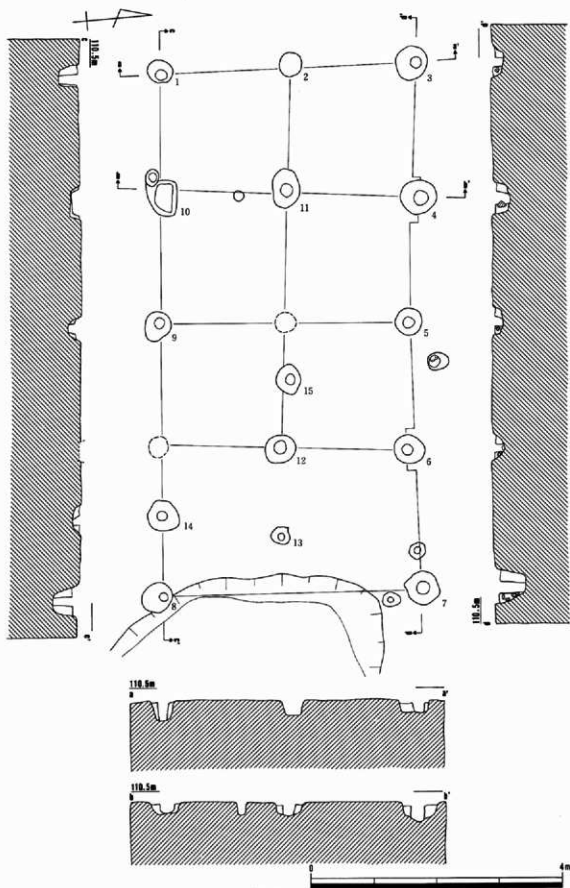


Fig. 56 莲町II地区SB01平面图

身舎部分が4層を除去した段階で、西側は旧河道埋土上面でそれぞれ検出した。建物址の規模は、桁行1間以上(5.2m以上)、梁行2間(4.7m)で、梁間の数値はSB01のそれと近似し、SB02はSB01と同規模の建物と推察される。柱穴の掘形は直径30~50cmの規模で、検出面からの深さは50cmである。確認できる柱痕は直径20cmである。棟軸方位はほぼ東西方向を向く。

遺物は出土しなかった。

#### その他の柱穴群

上記した2棟の建物址以外に54個の柱穴が確認されたが、2棟以外に建物址として識別できるものはなかった。これは柱の掘形が浅く、後世の耕作によって消滅してしまったためと考えられる。現存する柱穴のうちP22堀形内より土鍋(30)が出土している。

#### SK01

調査区の北端、G-3区より検出された鍛冶炉である。鍛冶炉の東半は調査区外に延び、遺構の全容は不明である。検出面は旧河道3の氾濫層(2層:中~粗砂シルト)を除去した段階、黄褐色シルト上面である。鍛冶炉の規模は東西方向0.8m以上、南北方向0.65mで、検出面からの深さは最深部で0.4mを測る。土坑の断面形は歪なU字形を呈する。土坑の縦断面を観察すると、西から東へかけて坑底が低くなっている。坑底の西端と東端では30cmの高低差がある。

東西方向を主軸とした方位はN 84°Wである。

土坑内の埋土は2層に分かれる。上層と下層の層理面は火を受け赤化し、また土が非常に固く締まっていることを考慮すると炉床は下層上面と考えられ、下層以下は鍛冶炉基礎部分と推定される。この下層上面には10×15cm大の河原石(台石にみられる剝離痕跡なし)・炉壁片が出土している。また下層の土坑底面直上より炉壁片が1点出土した。

この炉の西側に位置する旧河道3の3層上面に、多量の炉壁・椀形鉄滓・鍛造剥片が投棄された状態で出土している。出土した炉底部片は融着層と炉床粘土層が6層認められ、少なくとも4回以上炉の修復が行われている。

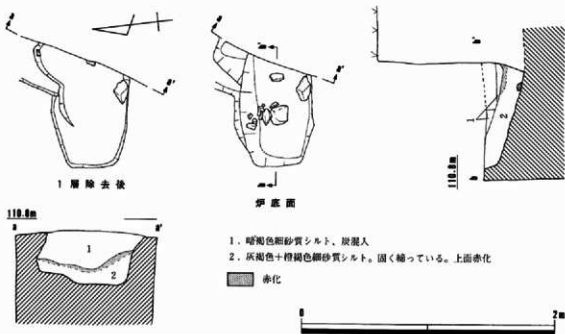


Fig. 57 SK01 平面図

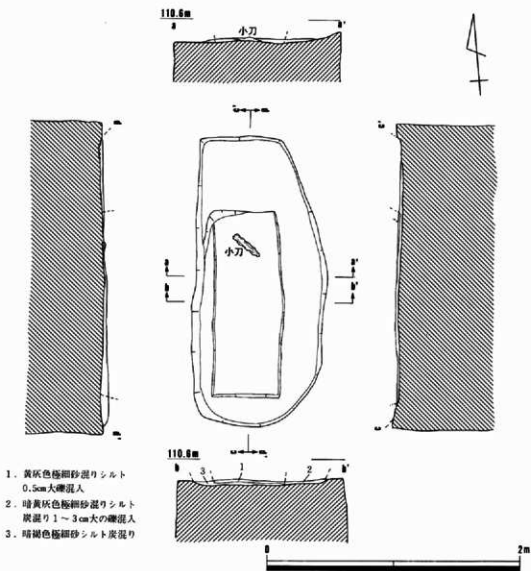


Fig. 58 SK02 平面図

#### SK02

調査区の南端、I・G-3区に位置する木棺墓である。木棺墓は旧河道埋土2層上面より掘り込まれ、遺存状況は極めて悪い。墓壇は西側掘り込み面が直線的な不整楕円形を呈し、長軸2.7m、短軸1.05mを測る。木棺は全長1.45m、北側小口幅0.5m、南側小口幅0.55mを測り、南側小口幅が広い。

木棺の主軸方位はN73°Eである。

木棺の北寄り、棺底面には切先を南東方向に向けた長さ26cmの小刀が出土した。この小刀は錆が著しく進行し、取り上げが不可能であった。

#### SK03

調査区の南端、G-3区に位置する木棺墓である。南側にはSK02が近接している。木棺墓は旧河道埋土2層上面より検出した。墓壇の西側掘り込み部分は破壊を受け、ほとんど遺存していない。墓壇の北東隅は柱穴を切って掘削されている。墓壇は平面形が長方形を呈し、規模は長軸1.52m、短軸は推定で1m前後、深さ0.24mである。木棺は全長が推定で1m前後、棺幅は中央部で0.52mを測る。木棺の主軸方位はN7°Eである。副葬品の出土はなかった。

### SK04

調査区の南端、G-3区より検出した木棺墓である。旧河道埋土2層上面で検出した。南側でSK02・03と近接している。遺存状況は他の木棺墓と比べ良好である。木棺墓の棺内には長さ20cm前後の河原石が投げ込まれ、人為的に破壊されている。墓壇は北西隅が膨らんだ隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.49m、短軸0.9m、深さ0.41mを測る。木棺は北側小口幅が0.57m、南側小口幅が0.5mと北側小口幅が広くなっている。また棺底の南端と北端では6cmの比高差で北端が高くっており、頭位は北側と推定される。

木棺の主軸方位はN53°Eである。

副葬品はなかった。

### SK05

調査区の南端、G-3区に位置する。西側にはSK02~04の木棺墓群、北側にはSK01(鍛冶炉)が近接している。遺構検出面は、旧河

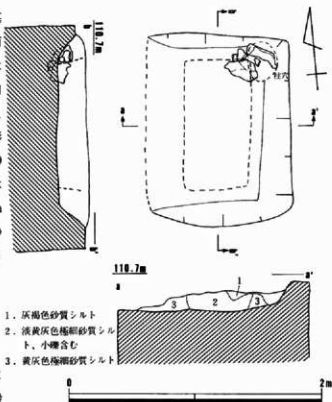


Fig. 59 SK03平面図

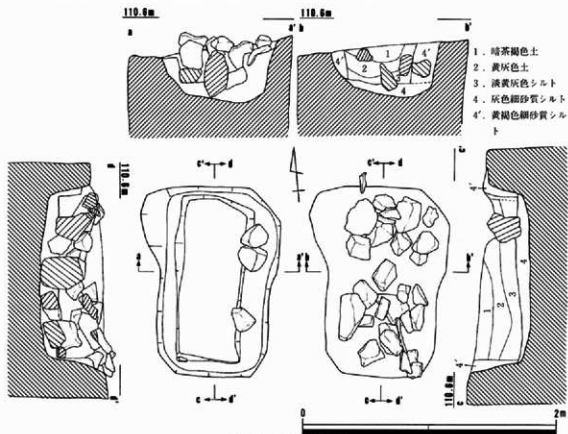


Fig. 60 SK04平面図



道埋土2層上面である。土壌の規模は、長軸0.98m、短軸0.58mを測り、平面形は楕円形を呈する。深さは0.15mと浅い。土壌の西・南側立ち上がり部分はテラス状に掘削されている。主軸方位はN7Eである。

遺物は土師器の細片が出土したが図化できるものはなかった。

#### SK06

調査区の北東側に位置する。長軸を東西方向にもちSB01と平行して並ぶ。検出面は4層を除去した段階、黄褐色シルト層上面である。規模は長軸0.9m、短軸0.5mを測り、西側が狭小な楕円形を呈する。深さは西端で0.3m、東端で0.22mを測り、西端が低くなっている。土坑内西側で河原石が出土した。主軸方位はN84°Wである。

遺物は出土しなかった。

#### SK07

調査区の中央、H・I-3区に跨って位置する埋箱土坑である。3層を除去した段階、4層上面で検出した。平面形および規模は、直径1.1m、深さ0.2mを測る歪な円形を呈する。土坑底面の周縁には幅10cm、深さ3cm前後の凹みをもつ。

土坑内の周壁にはタガ等の痕跡は確認できなかった。また土坑内には長さ7~30cm大の河原石が多量に投棄されていた。

遺物は出土しなかった。

#### c. 井森杉地区

##### 旧河道4

調査区の南東端、A-2区で南西から北東に走る旧河道を検出した。旧河道はII層を除去した段階、黄褐色シルト層上面で確認した。旧河道はSB07・08の掘立柱建物址、SX01の集石遺構を切っている。旧河道内の埋土は2層に分けられる。下層は青灰色細砂混じりシルトが5cmの厚さで堆積し、その後、灰色細～中砂混じりシルトが堆積し河道内の埋没が完了している。検出面からの深さは最深部で30cmと浅く、河道の立ち上がりも緩やかである。

遺物は埋土上層より土鍋(76)、須恵器鉢(116)が出土している。

#### SB03

調査区の中央寄り、B・C-1・2区に跨って位置する。南北方向に桁行をもつ総柱の掘立柱建物址である。検出面は、II層を除去した段階、黄褐色シルト層上面である。建物址の南端はSB04・06と重複している。建物址の規模は桁行3間(8.7m)、梁行(5m)の規模で南北方向を棟軸とした方位は、N4°Eである。柱間の距離は桁行で2.6~3.4mととくに桁行の2~3列間が長い。梁行は2.4~2.8mを測る。柱穴の掘形は直径25cm前後で、深さは20~30cmを測る。確認できた柱痕は直径12cm前後とほ

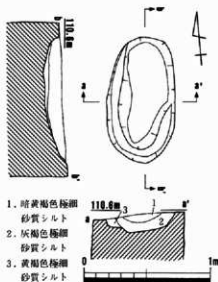


Fig. 61 SK05 平面図

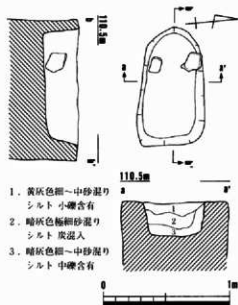


Fig. 62 SK06 平面図

ほぼ均一である。P9は柱穴内に7×12cm大の河原石が投棄されていた。

遺物は、P5内より土師器皿(51・70・72)・坏(75)が埋置された状態で出土した。

#### SB04

調査区の西側、A・B-1・2区に跨って位置する。検出面はII層を剥いだ段階、黄褐色シルト層上面である。建物址は南端でSB07と、北端ではSB04・SB06とほぼ重複していた。

建物址の規模は、桁行3間(5.9m)、梁行2間(5.5m)のほぼ方形の蛇柱建物址である。柱間の距離は桁行が2m前後、梁行は2.6m前後である。柱穴楕形の規模は直径25~36cmで、深さは20~32cmである。確認できた柱痕は直径12cmである。東西方向を棟軸とした方位はN85°Wである。P14は柱穴底面に根石をもち、P15には柱根が残っていた。

P23より河原石とともに土師器皿(64・69)、瓦器椀(97)が出土し、これらの土器の上には扁平な河原石で蓋がしてあった。P18からは土師器皿(66)、P20からは瓦器椀(94・108)がそれぞれ出土している。またP24からは3個の瓦器椀(95・96・98)が埋置された状態で出土している。

#### SB05

調査区の西端、A-1・2区に跨って位置する。検出面はII層を除去した段階、黄褐色シルト層上面である。建物址はSB07・08と重複しており、SB08よりも新しく、SB07よりも古いことが柱穴の切り合い関係によって明らかである。建物址は南北方向に長く、その規模は桁行3間(7.7m)、梁行2間(3.9m)である。柱間の距離は桁行で2.3~2.8mと均一ではない。梁行は2~2.2mで、建物址東側の柱間が長い。柱穴の規模は28~36cmで、深さは23~44cmである。確認できた柱痕は、直径8cm前後である。桁行を棟軸とした方位はN8°Eである。

P36柱穴内には河原石が投棄されており、この河原石とともに土師器皿(59・63・67)・瓦器椀(103)が出土している。またP35からは土師器皿(50・52・53)・瓦器小皿(86)が埋置された状態で出土している。

#### SB06

調査区の南端、A・B-1・2区に跨って位置する。検出面はII層を除去した段階、黄褐色シルト層上面で検出した。建物址はSB03・04と重複しているが柱穴の切り合いはない。建物址は東西方向に長く、建物の東側は調査区外であるため建物の規模は明らかではない。現認できる建物址の規模は、桁行3間(6.8m)ないしはそれ以上、梁行2間(4.6m)である。柱間の距離は桁行で2.1m前後、梁行は2.7m前後と均一である。柱穴の規模は直径25cm前後で、深さは20~36cmを測る。確認できる柱痕は直径15cm前後である。棟軸を主軸とした方位はN85°Wである。P43からは河原石が投棄された状態で出土した。

遺物は土師器・瓦器の細片が出土したが、図化できるものはなかった。

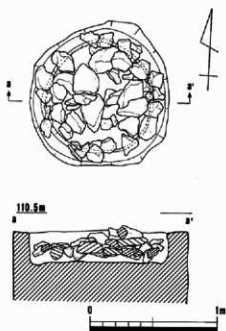


Fig. 63 SK07 平面図

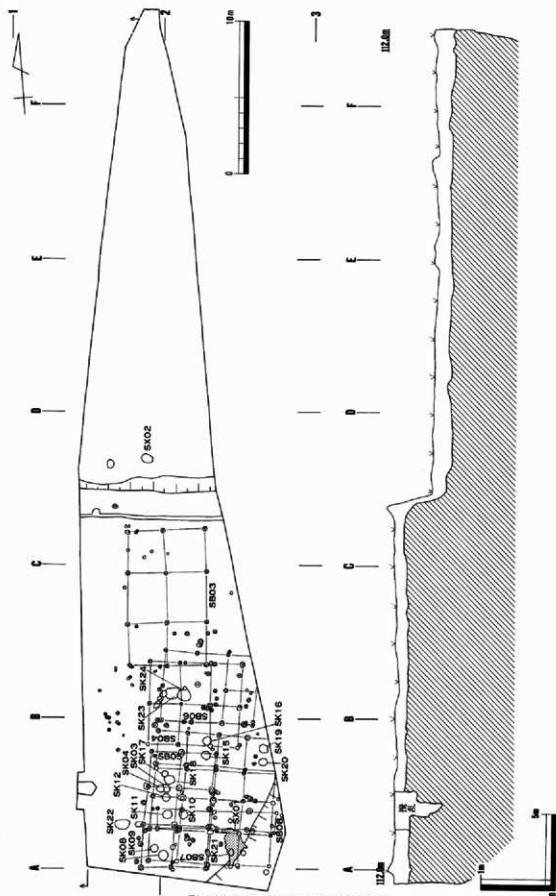


Fig. 64 井森杉地区中世遺構配置圖

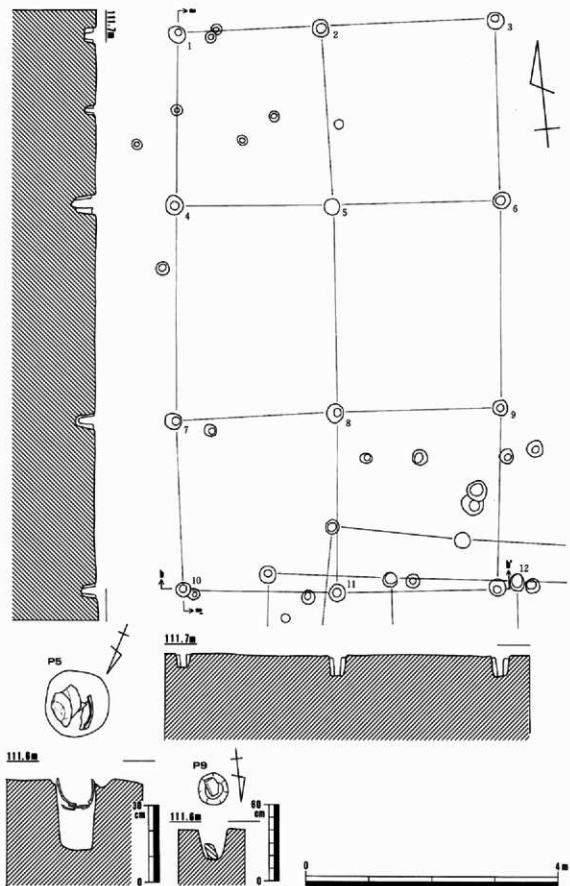


Fig. 65 SB03 平面图

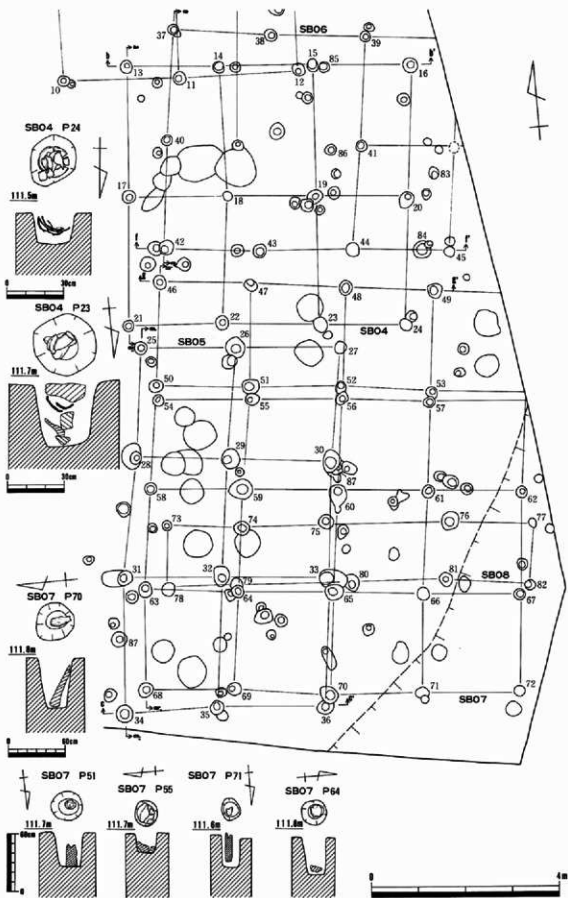
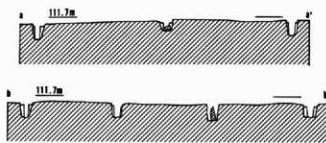
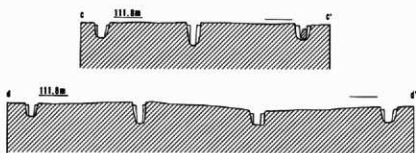


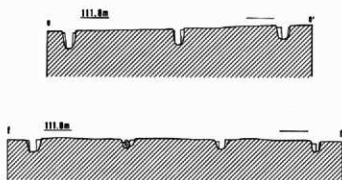
Fig. 66 SB04 ~ 08 平面图



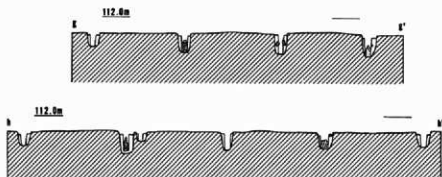
SB04 立面图



SB05 立面图



SB06 立面图



SB07 立面图



Fig. 67 SB04~SB07 立面图

#### SB07

調査区の南端、A-1・2地区に跨って位置する。検出面はII層を除去した段階、黄褐色シルト層上面で検出した。建物址はSB05・08と重複しており、柱の切り合いからSB05・08より新しいことが判明した。建物址の東端は旧河道4に切られている。建物址の東側は調査区外であるため、建物址の東側への広がりは明らかではない。現認できる建物址の規模は、南北方向4間(8.5m)、東西方向4間(8m)ないしはそれ以上の総柱建物址である。検出した建物址のなかでは最も大型の建物址である。北から2列目のP50～P57は柱穴が切り合っており、P54～P77が新しい。この建物址は一部建て替えが行われ、3×4間ないしはそれ以上と規模を縮小している。柱間の距離は、南北方向が2.1m前後、東西方向が2mとほぼ均一である。柱穴掘形の規模は直径30cm前後で、深さは25～40cmである。南北方向を棟軸とした方位はN8°Eである。P47・49・51・70・71には柱根が残っており、残存する柱根直径は、細いもので15cm、太いもので20cmである。この他P55・63・64の柱穴掘形底面に根石を確認している。

遺物はP47より土師器皿(54)、P62より須恵器鉢(117)、P65より土師器皿(49)、P67より土鍋(79)がそれぞれ掘形内より出土している。

#### SB08

調査区南端、A-1・2地区に跨って位置する。検出面はII層を除去した段階、黄褐色シルト層上面で検出した。建物址はSB05・07と重複しており、柱穴の切り合いからSB05・07よりも古いことが判明している。建物址の規模は南北方向1間(1.4m)、東西方向4間(7.7m)と東西に細長い。柱間の距離は東西方向が1.6～2.6mと一定しない。柱穴掘形は直径20～30cmで、深さは20～30cmを測る。東西方向を主軸とした方位はN86°Wである。

遺物はP74より瓦器皿(88)・碗(100)、P76より土鍋(80・82)、P77より瓦器碗(109)・青磁皿(120)が出土している。

#### 土坑群

井森杉地区からは土坑が18基検出された。これらの土坑群は調査区の南側、Bラインより以南に集中している。検出面はいずれの土坑もII層を削いだ段階、黄褐色シルト層上面である。検出した土坑のうちSK22・24を除く土坑群は埋土に炭層ないしは炭片を含む埋土をもつ点、規模・形態等の点で類似しており同一の機能をもつ土坑と理解している。

#### SK08～14・17・18

SK10を除くこの一群の土坑は、SB05ないしはSB07の西側身舎内(西より1～2列間)に位置する。SK13・14、SK17・18はそれぞれ切り合っており、SK14、SK17が新しい。またSK10は、SB08・P74に切られている。規模および形態は直径60cm前後の円形を呈するもの(SK08～10・12・14・17)と65×55cm前後で楕円形を呈するもの(SK11・18)とがある。SK08～10・17・18は土坑底面に厚さ2～5cm前後の炭層が堆積している。この他SK09・12は土坑底面より長さ15cmの河原石が出土している。

遺物はSK12より土師器皿(56)・瓦器皿(89)、SK17より瓦器碗(110)がそれぞれ埋土上層より出土している。

#### SK15・16・19・20

SB07北側身舎内(北より1～2列間)で、2基が1対になって東西に対峙している。SK15・16・20は直径60cm前後の円形を呈し、SK19は55×47cmの規模で楕円形を呈する。深さは10～20cmを測

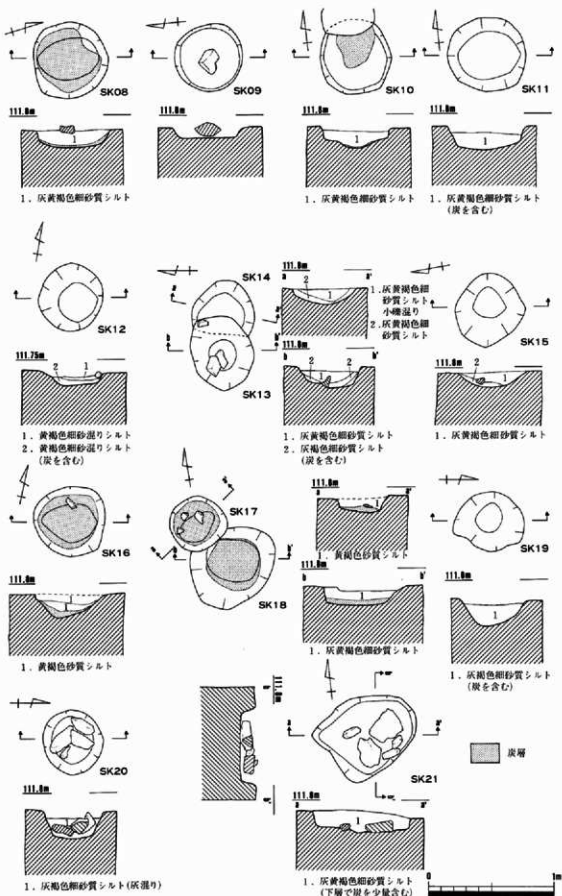


Fig. 68 SK08～SK21 平面図



る。SK16は土坑底面に厚さ5cmの炭層が堆積している。SK16はSB04・P23に切られている。

遺物は、SK16埋土上層より須恵器鉢(115)が出土している。

#### SK21

SX01に切られた状態で検出した。70×62cmの規模で、平面形は不整楕円形を呈する。深さは11cmで断面形は皿状を呈する。土坑内には長さ25cmの扁平な河原石が出土した。

遺物は出土しなかった。

#### SK22

調査区の南西隅に位置し、西側には、SB05・07が近接している。規模は96×70cmで、平面形は西側が狭小な不整楕円形を呈する。深さは21cmを測り、断面形は深い皿状を呈する。埋土上層には、小さいもので23×10cm、大きいもので47×23cm大の河原石が東西方向に3個並んで検出された。長軸を主軸とした方位はN72°Wである。

遺物は出土しなかった。

#### SK23・24

SB04・05の身舎と重複して検出された。両土坑はさらに重複しており、SK24が新しい。SK23は、東端をSK24で切られ遺存状況は悪い。土坑の規模は、長軸90cm、短軸70cmで、平面形は円形を呈する。深さは15cmを測る。

遺物は出土しなかった。

SK24は、土坑の西側でSK24を切り、南端は柱穴に切られている。土坑は直径80cmの歪な円形を呈する。深さは27cmで、断面形は深い皿状を呈する。

遺物は出土しなかった。

#### SD03

調査区の中央部、やや北側に東西に走る溝である。南側にはSB03が近接する。幅20～26cm、深さは6cmを測り、断面形はU字状を呈する。遺物は瓦器の細片が出土した。

#### SX01

調査区の南東端に位置する集石遺構である。遺構の東側は旧河道4に切られ、SB07・08・SK21より新しいことが柱穴等の切り合い関係から判明している。遺構内からは多量の12×10～53×20cm大の角

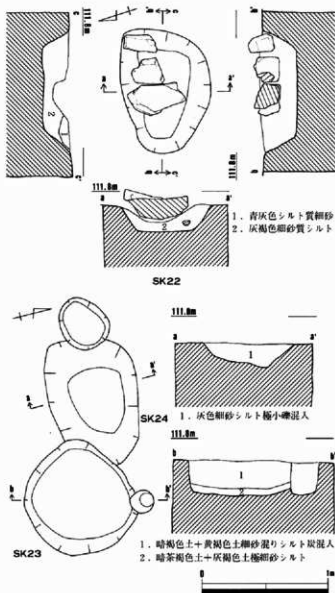


Fig. 69 SK22～24 平面図

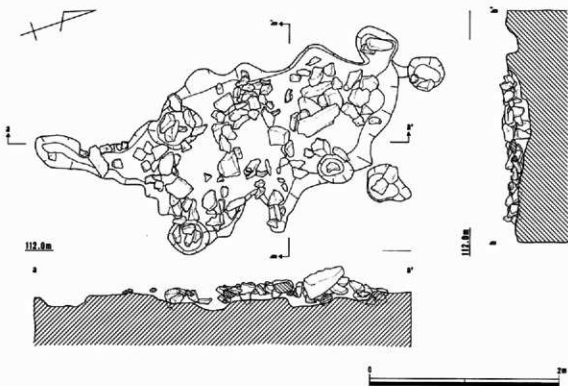


Fig. 70 SX01平面図

礫・亜角礫とともに土器が出土している。埋土中には炭片を多量に含んでいる。跡の広がり南北方向が4m、東西方向が1.8mである。遺構の底面は凹凸が著しい。

遺物は土師器皿(47・57・58・65・73・74)、土鍋(81)、土師器鉢(83)、瓦器碗(91~93・99・101・102・104~107・111~113)、須恵器皿(114)が出土している。

#### SX02

調査区の北側に位置する焼土遺構である。検出面は黄褐色シルト上面である。遺構は80×54cmの範囲で火を受け土質が変化している、遺構の内側80×40cmの範囲は、土が火を強く受け赤化しており、その周辺は、黄褐色に変化している。遺構の立ち割り土層断面の観察では、4cmの厚さで赤化し、さらに7cm前後の厚さで黄褐色に土質が変化している。

土坑の性格としては、調査区の南側で検出した焼土坑ないしは炉等の痕跡と考えられるが、断定はできない。

遺物は出土しなかった。

### 3 遺物

国領遺跡で出土した土器は土師器皿・坏・鉢・鍋、須恵器碗・鉢・壺・壺、瓦器皿・碗をはじめ、丹波焼播鉢・備前焼播鉢等の国産陶器がある。これらの他、白磁碗、青磁碗・坏ないしは皿等の中国製磁器が出土している。時期は平安時代後期後半から南北朝時代初頭と幅をもっている。周辺の遺跡で出土した土器の内容と比較すると破片を含めて須恵器碗の出土量が極めて少ないことが特筆される。時期が多少異なるが丹波焼と

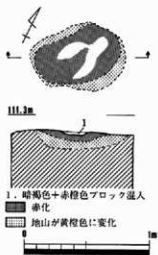


Fig. 71 SX02平面図

備前焼の製品が混在していることも本遺跡の特徴である。これらの土器以外に砥石、チャート製の燧石が出土している。

遺物の出土状況について触れると、井森杉地区出土の建物址柱穴内より瓦器碗、土師器皿が一括して出土している。調査の所見では建物址廃棄の際に柱穴内に埋置された祭祀的状况を呈し、各土器の同時性は高いと理解される。

以下各地区の出土遺物について説明する。

#### a. 確認調査・石風呂地区

(1～8)の土器は確認調査の際出土した遺物で、(9)は、旧河道1埋土層より出土している。

(1)は口径12cm、器高2.4cmを測る土師器中皿である。内外面ともに摩滅が著しく外面口縁部にヨコナア、体部に指押さえ調整の痕跡を残す。(2～4)は瓦器の碗である。いずれも破片で遺存状況は悪い。(2)は推定口径13cmの小型の碗である。内外面とも摩滅しており暗文の有無は不明である。外面体部には指押さえ調整の痕跡を残す。(3)は底径が推定で4cmを測る。断面が三角形の高台を張り付けている。底部から体部への移行部には明確な境がない。(5)は底部が僅かに突出した円盤状高台をもつ須恵器碗である。底径は推定で5cmを測る。底部は回転糸切り手法をもちいて切り離している。(6)は備前焼の撞鉢である。内面には4本以上を一単位とした櫛歯条線が施される。(7～9)は中国

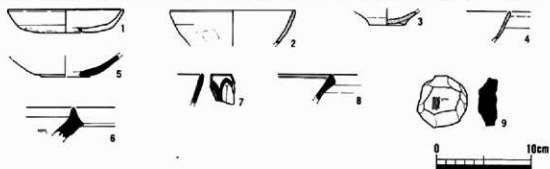


Fig. 72 確認調査・石風呂地区出土土器

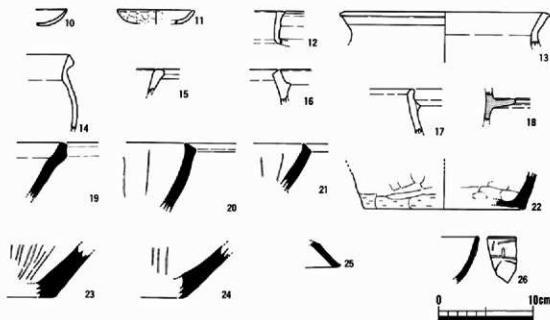


Fig. 73 蓮町I地区出土土器

製磁器である。(7)は青磁鎗連弁文碗である。(8)は玉縁状の口縁部をもつ白磁碗である。内面口縁部直下に沈線が巡っている。(9)は青磁碗の身込み部周縁を打ち欠いて作ったメンコである。内面身込み部には「壽」の字がスタンプされている。

#### b. 蓮町I地区

(10~11)は土師器小皿である。(10)は内外面とも摩滅し調整は不明である。口縁部は内彎して立ち上がり、口縁端部は尖っている。(11)は推定口径8.2cm、器高1.6cmを測る。口縁部は直線的に斜め上方に立ち上がり、端部を丸くおさめている。内外面とも指押さえ調整を施し、内面は横位の指ナゲが施されている。(12~16)は土鍋である。(12・14)は口縁部が「く」の字状に外反し、口縁端部が外側に突出する鍋である。口縁外面は上下2段のヨコナデ調整が施され、口縁部中位が膨らむ傾向が認められる。(12)は外面に煤が付着しており、(13)は推定口径22.4cmを測る。(14)は張りのない体部を持ち、口縁端部は外側に肥厚している。体部外面は平行タタキ、口縁部はヨコナデ調整が施される。内面体部はナゲ調整である。口縁部はヨコナデ調整である。外面には煤が付着している。(15)は口縁端部が玉縁化した鍋である。(16)は口縁端部上面は内傾する面取り調整を行い、内面はヘラミガキ調整が施される。(17)は口縁部と体部の境に断面三角形の小さな鋸をもつ羽釜である。鋸の先端は若干垂下している。内外面ともヨコナデ調整が施されている。(18)は水平に張り出した鋸を持つ瓦葺の羽釜である。鋸の幅は2cmを測る。(19~23)は播鉢である。(19)を除く(20~23)の播鉢は丹波産である。(19)は産地不明の播鉢で内面には5本以上一単位の標挿条線が施されている。内外面とも摩滅が著しく、調整は不明瞭であるが、体部外面に指押さえの調整痕跡が残る。(20・21)は口縁端部が内側に拡張する播鉢である。内外面とも回転ナゲ調整が施され、内面は一回一条描きによる放射状の描目をもつ。(22・23)は播鉢の底部である。(22)は体部外面に横位の指ナゲが施され、底部周縁にはヘラケズリが認められる。内面には放射状に粗い描目が刻まれる。(24)は瓶ないしは小壺の底部と考えられる。底径は推定で17cmを測る。外面体部は指押さえ調整の後、板状工具によるナゲが施され、底部周縁にはヘラケズリ調整が認められる。内面は底部と体部の境に沿って強い指ナゲ調整が施される。(25)は瀬戸・美濃系の蓋あるいは皿と考えられるものである。内外面ともオリブ灰色の釉が施されている。(26)は外面口縁部に簡略化された雷文、体部に鋸のない連弁文が刻まれる青磁碗である。

#### c. 蓮町II地区

(27~29)は土師器の小皿である。いずれも口縁部が内彎し、口縁端部を丸くおさめている。内外面とも摩滅し調整は不明である。(28)は口径が推定で7.88cm、器高が1.5cm、(29)は口径が推定で7.6cm、器高が1.4cmと法量は近似している。

(30~34)は土鍋である。(30)は口縁部が「く」の字状に外反し、端部を四角くおさめる鍋である。内外面ともヨコナデ調整が施されている。(31・32)は口縁部がほぼ垂直に立ち上がり、端部は外方に拡張する鍋である。(32)は端部に一条の沈線が巡る。調整は外面体部に平行タタキ、口縁部はヨコナデ調整を施す。内面体部はナゲ調整で器面を整えているが、(32)は同心円状の当木痕が残る。いずれも外面に煤が付着している。(33・34)は口縁端部が玉縁化した鍋である。口縁部は内外面ともヨコナデ調整が施され、外面体部にはタタキ目が認められる。外面には煤が付着している。

(35)は推定口径12cmの小型の瓦器碗である。内外面とも暗文が施され、外面口縁部は密に、体部は比較的粗く施文されている。内面は螺旋状の密な暗文が施されている。

(36・37)は須恵器碗の底部破片である。底部は平底で糸切り手法をもちいて切り離している。底部径

は (36) が 5.4 cm、(37) が 5.8 cm を測る。(38) は底部が鬚高台風の作りをした須恵器の鉢である。内外面とも回転ナデ調整を施している。底径は推定で 10.4 cm を測る。(39) は体部上位に 1 本の突帯を巡らした須恵器甕である。(40) は口縁部が「く」の字状に外反した須恵器甕である。(41) は甕の底部破片である。外面には綾杉様のタタキが施される。

(42) は端部が僅かに上下方向に拡張する備前焼の攪鉢である。内面には 5 本以上 1 単位の櫛描条線が施される。(43) は丹波焼の鉢の底部と考えられる。外面体部は指押さえ調整痕を顕著に残し、底部周縁はヘラケズリ調整で整えている。(44) は丹波焼片口攪鉢である。外面体部は指押さえ調整の後、ナデ調整で器面を整えている。体部上位から口縁部にかけて回転ナデ調整が施されている。内面には 1 回 1 条描の罫目が放射条に刻まれている。内面片口部直下には「の」字を逆さまにした窯印が刻まれている。

d. 井森杉地区出土土器

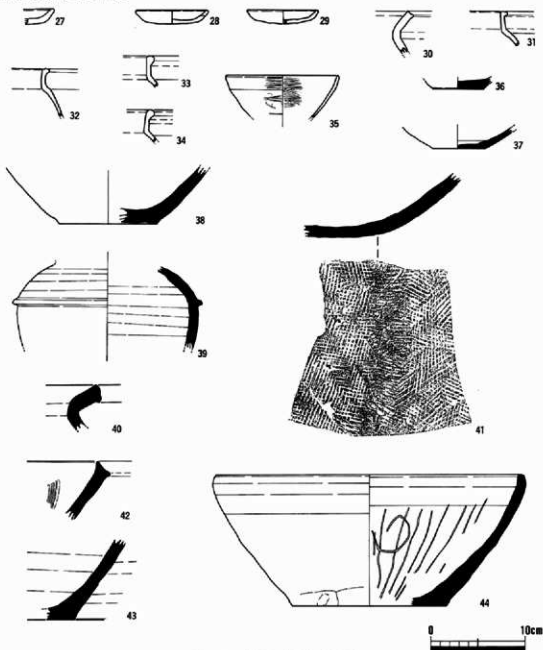


Fig. 74 蓮町II地区出土土器

井森杉地区から出土した土器は土師器皿・鍋・鉢、瓦器皿・碗、須恵器鉢、中国製磁器と多彩で、出土量も多い。土器の出土状態も良好で、一括性に富んでいる。SB03・P5からは(51・70・72・75)の土師器皿・坏が、SB04・P24より(95・96・98)の瓦器碗がそれぞれ埋置された状態で出土している。またSB05・P35出土の(50・52・53)の土師器皿と瓦器皿(86)も同様の状態で出土している。

#### 土師器(45~61)

皿はその法量から、3つに大別できる。口径8cm前後の皿を小皿(45~61)、口径12~13cm前後の皿を中皿(62・63・65・68・69・71・73・74)、口径14~15cmの皿を大皿(64・66・67・70・72)とし説明する。

(45~49)は丸底で、口縁部が内彎気味に立ち上がる小皿である。口径8cm前後、器高1.5~2cmを測る。調整は口縁部内外面がヨコナデ調整、体部外面が指押さえ調整である。(50~55)は平底気味の底部をもち、口縁部が斜め上方に立ち上がり端部を尖り気味におさまった小皿である。口径は8cm前後のもの、(52)のように6cmを測る小型の皿もある。器高は1.2cm前後と上記の群より浅い皿である。調整は口縁部内外面ともヨコナデ調整、体部外面は指押さえ調整を施す。(51)は底部にヘラケズリ調整が認められ、調整が他と異なっている。(56~61)は口縁部が外反し、端部を尖り気味におさまった小皿である。口径は8cm前後、器高は1.5cmが平均であるが、(58)のように1cm前後の浅い皿もある。調整は口縁部内外面ともヨコナデ調整、体部外面は指押さえ調整である。(60)はII層包含層出土である。

(62・63)は丸底で口縁部が内彎して立ち上がる中皿である。口径13cm、器高3cmと深い皿である。調整は遺存状況が悪く不明瞭であるが、口縁部外面にヨコナデ調整、体部外面に指押さえ調整の痕跡を残す。(62)はII層包含層より出土している。(65)は平底で口縁部が短く直線的に立ち上がり、端部が尖った中皿である。口径12cm、器高2.1cmを測る。底部裏面の調整は不明である。(68・69)は口縁部が外反して立ち上がる中皿である。口径は12.5cm前後、器高は3.5cm前後と中皿の中では深い皿である。口縁部は内外面ともヨコナデ調整、体部外面は指押さえ調整を施す。(68)はII層包含層より出土している。(73・74)は口縁部が直線的に立ち上がる中皿である。両者とも器壁が薄く胎土が精良な点で類似する。(73)は幅広の口縁部をもち、端部は尖っている。口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施し、内面底部周縁には強いナデ調整が施され、凹みをもつ。体部外面は指押さえ調整を施す。口径13cm、器高2.1cmを測る。(74)は口縁部と体部の明瞭な境がなく(73)に比べ底径が小さい。口径は推定で13.2cm、器高は2.8cmを測る。

(64)は口縁部が大きく内彎する大皿である。口縁部外面に狭小なヨコナデ調整を施し、体部外面には指押さえ調整の痕跡を残す。推定口径15.2cm器高2.9cmを測る。(66・67)は平底で口縁が短く立ち上がる大皿である。推定口径14cm前後、器高2cmの浅い皿である。(70)は口縁部に上下2段のヨコナデを施す大皿である。口縁部は外反し、端部は外方へ拡張する。口径14.1cm器高2.6cmである。口縁部は内外面ともヨコナデ調整、体部外面は指押さえ調整である。(72)は底部を回転糸切り手法によって切り離した大皿である。推定口径15cm、器高3cmを測る。内外面とも回転ナデ調整で丁寧に仕上げ、内面底部周縁には強いナデを施し凹みをもつ。

(75)は突出した円盤状高台をもつ坏形土器である。底部の切り離しは回転糸切り手法を用い、口縁から体部は内外面ともに回転ナデ調整で丁寧に仕上げられている。口径16.4cm、器高4.2cmを測る。

(76~82)は鍋である。いずれも口縁部のみ遺存し全容は不明瞭である。出土した鍋はすべて外面に煤が付着し、使用された痕跡を残している。(77・78)はII層包含層からの出土である。

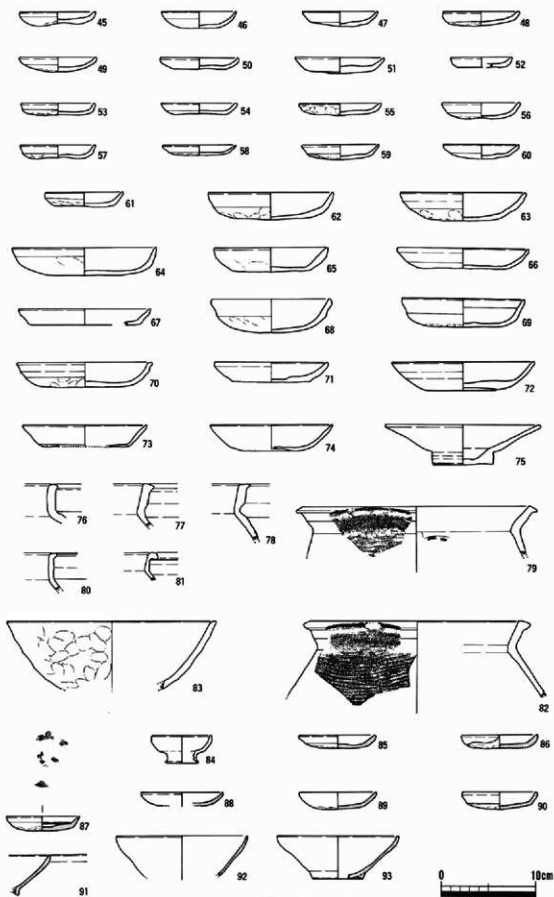


Fig. 75 井森杉地区出土土器 1

(76)は垂直に立ち上がる口縁部をもち端部が若干外方に突出する。(77~79)は「く」の字状に外反する口縁部をもち、端部は外方に突出する鍋である。口縁部は内外面ともヨコナデ調整が施され、とくに口縁部外面は上下2段の強いヨコナデを施している。体部外面は右上がりのタタキが施され、体部内面はナデ調整である。(79)は体部内面に同心円状の当木痕を残す。(79)は口径が25.6cmを測る。(80~82)は、口縁端部が玉縁化した鍋である。(80)はほぼ垂直に立ち上がる口縁部をもち、口縁部外面は2段のヨコナデ調整、体部外面はタタキの痕跡を認める。体部内面はナデ調整を施す。(81)は口縁部が短く外反し、端部が外方に垂下している。口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施し、体部外面にはタタキ目を残す。(82)は「く」の字状に外反した口縁部をもち、推定口径は24.5cmを測る。口縁部外面は強い2段のヨコナデ調整、体部は右上がりのタタキを施す。口縁部内面はヨコナデ調整、体部は同心円状の当木痕をナデ調整で消している。

(83)は鉢と考えられる。口径22.2cm、残存する高さは7.1cmを測る。遺存状況が不良で調整は不明瞭であるが、体部外面には指押さえ調整の痕跡が認められる。体部内面は黒化している。(84)は小型の高坏であろうか。口径6.2cm、器高2.8cmを測る。内外面とも摩滅が著しく調整は不明である。胎土は精良である。

#### 瓦 器 (85~113)

瓦器は小皿と椀が出土している。これらの椀・皿の多くは遺存状況が悪く、調整・暗文が不明瞭なものが多い。

(85~90)は小皿である。平底の気味の底部で口縁部は斜め上方に短く立ち上がる。口径は8cm前後、器高1.5cm前後を測る。調整は体部外面に指押さえ調整、口縁部にヨコナデ調整を施している。口縁部内面はヨコナデ調整、底部内面は1方向のナデを施す。暗文は(90)が内外面に、(87・88)が内面に密な暗文を施す。

(91~113)は椀である。(91~93)は体部が斜め上方に直線的に立ち上がり、口縁部は肥厚しながら内彎する椀である。端部は尖り気味におさまる。底部は、断面三角形の輪高台を張り付けている。口径は13~14cm、器高は4.5cm前後を測る。底部径は(93)で5.4cmを測る。いずれも内外面ともに剝落が著しく、調整・暗文の有無は不明である。(94・109)は体部が内彎しながら立ち上がり、そのまま口縁部に続く椀で、端部を丸くおさめている。底部は、比較的堅固な断面逆台形状を呈する。口径は15cm前後、器高は5cm前後、底径は6cm前後である。調整は体部が指押さえ調整、口縁部がヨコナデ調整を施す。暗文は(109)では内外面ともに暗文の痕跡を確認した。(108)は遺存状況が悪く、暗文の有無は識別できなかった。(95~99)は肥厚しながら立ち上がる口縁部をもち椀である。端部は尖り気味である。口径は13.4~15.2cm、器高は5~6cm、底部径5.4~7.5cmと幅がある。底部は断面三角形の輪高台を張り付けているが、(98)は退化した高台である。調整は遺存状況が不良のため不明瞭である。比較的遺存状況の良い(98)を観察すると、口縁部外面がヨコナデ調整、体部外面は指押さえ調整を施す。暗文は外面には施されず、内面見込み部にジグザグ文、体部から口縁部にかけて密な螺旋状文が施文されている。(100~106)は深い体部をもち、口縁部が外反して立ち上がる椀である。端部は尖り気味におさまる。底部は断面三角形の輪高台を張り付けた椀が多い。とくに(100・101)の椀は堅固な高台である。また(104・105)は退化した輪高台をもち、(100・104)のように口径12cm、器高・底径が5cm前後と小型の椀もあるが、口径13cm、器高5.5cm前後、底径6cm前後の椀が多い。調整は遺存状況が悪く、不明瞭な点が多い。比較的遺存状況の良い(102)は口縁部内外面ともにヨコナデ調整、



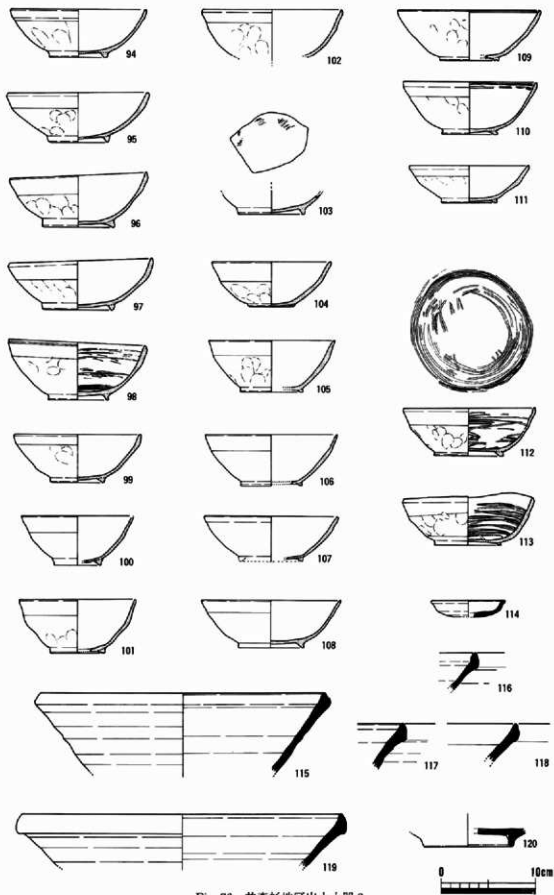


Fig. 76 井森杉地区出土土器 2

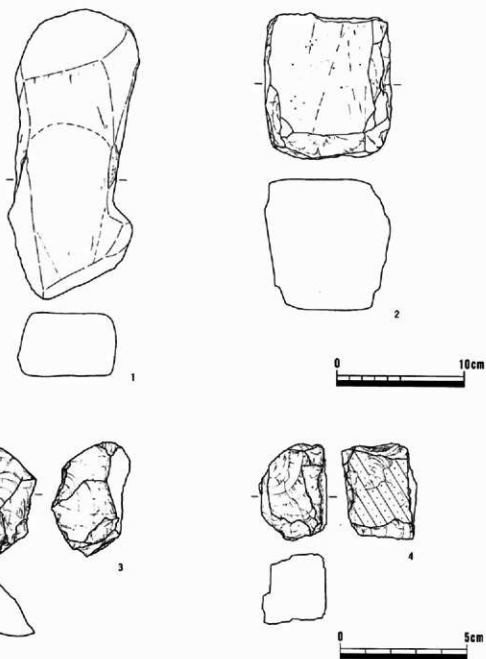


Fig. 77 井森杉地区出土石器

体部外面は指押さえ調整を施す。暗文は外面が口縁部付近に、体部内面から口縁部にかけてそれぞれ暗文の痕跡を残す。(107・108・110)は外反する口縁部をもち(100～106)と類似しているが、口径が14cmと大きくなり、浅い体部をもつ椀である。底部は断面三角形の輪高台を張り付けている。調整は遺存状況の良いな(110)を観察すると、口縁部外面ヨコナデ調整、体部外面指押さえ調整を施している。外面には暗文はなく、南面口縁部付近に暗文の痕跡を認める。(111～113)は(107・108・110)の一群よりさらに体部が浅くなり、器形が環に近くなる椀である。(111)はこの一群のなかでも小型の椀で、口径12.6cm、器高3.9cm、底径5.9cmを測る。(112・113)は口径14cm、器高5cm、底径は7cmを測り出土した瓦器椀のなかでは最大の法量を測る。外面の調整は口縁部がヨコナデ調整、体部が指押さえ調整を施し、内面は口縁部がヨコナデ調整、体部が上下方向のナデを施す。外面には暗文は施文されず、内面は底部見込み部にジグザグ文、口縁部から体部が粗い螺旋状文が施されている。

#### 須恵器 (116~119)

出土した須恵器はすべて鉢である。遺構からの出土は (115) がSK16 から、(117) がSB07・P62 より、(116) は旧河道4からそれぞれ出土している。(118) はII層より出土した。

(116) は端部が内傾気味に上方へ拡張する鉢である。内外面とも回転ナデ調整で仕上げられており、口縁部外面が黒化し、重ね焼きの痕跡が残る。(115) は口縁部が肥厚し、端部を若干上方に揃み上げている。端部外面には凹線様の凹みをもつ。口径30cmを測る。内外面とも回転ナデ調整で、口縁部外面は黒化している。(117・118) は口縁部が外方に肥大し、玉縁状を呈する鉢である。端部は端部は上方に若干拡張気味である。内外面とも回転ナデ調整を施し、口縁部外面は黒化している。(119) は口縁部が上下方向に拡張する鉢である。口径は34cmを測り大型である。内外面とも回転ナデ調整を施し、口縁部外面は黒化している。

#### 中国製磁器 (120)

青磁坯の底部破片と思われる。高台径が9.6cmと大きく、あるいは皿の可能性も考えられる。軸は高台登付部分を除く全面に施されている。無軸部分と施軸部分との境は赤化している。軸色は暗オリーブ色を呈し、胎土は灰色である。

#### 石製品 (1~4)

(1) はSB05・P36より出土した。白色を呈する極細粒の堆積岩を用いている。一端(上)が折損している。底面は上・下2面に設けられ、他の2面には粗い整形痕が残存している。重量は2,200gである。

(2) はSB08・P78より出土した。細砂岩の礫を用いており、その平坦な1面を底面としている。重量1,860gである

(3・4) はチャート製燧石である。亜角礫を粗い剥離によって整形し、それによって作られた稜線を使用している。稜には著しい濡れが認められる。(3) がSX01より、(4) がP66よりそれぞれ出土したものである。所属時期は明確ではないが、おおむね平安時代末から鎌倉時代に属するものであろう。

## 4 小 結

### 石風呂・蓮町I地区の遺構と遺物

石風呂地区からは柱穴群と旧河道1が検出された。調査の結果、柱穴群は旧河道よりも古いことが判明した。これらの遺構からは良好な遺物がなく、時期を知ることは困難である。ただ旧河道埋土上層より出土した(9)の青磁碗をメンコに転用した遺物が、出土した遺物のなかでは最も新しい時期のものとして理解している。

蓮町I地区から検出した遺構は、溝(SD01-02)、柱穴群、旧河道2である。調査の結果、SD02は旧河道2と繋がっており、ほぼ同時期に存続したことが判明している。旧河道内からは(10~14・16・17)の土師器皿・鍋、(19・22~25)の国産陶器、(26)の青磁碗が出土した。このなかで新しい時期の遺物を抽出すると(26)の青磁碗が挙げられる。(26)は亀井分類のAタイプに相当し、14世紀中葉から15世紀前半の年代が考えられている。旧河道の埋没時期はこの時期まで遡ると考えられる。また旧河道はSD02と連結しており、SD02は上記の年代を下限とする時期が推定される。

SD01は破片ではあるが丹波焼播鉢(20・21)・壺(24)が出土している。丹波焼播鉢は稲荷山窯期の範疇で捉えられ、その年代は14世紀代と考えられる。

## 蓮町II地区の遺構と遺物

調査の結果、遺構の新旧関係は次のとおりである。旧河道3→鍛冶炉(SK01)→木棺墓(SK02～04)・土墳(SK05)・掘立柱建物址(SB01・02)の順である。木棺墓、土墳と建物址群との関係は、直接層位のないしは切り合い関係が無く不明である。

### 遺構の時期について

各遺構からは良好な出土例がなく、時期を決める土器は少ない。旧河道から出土した土器は(39)の広口壺、(35)の瓦器碗が时期的に古い一群で、それに続くものとして(36・37)の須恵器碗、(4)の甕がある。時期は平安時代後期後葉～鎌倉時代の所産と理解する。新しい時期のものは旧河道最上層(1層)より出土した備前焼播鉢(42)がある。この播鉢は間登編年<sup>2</sup>のIVA期に該当し、14世紀後半から15世紀前半の年代が与えられている。旧河道が埋没した時期はこの時期に求められるであろう。また木棺墓・土墳は旧河道埋土2層上面で検出されたもので、また鍛冶炉は旧河道埋土3層上面と対応関係にある。これらの遺構から良好な相伴遺物がないため、これらの遺物はおおよそ平安時代後期後葉から室町時代前半のなかで捉えられるものとして理解する。

建物址は2棟検出された。いずれも東西方向に棟軸をもつ建物で、棟軸方位はほぼ同一方向を示し、同時期に併存したものと判断される。建物の時期を知る手掛かりとしては、SB01の柱穴内より根石にかわる形で出土した丹波焼播鉢(44)がある。この丹波焼は岡崎編年<sup>2</sup>ではおおよそ14世紀後半頃に比定されている。河道内出土の土器と建物址出土の土器を比較するとおそらく河道埋没後あまり時間が経過しない時期に、これらの建物が建てられたと思われる。

### 井森杉地区の遺構と遺物

井森杉地区では6棟の掘立柱建物が検出されている。これらの建物址群は、ほぼ同一の場所で建て替えが行われており、複雑に重なり合っている。各建物址に属する柱穴の切り合い関係からSB08→SB05→SB07の順で変遷したことが判明している。この新旧関係を基準にして各建物址の位置関係から同時性を求めると、まず新しいSB07はSB06と南北方向の柱筋がほぼ同一線上ある。両建物は同時期に併存したと理解できる。SB07は当初4×4間の正方形の建物であったと推定されるが、その後建て替えが行われ、北側1×4間分の身舎が建て替えによって規模を縮小し3×4間の東西に棟軸をもつ建物に変化している。この建物の変化に伴ってSK15・16・19・20の焼土坑は、建物西側の身舎内に移りSK08・09、11～14、17・18の焼土坑が築れたと理解している。これと同様に、SK23・24の焼土坑は位置的にSB06西側1×2間の身舎内におさまり同建物に伴うと理解している。南北方向に棟軸をもつSB05に対応する建物はSB04が該当する。両建物の感覚は50cmと極めて近接し、L字形に並んでいる。SB08に対応する建物は位置関係、方位等で確定できるものはない。SB03も同様である。

建物・土坑以外の遺構は、調査区の北側に東西に走る溝がある。この溝より北には建物址が存在せず、地割りの機能をもつ溝と推察される。また調査区南東隅の集石遺構(SX01)は、多量の河原石に混じって土器が出土し、埋土には炭化材の細片が含まれていた。SB07の柱穴はSX01内の河原石を除去した段階で検出しSB07よりも新しく、おそらく建物の廃絶に伴う廃棄遺構と理解している。このSX01は遺構の東側を旧河道4で破壊され、井森杉地区の遺構は終息したと思われる。

### 遺構の時期について

建物址群のなかで良好な土器の出土をみたのは、SB04・05の建物である。SB04柱穴内より(64・66・69)の土師器中皿、(94～98・108)の瓦器碗が出土している。またSB05からは(50・52・53・59・61・

63・67)の土師器皿、(86)の瓦器小皿が出土している。(59・61・63・67)の土師器皿はSB05・P36より、(94～96・98)の瓦器椀はSB04・P24より一括埋置された状態で出土している。瓦器椀をみると口縁部が肥厚しながら立ち上がる口縁部をもち、端部外面に面をもつ一群(95・96・98)が3点出土している。この一群は遺存状況の良好な(98)を観察すると外面に暗文がなく、内面にはジグザグ文・密な螺旋状文が施されている。このような特徴は当地方と近接する亀山盆地の瓦器編年ではII期の1段階に相当し、13世紀前葉の年代が考えられている。このタイプの椀以外に(94)の瓦器椀も出土している。また、この瓦器椀はSB04に切られているSB08からも出土している。SB08から出土した(109)の椀は内外面ともに暗文の痕跡を残すことから、SB08出土の(95・96・98)の一群より一段階古い椀と理解できる。SB04からも比較的遺存状況の良好な同タイプの椀が出土していることを考えると両建物の時間的隔たりは少ないと判断できる。したがって、SB04・05の建物址群は12世紀後葉におさまると考えておきたい。そしてSB08は12世紀中葉頃と理解したい。

次にSB06・07および土坑群は良好な土器の出土がなく問題が多いが、SB07より出土した鍋(79)、須恵器鉢(117)、および同建物群に付属するSK17より瓦器椀(110)、SK16より(115)の須恵器鉢が出土している。このなかでも比較的遺存状況の良好な(115)の須恵器鉢は山中編年のC2類の特徴をもち13世紀前半の時期と理解できる。したがってSB06・07の建物址及び土坑の遺構群はSB04・05廃棄後、時間的な空白がなく建て替えられたと推察できる。またSB03はP5より土師器皿(51・70・72)・坏(75)が一括して出土している。(70)は口縁部外面に2段のヨコナデをもち、その特徴は三田市対中遺跡における深井編年の土師器皿B2類に近似し12世紀前葉のものと理解する。出土した遺物から見る限りSB03は当地区の遺構のなかでもっとも古い要素をもつ建物である。

#### 注

1. 亀井明徳「日本出土の明代青磁椀の変遷」『龜山猛先生古稀記念古文化論叢』1980
2. 間壁忠彦・間壁淑子「備前焼研究ノート(2)一中世備前焼の推移」『倉敷考古館研究集報第2号』1966、「同ノート(3)一備前焼窯址の分布とその性格」『同集報第5号』1968、「同ノート(4)一その後の新資料」『同集報第18号』1984
3. 岡崎正雄「丹波焼について」『中尾城跡』1989
4. 石井清司・引原茂治・伊野近富「亀岡盆地出土の瓦器について」『京都考古第37号』1985
5. 山中進「播系中世須恵器の分類と編年試案」『神出一神出古窯址群に関連する遺跡群の調査』1986
6. 深井明比古「土師器の分類と編年」『対中』1988

## VII 自然科学的分析

### 1 国領遺跡における土壤中火山灰抽出分析

檀原 徹

Tab. 8 井森杉地区 C-2-I グリッド西壁柱状サンプル分析結果

火山ガラス抽出層準				屈折率 (Nd)	主な火山 ガラス型	対比される 広域テフラ	※(1) ※(2) 降灰 年代	備 考	
分布層準	最大濃集層準	地層名	サンプルNo.: 深度						
サンプルNo.: 深度	サンプルNo.: 深度	地層名							
No.1 ~ No.12	0cm ~ 80cm	No.1	0~5 cm	①褐色色砂 質シルト	1.508 ~ 1.514 最頻値 1.510	H型 (扁平型) 鬼界アホホヤ 火山灰 (K-Ah)	6,300 B.P.	全分布層準で下位層準の火山ガラス(AT)と置するが表層部で相対的な含有量が多く降灰層準に近きと判定される。ガラス形態はH型を主とし、濃い色付ガラスを含む。火山ガラスの屈折率がかなり高い40年代。最濃集層準付近でプラント・オパール含有量が比較的多い。	
No.1 ~ No.13	0cm ~ 105cm	—	—	—	1.501 ~ 1.505	C型 (中間型)	—	少量だが全分析層準でコンスタントに検出される。降灰層準決定は困難。火山ガラスの特徴と層準から大山系ホーキ火山灰の可能性が高いと判断される。	
No.1 ~ No.13	0cm ~ 105cm	—	—	—	1.498 ~ 1.501 最頻値 1.500	H型 (扁平型)	始良 Tn 火山灰 (AT)	21,000 ~ 22,000 B.P.	今回の全分析層準で検出されるが、火山ガラスの含有率は数%以下で特に濃集層準は認められず、降灰層準の認定は困難である。無色透明な扁平(バブル・ウォール)型ガラスを主とするが、亀ノ甲型と称する特異な形態をもつガラスを少量含む。

Tab. 9 井森杉地区 C-1-IV グリッド SK-104 埋土柱状サンプル分析結果

火山ガラス抽出層準				屈折率 (Nd)	主な火山 ガラス型	対比される 広域テフラ	※(1) ※(2) 降灰 年代	備 考	
分布層準	最大濃集層準	地層名	サンプルNo.: 深度						
サンプルNo.: 深度	サンプルNo.: 深度	地層名							
No.1 ~ No.2	0cm ~ 20cm	No.1	0~10 cm	暗褐色色砂質 シルト	1.508 ~ 1.514 最頻値 1.510	H型 (扁平型)	鬼界アホホヤ 火山灰 (K-Ah)	6,300 B.P.	全体に火山ガラスの含有量が少なく降灰層準決定は困難。全分布層準で下位層準の火山ガラス(AT)と置するが表層部で相対的な含有量が多く降灰層準に近いと判定される。ガラスはH型を主とし屈折率が高く濃い色付ガラスを含む。
No.4	30cm ~ 40cm	(No.4)	(30~ 40) cm	褐色色砂質 シルト下部	1.501 ~ 1.505	C型 (中間型)	不 明 大山系の 火山灰?	—	少量だが9%4層準で検出される。降灰層準決定は困難。不明型に属する軽石タイプの火山ガラスを含みその屈折率値と層準から大山系ホーキ火山灰の可能性が高いと判断される。
No.1 ~ No.6	0cm ~ 60cm	—	—	—	1.498 ~ 1.501 最頻値 1.500	H型 (扁平型)	始良 Tn 火山灰 (AT)	21,000 ~ 22,000 B.P.	今回の全分析層準で検出されるが、火山ガラスの含有率は1%以下で特に濃集層準は認められず、降灰層準の認定は困難である。無色透明な扁平(バブル・ウォール)型ガラスを主とする。No.5以降では本次火山ガラスのみで他の火山ガラスを含まないことが注目される。

※(1) 竹村 徹・檀原 徹(1988): 土壤中火山ガラス抽出分析による遺跡の地層対比とよみ暦年—温度変化型折率測定装置を使用し—。考古学と自然科学 第20号 日本文化財科学会誌, 35-50。

※(2) 岡田 洋ほか(1984): テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカatalog—。古文化財の自然科学的研究, 865-928。

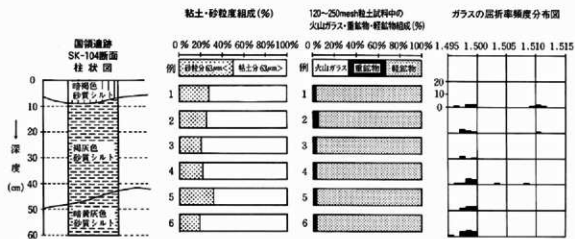
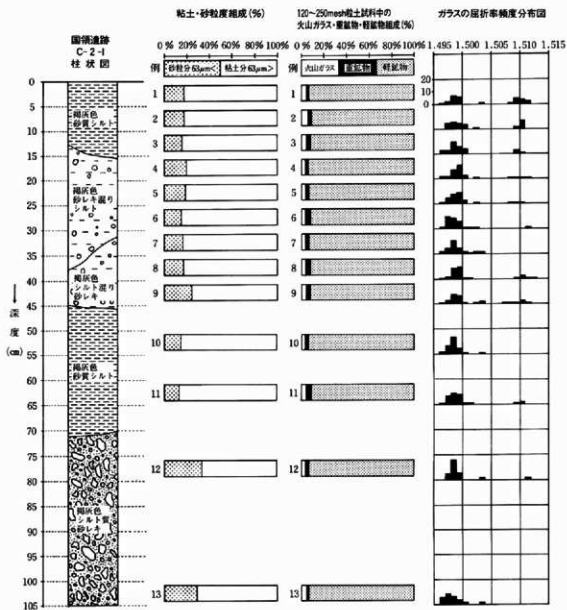


Fig. 78 試料採取地点土層模式図および分析結果

## 2 磁気分析による炉址推定

森永速男<sup>1</sup>・市川 浩<sup>2</sup>・糸田千鶴<sup>3</sup>・安川克己<sup>2</sup>

### 1. はじめに

国領遺跡では、土坑や配石が数基発見されているが、焼土や炭化物といった火の使用に伴う直接的な痕跡が肉眼的に確認されていない。この遺跡は約一万年前のものと考えられているが、同様な時代の遺跡でも一部の遺跡（例えば、大分県市ノ久保遺跡）を除いては、赤化した焼土は発見されていない。火が使用されていなかったために、その痕跡がないのか、それとも使用されていたにもかかわらず、その痕跡が肉眼的に確認できないのか、大変興味深い問題である。

森永他（1989）は遺跡表面の土壌の磁化測定を通して、それらの磁気的性質の差から火の使用跡、すなわち炉址を検出する方法を開発した。火を使用した頻度、使用後の環境変化や時間経過そして遺跡表面土壌の種類によって、現れる磁気的性質の差はまちまちであるが、定性的には焼かれた土壌は焼かれなかった土壌より、より大きな強度の、より安定な残留磁化を持つことが示されている。粘土質の土壌の場合には、焚火実験や実際の遺跡（兵庫県玉津田中遺跡）における調査によって、火の使用に伴って磁気的性質の差が明確に現れることが明らかにされている。ただし、火山灰質の土壌の場合にはその差が明確には現れないことを大分県市ノ久保遺跡における調査例で示している。

国領遺跡表面の土壌は大小種々の礫を所々に含む粘土であり、磁化測定によって焼土を検出する方法（磁気分析）が有効と考えられる。

### 2. 土壌試料採取と残留磁化測定

この遺跡のA 1-3、B 1-3及びB 1-4の3区域から表面土壌を採取した（それぞれ図1-a、-b及び-c）。ほぼ25cm間隔のメッシュ状に、それぞれの区域で254地点、156地点そして274地点を設定し、それらの地点の土壌を2.2cm角の立方体ポリカーボネイト製容器に乱すことなく納めるように採取した。各区域には、遺跡の層序断面を観察するために深く掘り下げられた部分があるため、そこでは土壌試料を採取できていない。すべての土壌試料の残留磁化を超伝導磁力計によって測定した。磁気的な安定性を交流磁場消磁法を通して検討した。

### 3. 残留磁化測定結果と炉址推定

自然残留磁化（磁気的な処理を施していない状態の磁化）強度の最大は $6.694 \times 10^{-7} \text{Am}^2$ で、最小は $0.093 \times 10^{-7} \text{Am}^2$ であり、ほぼ70倍の差が認められる（図2-a、-b及び-c）。この差は森永他（1989）の焚火実験における焚火直下の受熱土壌と受熱していない土壌との強度差に等しく、玉津田中遺跡で認められた赤化土壌とそうでない土壌との強度差（最大で約6倍、平均値の比較で約1.6倍）よりはるかに大きい。

玉津田中遺跡における調査での残留磁化の強度差は消磁後の磁化測定結果に明確に現れることがわかっていて、いくつかのパイロット試料で段階交流磁場消磁を行った結果は、玉津田中遺跡での状況がこの遺跡の土壌の場合にも当てはまることを示している。典型的な段階交流磁場消磁の結果を図3に示す（各パイロット試料の採取位置は図1-cを参照せよ）。最も磁化強度の大きかった試料230は交流磁場が増加しても、さほどその強度が減少せず、高い磁気的安定性を示している。試料168も自然残留磁化強度が試料230に比べて小さいものの、同様に高い磁気的安定性を示している。試料231は230の25



cm 南に位置する試料であり、上述2つの試料ほどではないが、15 mTの交流磁場 (AF) 強度レベルまでかなり高い磁氣的安定性を示している。残りの3つの試料(232、236そして38)は10 mTの交流消磁強度レベルですでに自然残留磁化の半分以下の強度まで減衰しており、相対的に不安定な磁化を持っている。

10 mTの交流消磁強度レベルで磁氣的に安定なもの不安定なものとの差が明瞭に現れることから、すべての試料をその強度レベルの交流磁場中で消磁し、その処理後の残留磁化を測定した(図4-a、-b及び-c)。また、消磁後の残留磁化強度が自然残留磁化強度に比べてどれくらい残留しているかを百分率で示した(図5-a、-b及び-c)。これら2つの図を見て明らかに、自然残留磁化強度が大きく、磁氣的安定性の高かった試料230とそのとなりの試料231及び試料168(以上すべてパイロット試料として選択されたもの、図1-c参照)というB 1-4区域の3つと、それら以外にA 1-3区域の1試料とB 1-3区域の1試料が70%以上の強度残存率を示している。後者の2つの試料は共に自然残留磁化強度が $1.0 \times 10^{-7} \text{Am}^2$ (図2中では $100 \times 10^{-4} \text{A/m}$ と表示)以下でさほど大きくなく、森永他(1989)の示した炉址判定基準の一方、すなわち自然残留磁化強度の大きな試料という基準を満たしていない。偶然にも、パイロット試料として選んだ試料のうちから受熱の可能性がある試料が検出できている。

2試料230と168はそれらの磁氣的安定性(図3参照)から判断して、受熱した、つまり炉址を構成していた土壌試料と判定しても良さそうである。他の多くの遺跡の土壌の磁氣的性質を調べた経験から判断しても、この2試料は磁氣的安定性がかなり高い。おそらく、受熱頻度や受熱温度も高かったものと想像できる。これら2試料は1m近く離れた位置にあり、間にはいくつかの試料が存在するが、それらは自然残留磁化強度も小さく、磁氣的な安定性も高くないため、受熱したと判定された2試料はそれぞれ異なる炉址に属していたものと考えられる。試料168の周囲の試料はどれも受熱の可能性を示さず、このことは試料168を含む炉址が最大でも直径50cm程度であることを示している。もう一つの試料231は230の隣にあるが、試料230に比べて、自然残留磁化強度はさほど大きくなく、磁氣的安定性もさほど高くないが、他の試料に比べれば強度も大きく、安定性も高い。このことはこの試料の残留磁化が熱によって影響を受けた可能性を示している。おそらく試料231の採取地点は試料230付近を中心とした炉址の端に位置しているものと考えられる。さらにそれら2試料の周囲から受熱の可能性がある試料が検出できないことから、試料230と231を含む炉址は最低でも直径50cm以上、最大でも150cm未満の南北に長い形をしていたと考えられる。

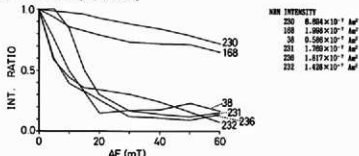


Fig. 79 NRM 強度で規格化した段階交流消磁実験による磁化強度の変化

以上、述べてきたように国領遺跡ではB 1-4区域の2つの地点で受熱した可能性のある土壌試料が確認できた。それらが存在する位置の考古学的な意味についてはここでは言及できない。専門の方々の議論や考察を期待する。

#### 参考文献

森永達男、井口博夫、山下秀樹、久保弘幸、藤田淳、安川克己、古地磁気学的手法による先土器遺跡の  
炉址検出法の開発とその有効性、第四紀研究、第 28 巻第 3 号、171-183、1898。

#### 注

1. 兵庫県立姫路工業大学理学部
2. 神戸大学理学部
3. 神戸大学大学院自然科学研究科（現在 NEC）

a KOK SITE [A1-3] SAMPLING POINTS

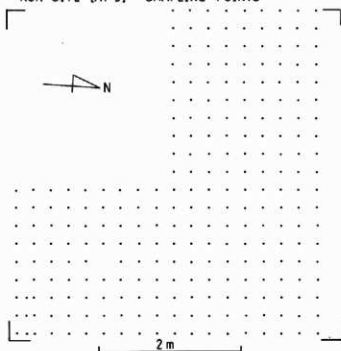


Fig. 80 国領遺跡 A-1-Ⅲグリッドサンプリングポイント

a KOK SITE [A1-3] NRM INT. E-4 A/m

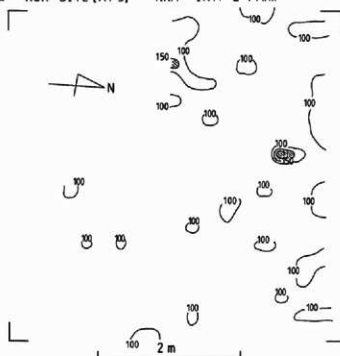


Fig. 81 国領遺跡 A-1-Ⅲ NRM INT. E-4 A/m

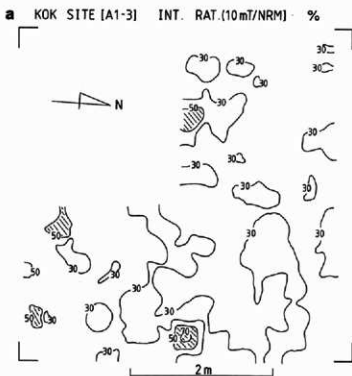


Fig. 82 國領遺跡 A-1-Ⅲ INT. RAT. (10mT/NRM) %

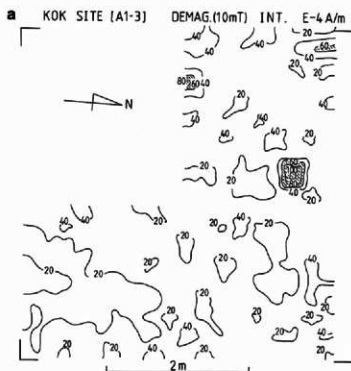


Fig. 83 國領遺跡 A-1-Ⅲ DEMAG. (10mT) INT. E-4 A/m

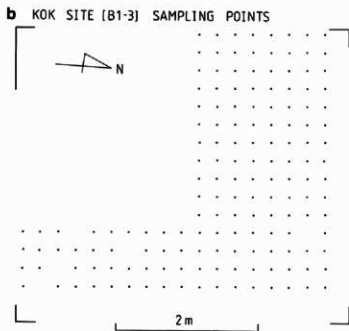


Fig. 84 国領遺跡 B-1-III グリットサンプリングポイント

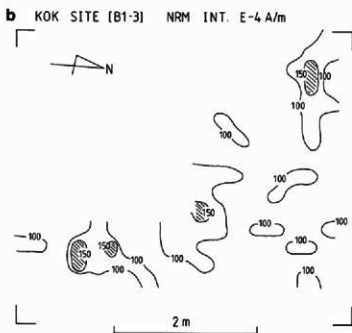


Fig. 85 国領遺跡 B-1-III NRM INT. E-4A/m

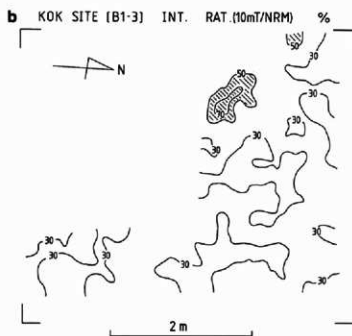


Fig. 86 国領遺跡 B-1-III INT. RAT. (10mT/NRM) %

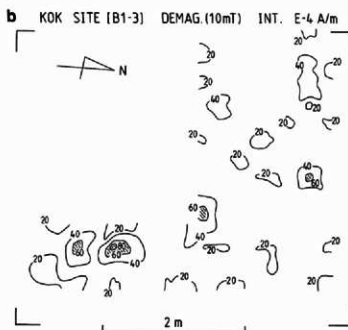


Fig. 87 国領遺跡 B-1-III DEMAG. (10mT) INT. E-4A/m

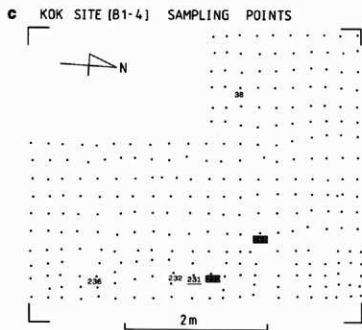


Fig. 88 国領遺跡 B-1-IV グリットサンプリングポイント

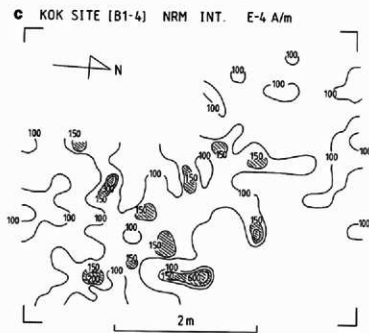


Fig. 89 国領遺跡 B-1-IV NRM INT. E-4A/m

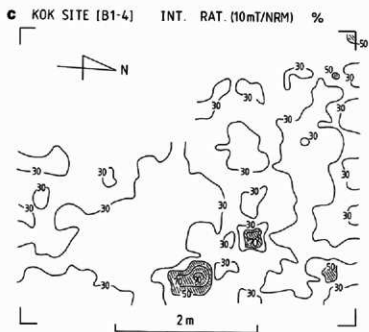


Fig. 90 国領遺跡 B-1-IV DEMAG. (10mT) INT. E-4A/m

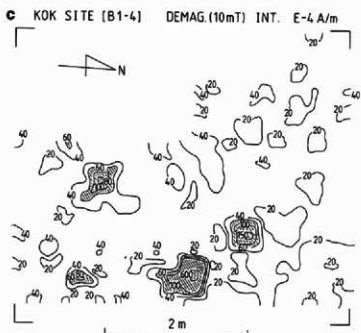


Fig. 91 国領遺跡 B-1-IV INT. RAT. (10mT/NRM) %



### 3 国領遺跡のサヌカイト原産地分析

薬科哲男・東村武信

Tab.10 国領遺跡出土のサヌカイト製石器・石片分析結果

資料番号	元素比							
	K/Ca	Ti/Ca	Rb/Sr	Zr/Sr	Fe/Sr	Y/Sr	Mn/Sr	Nb/Sr
20693	.230	.214	.205	.531	4.577	.257	.047	.000
20694	.255	.232	.220	.613	4.619	.085	.082	.020
20695	.247	.234	.220	.590	4.490	.076	.056	.000
20696	.582	.313	.339	1.042	3.082	.047	.028	.005
20697	.251	.229	.207	.620	4.469	.044	.018	.000
20698	.263	.232	.198	.572	4.310	.070	.065	.000
20699	.493	.281	.376	.793	3.871	.077	.060	.048
20700	.252	.235	.308	.572	4.448	.051	.074	.000
20701	.254	.229	.187	.569	4.345	.040	.032	.016
20702	.257	.231	.188	.568	4.404	.094	.046	.000
20703	.639	.305	.408	.857	3.703	.058	.032	.069
20704	.253	.229	.190	.548	4.687	.064	.042	.000
20705	.325	.232	.418	.824	5.797	.085	.068	.069
20706	.643	.289	.460	.848	3.745	.000	.034	.000
20707	.255	.234	.264	.571	4.666	.044	.055	.031
20708	.254	.230	.279	.597	4.688	.049	.079	.000
20709	.247	.229	.204	.587	4.440	.025	.014	.000
20710	.259	.228	.269	.615	4.939	.052	.064	.000
20711	.432	.283	.351	.916	3.643	.013	.066	.068
20712	.473	.277	.296	.929	3.434	.016	.049	.000
20713	.254	.228	.161	.535	4.881	.086	.068	.000
20714	.251	.226	.274	.579	4.617	.054	.101	.014
20715	.619	.290	.396	.754	4.208	.098	.063	.000
20716	.476	.268	.372	1.060	3.706	.000	.087	.000
20717	.255	.234	.211	.574	4.804	.000	.067	.000
20718	.470	.268	.348	1.012	3.741	.000	.048	.000
20719	.626	.319	.335	1.020	3.449	.041	.050	.000
20720	.249	.226	.206	.560	4.423	.190	.062	.000
20721	.290	.205	.211	.480	4.136	.041	.060	.000
20722	.249	.237	.203	.549	4.534	.110	.071	.017
20723	.247	.223	.277	.612	4.927	.281	.000	.000
20724	.480	.271	.302	1.005	3.600	.072	.050	.000
20725	.466	.294	.334	.857	4.217	.164	.082	.000
20726	.250	.228	.200	.584	5.471	.000	.085	.000
20727	.267	.229	.246	.464	4.662	.087	.111	.000
20728	.482	.267	.274	.937	3.512	.304	.068	.000
20729	.236	.225	.204	.578	4.631	.028	.075	.000
20730	.250	.233	.256	.568	5.047	.000	.057	.000
20731	.638	.290	.336	.667	4.190	.000	.098	.000
20732	.257	.229	.419	.462	6.263	.000	.032	.000
20733	.325	.243	.409	.853	4.753	.037	.055	1.910
20734	.643	.337	.425	.999	3.939	.000	.105	.000
20735	.467	.271	.332	.879	3.959	.000	.130	.000
20736	.376	.224	.220	.879	5.699	.000	.104	.000
20737	.619	.341	.245	.763	3.134	.358	.035	.000
20738	.248	.226	.000	.693	5.471	.000	.066	.000
20739	.464	.266	.463	1.012	4.230	.000	.127	.000

Tab.11 国領遺跡出土のサヌカイト製石器・石片の原産地推定結果

資料番号	名称・位置・層位	時代(伴出土層)	原産地(確率)	判定	遺物名	試料提供者
20693	1 005	縄文時代早期			有舌尖頭器	兵庫県教育委員会
20694	2 026	〃	二上山(1%)	二上山	〃	〃
20695	3 028	〃	〃(33%)	〃	〃	〃
20696	4 A-I-III	〃	岩屋第2群(0.1%)	岩屋	〃	〃
20697	5 8706-698	〃	二上山(10%)	二上山	楔形石器	〃
20698	6 8706-827	〃	〃(9%)	〃	剥片	〃
20699	7 8706-508	〃	岩屋第1群(D <sup>2</sup> =121)	岩屋	〃	〃
20700	8 8706-434	〃	二上山(D <sup>2</sup> =171)	二上山	磨面縁石器	〃
20701	9 8706-734	〃	〃(2%)	〃	尖頭器調整剥片	〃
20702	10 8706-1776(3209)	〃	〃(0.1%)	〃	スクレイパー	〃
20703	11 8706-944	〃	岩屋第1群(D <sup>2</sup> =110)	岩屋	剥片	〃
20704	12 8706-526	〃	二上山(0.2%)	二上山	二次加工のある剥片	〃
20705	13 8706-302	〃			剥片	〃
20706	14 8706-021	〃			二次加工のある剥片	〃
20707	15 8706-454	〃	二上山(D <sup>2</sup> =48)	二上山	尖頭器調整剥片	〃
20708	16 8706-1067(3194)	〃	〃(D <sup>2</sup> =80)	〃	剥片	〃
20709	17 8706-023	〃	〃(11%)	〃	碎片	〃
20710	18 8706-393	〃	〃(D <sup>2</sup> =75)	〃	尖頭器調整剥片	〃
20711	19 8706-137	〃	白峰(D <sup>2</sup> =80)	岩屋	碎片	〃
20712	20 8706-109	〃	蓮光寺(3%)	〃	尖頭器調整剥片	〃
20713	21 8706-827	〃	二上山(D <sup>2</sup> =102)	二上山	剥片	〃
20714	22 8706-1049	〃	〃(D <sup>2</sup> =67)	〃	碎片	〃
20715	23 8706-489	〃	岩屋第1群(0.1%)	岩屋	〃	〃
20716	24 8706-464	〃	岩屋第2群(D <sup>2</sup> =96)	〃	〃	〃
20717	25 8706-027	〃			尖頭器調整剥片	〃
20718	26 8706-176	〃	岩屋第2群(0.1%)	岩屋	有舌尖頭器	〃
20719	27 8706-264	〃			碎片	〃
20720	28 8706-740	〃			〃	〃
20721	29 8706-829	〃	二上山(D <sup>2</sup> =43)	二上山	〃	〃
20722	30 8706-203	〃	〃(D <sup>2</sup> =72)	〃	〃	〃
20723	31 8706-1045(3124)	〃			〃	〃
20724	32 8706-058	〃	園分寺(1%)	岩屋	〃	〃
20725	33 8706-175(3035)	〃			〃	〃
20726	34 8706-606	〃	二上山(D <sup>2</sup> =115)	二上山	尖頭器調整剥片	〃
20727	35 8706-486	〃	〃(D <sup>2</sup> =99)	〃	碎片	〃
20728	36 8706-452	〃			〃	〃
20729	37 8706-1045(3125)	〃	二上山(13%)	二上山	〃	〃
20730	38 8706-512	〃	〃(D <sup>2</sup> =66)	〃	押圧剥片	〃
20731	39 8706-132	〃			剥片	〃
20732	40 8706-622	〃			〃	〃
20733	41 8706-142	〃			〃	〃
20734	42 8706-271	〃			〃	〃
20735	43 8706-482(3048)	〃			〃	〃
20736	44 8706-476	〃			〃	〃
20737	45 8706-527	〃			〃	〃
20738	46 096	〃			〃	〃
20739	47 8706-480	〃			〃	〃

## 4 国領遺跡出土鉄滓と鍛造刺片の金属学的調査

大澤正己

**概要** 平安時代後期後葉から室町時代前半に取まる炉（SK01）より出土した国領遺跡出土の碗形状鉄滓及び鉄滓表面に付着した鍛造刺片を調査して次の事が明らかになった。出土鉄滓は、鉄器製作に際して排出された鍛練鍛冶滓に分類される。鍛造刺片は、赤熱鉄素材を鍛打した際に表面酸化膜が剝離したもので、鍛冶作業を証明する重要遺物である。

**いきさつ** 国領遺跡は、兵庫県水上郡春日町国領字蓮町他に所在する。兵庫県教育委員会では、中世の鉄器生産の実体を解明することを目的として、当方に出土遺物の専門的調査の依頼があった。

### 調査結果

#### 蓮町II地区旧河道出土鉄滓 R-901

**肉眼観察** 鍛冶炉の炉底に堆積した碗形状鍛冶滓である。表面は小豆色被膜に覆われ、肌は荒れている。

**顕微鏡組織** Photo.1 に示す。鉱物組成は白色粒状のヴスタイト（Wüstite: FeO）が凝集し、粒間におおむねファイヤライト（Fayalite:  $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ ）が析出する。鍛練鍛冶滓（小鍛冶滓）の晶癖を呈する。

**ピッカース断面硬度** 鉱物組成同定のためヴスタイトの硬度測定を行った。硬度値は421 Hvである。やや低目であるが文献硬度値が450~500 Hv<sup>1)</sup>であるので白色粒子状結晶はヴスタイトと確定できる。

**化学組成** 全鉄分（Total Fe）が65.9%と多く、酸化第1鉄（FeO）67.1%、酸化第2鉄（ $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ）19.69%の割合である。ガラス質成分の造滓成分（ $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$ ）は少なく9.37%、二酸化チタン（ $\text{TiO}_2$ ）0.12%、バナジウム（V）0.004%と少ない。純度の高い鉄素材の鍛冶であったと推定される。

#### 旧河道3層出土鉄滓 R-902

**肉眼観察** 碗形状鉄滓の1/4程度の破片である。表皮は黄褐色を呈し、肌は粗鬆である。裏面は青灰色の粘土を付着する。

**顕微鏡組織** Photo.2 に示す。鉱物組成はヴスタイトとファイヤライト、それに基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。

**化学組成** ヴスタイトの品出量が少なかった様に、鉄分が低目でガラス質成分が高目となる。全鉄分（Total Fe）が37.8%に対して、ガラス質成分は44.45%、二酸化チタン（ $\text{TiO}_2$ ）0.15%、バナジウム（V）0.002%と低目である。これも鍛練鍛冶滓成分である。

#### R-901、R-902 鉄滓表面付着鍛造刺片 R-903

**肉眼観察** 2mm前後不定形の青味を帯びた薄膜片（厚み0.1~0.5mm）である。鍛冶に際して赤熱鉄素材の表面から鍛打によって剝落した酸化膜。

**顕微鏡組織** Photo.3 に示す。鉱物組成はヴスタイトの凝集体で、粒界がさだかでない。肉厚は0.1mmから0.5mmまでがある。鉄素材の表面酸化膜なので全鉄分（Total Fe）が、60~70%を占める。ガラス質成分は2~3%以下となる。

**ピッカース断面硬度** 白色凝集組織の硬度値は468 Hvである。文献硬度値の450~500 Hvの範囲内に収まるので、ヴスタイトと同定できる。

まとめ 国領遺跡蓮町II地区より出土したSK01は、鍛冶炉の炉底に堆積生成される碗形鉄滓が出土したのと、鍛造剥片の確認から、小鍛冶段階の炉と推定される。

注

1. 日刊工業新聞社「焼結組織写真および識別法」1968

Tab.12 供試材の履歴と調査項目(国領遺跡)

試料 番号	試料	出土位置	外観	推定年代	計測値		調査項目		
					サイズ(mm)	重量(g)	顕微鏡組織	ピットレス 断面観察	CMA
R-901	鍛錬鍛冶滓	蓮町II地区田河通3	小豆色炭層に覆われた碗形 鍛冶滓炭層底面	中世	40×55×20	120	○	○	○
R-902	※	田河通3、3層上面	碗形滓の1/4破片、黄褐色の粗粒表面 肌。表面黄褐色粘土層	※	50×40×20	75	○		○
R-903	鍛造剥片	同上	碗形滓上面に付着 不定形	※	不定形薄層		○	○	
R-892	ガラス質滓 (碗形心?)	同上	緑黄色を呈し、本炭層を覆う ガラス質滓。鉄粒付着(少量)	※	25×28×13	10	○		○
R-893	ガラス質滓	同上	黒色ガラス質滓(中層)	※	45×80×20	32	○		○

Tab.13 化学組成

試料 番号	全鉄分 (Total Fe)	全炭素 (Total C)	酸化 鉄1鉄 (FeO)	酸化 鉄2鉄 (Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	二酸化 珪素 (SiO <sub>2</sub> )	酸化 アルミ ニウム (Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	酸化 カルシ ウム (CaO)	酸化 マグネ シウム (MgO)	酸化 ナトリウ ム (Na <sub>2</sub> O)	酸化 カリウ ム (K <sub>2</sub> O)	酸化 マンガン (MnO)	二酸化 チタン (TiO <sub>2</sub> )	酸化 クロム (Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	硫黄 (S)	五酸化 リン (P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> )	炭素 (C)	バナジ ウム (V)	銅 (Cu)	渣滓 成分 Total Fe	TiO <sub>2</sub> Total Fe	注	
R-901	65.9	—	67.1	19.69	6.82	1.82	0.24	0.25	0.18	0.06	0.08	0.12	0.02	0.042	0.093	0.07	0.004	0.003	9.37	0.142	0.002	
R-902	37.8	—	36.9	13.03	36.3	4.94	1.84	0.66	0.42	0.29	0.14	0.15	0.01	0.030	0.166	0.11	0.002	0.006	44.45	1.176	0.004	
R-892	7.31	—	4.31	9.66	66.3	10.11	4.71	0.96	Zn Ni	Sn Ni	0.33	0.53	0.01	0.015	0.21	0.37	0.014	0.045	62.06	11.229	0.073	
R-893	8.28	—	5.17	6.24	69.3	9.84	3.71	0.88	Zn Ni	Sn Ni	0.14	0.52	0.01	0.006	0.13	0.13	0.011	0.034	83.73	9.982	0.062	

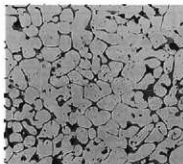


Photo.1 鍛錬鍛冶滓 ×100



Photo.2 鍛錬鍛冶滓 ×100

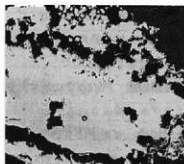


Photo.3 鍛造剥片 ×100

## VIII 結 語

### 縄文時代創前期の石器群

国領遺跡の石器群は、近畿地方では初めて、有舌尖頭器を含む縄文時代創前期の石器群の全容を明らかにし、また、共伴する木葉形尖頭器の製作工程を明らかにした点で評価されよう。さらに、狭い範囲の調査ながら、石器製作址を含む遺跡の構造が把握されたことも大きな成果であった。

一方で、土器の出土が見られなかったため、編年上の位置づけには、困難が伴う。

近畿地方では、有舌尖頭器は縄文時代早期の神宮寺式系押型文土器のある段階までは残存することが知られている<sup>2</sup>。

国領遺跡では、わずかに1点ながら石鏃が出土しているが、近隣地域では、隆起線文系土器の段階ですら石鏃が出現している。石鏃の組成率は、神宮寺式系土器の段階では国領遺跡に比べ飛躍的に高くなって、主体的狩猟具となっており、国領遺跡での組成率の低さはより古い様相を示すものであろうか。

以上のような点から国領遺跡の石器群は、神宮寺式系土器より古く、隆起線文系土器以降の段階と考えておきたい。

遺跡の構造的把握という点では、不十分な分析ながら、遺跡を2分する構造が浮上してきた。

ブロック1を中心とした、石器密度の高い領域と、その北側にまとまるブロック2北半のデボ状の尖頭器未製品集中を核とした領域である<sup>2</sup> (Fig. 92)。

遺物密度と器種から見た両領域の差は歴然としている。スクレイパー類、使用痕のある剥片の分布は尖頭器類のような差は見られないが、使用痕のある剥片の分布が、最も遺物密度の高い領域には稀薄であることは注視してよからう。

ブロック1の南西にも、台石状の配石、有舌尖頭器の分布が見られることから、この付近にも生活の領域があったものかもしれない。

今回の調査成果の中で注目されるのは、サヌカイト製石器である。石材の占める割合は、全体の3%と低いものの、すべての有舌尖頭器がサヌカイト製の搬入品であるということは重要であろう。

さらに、二上山産と淡路島岩屋産のサヌカイトがともに含まれるという事実は、有舌尖頭器を保有し

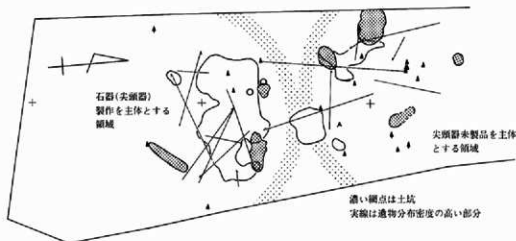


Fig. 92 縄文時代創前期の空間利用想定図

た集団が、大阪平野および淡路島北部から、丹波山地までの広範な領域を射程に入れた生活領域を持っていたことを示すものであろうか。

石材の移動（あるいは交換か）を軸とした、当該期の集団の動態の把握をおこないうる、一つの典型的な事例として、今後、瀬戸内沿岸地域での当該期石器群との比較検討を行うことが、重要な課題となってくるであろう。

#### 中世の国領遺跡について

中世の国領遺跡は、掘立柱建物址を中心に土坑、木棺墓、溝等の遺構で構成されている。国領遺跡の存続期間は、おおよそ平安時代後期後葉から室町時代初頭（12世紀前葉～15世紀前半）と理解している。

各遺構の時期を整理すると以下のとおりである。

##### I期（平安時代後期後葉～鎌倉時代前半）

この時期に該当する遺構は、井森杉地区より出土した掘立柱建物址群、土坑等である。これらの遺構群はさらに3期の小期に分けられる。

- 1小期（12世紀前葉～中葉頃）SB03・08が該当する。
- 2小期（12世紀後葉頃）SB04・05が該当する。
- 3小期（13世紀前葉頃）SB06・07、SK08・09・11～20が該当する。

##### II期（南北朝～室町時代前半）

蓮町I地区、旧河道2、SD01・02、および柱穴群、蓮町II地区のSB01・02、あるいはSK02～05の木棺墓・土壇群も並行する可能性がある。

中世の国領遺跡は全面調査区南側の微高地上（井森杉地区）で開始される。この微高地上で最初に建てられた建物址は南北方向に棟軸をもつ2×3間の小規模の建物（SB03）で、その後、SB03の南側に東西方向に細長い建物（SB08）が建てられ、一時期両建物は併存すると考えている。1×4間以上の細長い建物は、その形態から、居住の建物址とは理解しにくく、むしろ、家畜の飼育小屋ないしは、収納スペースとして理解すべきのものであろう。12世紀後葉になると2×3間前後の規模の建物（SB04・05）がやはり、東西方向と南北方向に棟軸をもつ形で出現する。この両建物址の柱穴内からは、瓦器椀（SB04・P24）、土節皿・瓦器小皿（SB05・P35）が柱穴内に埋置された状態で検出している。とくにSB05・P35は、これらの土器の上に扁平な河石で蓋をした状態で検出している。またこのような土器の出土状態はSB03・P5にも認められる。おそらくは、この両建物を廃棄する段階で柱穴内に埋置されたと推察され、建物の廃棄に伴う祭祀的性格のものとして理解できる。

このような土器の出土は、第3小期の建物には認められず、第1・2小期の建物に限られる。この違いは、第3小期以降の時期に比定されるSX01（廃棄遺構）の存在を考慮すると建物の廃絶状況の違いによるものであろう。

第3小期の建物は、従来の建物より大型のものが出現する。建物の棟軸方位も、これまでとは異なり、東西方向にもつ。これらの建物のうちSB07は4×4間以上の建物であったが、北側1間分を縮少し、3×4間前後の建物に変化する。この建物の変化に伴い、SB07身舎内の北辺にあったSK15・16・19・20の焼土坑が、身舎内西辺に移転する状況が看取れる。これらの焼土坑内には、多量の炭・灰が混入し、土坑の内容に共通した点をもつ。この様な点から、土坑の性格を判断するに、ひとつの可能性として、電

の下部構造が考えられる。また、SB07 と伴存する SB06 もやはり西辺身舎に SK23・24 の焼土坑をもち、国領遺跡では、第 3 小期から身舎内に竈をもつ建物が出現する可能性を考えておきたい。

II 期になると、遺跡の中心は、微高地の先端部、蓮町 I・II 地区へ移行する。I 期と II 期の空白期には、井森杉・蓮町 I・II・石風呂各地区に旧国領川（旧河道 1～4）が流れていたと推察される。この旧河道の埋没が進んだ段階で蓮 II 地区では、鍛冶炉（SK01）、木棺墓等（SK02～05）、建物址（SB01・02）、蓮町 I 地区では、溝（SD01・02）および建物（柱穴群の存在）の遺構群が出現し、集落を構成している。これらの遺構のなかでも、鍛冶炉は部分的な検出であったが、炉壁が多量に出土し、上部構造をもつ炉と推定される。これらの炉壁の接合を試みたが、遺存状況が悪く、炉体の構造を知るには至らなかった。蓮町 I 地区で検出した地割り溝の機能をもつと推定している SD02 は、旧河道と連結しており、排水路としての機能も兼ねそなえていたと推察される。

以上が中世国領遺跡の概要である。遺構の状況説明のみに終止し、当地方における遺跡の位置付けまで至らなかった。蓮町 I 地区、II 地区の間は、近畿自動車道舞鶴線建設工事に伴って発掘調査が行われており、この成果を待って、当遺跡の性格を明らかにしていきたい。

#### 注

1. 東大阪市教育委員会 『神並遺跡 II』1987  
福井県立若狭歴史民俗資料館 『岩の鼻遺跡 II』—1986 年度調査概報—1987
2. 石器出土傾向図説は、クリーブ・オルトン著 小沢一雅・及川昭文訳 『数理考古学入門』（鎌山閣）1988 によった。  
先学諸兄の御批判をおおぎたい

## Summary

### THE KOKURYO SITE

REPORT ON RESEARCH INTO ARCHAEOLOGICAL PROPERTIES HYOGO PREFECTURE

Vol. 93 PUBLISHED BY THE BOARD OF EDUCATION OF HYOGO PREFECTURE

RESEARCH CENTER OF ARCHAEOLOGICAL PROPERTIES 1991

#### 1 Location and Environment

The Kokuryo site is situated in the western district of Tamba (Kasuga town, Hikami district), Hyogo prefecture. The site is located at the fan which is on the west of the River Kokuryo (the upper of River Yura). The River Yura runs through the Tamba and Tango (northern area of Kyoto pref.) and flow into the Japan Sea.

The height of the site is 108~111 meters above the sea level.

We found the settlement of the earliest Jomon (neolithic) age and the later Heian, ~ early Muromachi period (12~15c.)

#### 2 Process of Excavation

The Kokuryo site was excavated in 1986~87. The proposed improvement of the River Kokuryo, we necessitated excavation on account of the foundation of the bank. According to the geographical features, the area of excavation was divided 4 districts (the Imorisugi, Hasumachi I-II and Ishiburo district).

#### 3 Sites and Artifacts

##### a. Jomon age

The settlement of the incipient Jomon age was discovered on Imorisugi district. We excavated 4 clusters of relics (stone implements) and 7 holes. And 1,532 artifacts were discovered in those clusters and holes.

The assemblage of the relics consists of leaf-shaped points, tanged-points, an allow-head, scrapers, retouched flakes, flakes with micro-flaking, cores, flakes (point-flakes), and chips.

We could stick some of these stone implements. As a result of the stucked relics, we could understand the process to make leaf-shaped points.

Most of artifacts were made of Chert and occasionally Sanukite (a kind of Andesite). We can distribute Chert around the site. But Sanukite is only distributed around the Mt. Nijo and the northern area of the Awaji Island. And we supposed that these stone tools (made of Sanukite) were carried from those area.

##### b. The later Heian ~ Kamakura, and early Muromachi period.

At the Imorisugi district, we found remains of building (with pillars embedded directly in the ground.) fire-pits and many earthenware (12c.).

At the Hasumachi district, we also found remains of building, graves, with wooden cottin blacksmithing hearth, and remain of a river (13~15c.).

At the Ishiburo district, we discovered remains of building and ditches.

##### c. Natural scientific analysis

At the Kokuryo site, natural scientific analysis were operated by the scientists.

##### 1. Remains of Jomon age

###### a. Volcanic ash

###### b. Paleomagnetism

###### c. Sourcing of Sanukite implements (X-ray diffraction analysis)

###### d. Ancient lipids

##### 2. The later Heian, Kamakura, Muromachi period

###### e. Iron slags

In consequence of the analysis on volcanic ash, we explained that the layer of the earliest Jomon period was piled up under the K-Ah ash (about 6300 yrs. B.P.). And as a result of the paleomagnetism analysis, we detected fire places that could not detect by the naked eyes.

#### 4 Conclusion

In consequence of archaeological excavation and natural scientific analysis, we got important data.

In the Kinki district, we had not know the industry of the stone tools at the incipient Jomon age. But the discovery of the Kokouryo site we got important materials to understand the industry.

By dint of analysis about many point-flakes, we could understand the process to make leaf-shaped points.

We explained that Sanukite which used for material to make tanged-points, were carried from Mt. Nijo and Iwaya area (northern area of Awaji Island).

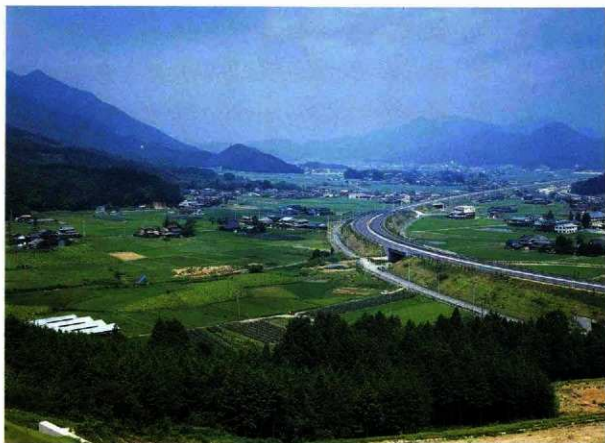
We could not discover an earthenware on this excavation. But judging from the industry of the stone tools, we consider that the people lived in the Kokuryo site, already had earthenware.

We also explained the development process in the later Heian, Kamakura, early Muromachi period. And on the discovery of blacksmithing hearth, we understand the technology of the iron manufacture in the Kamakura age.

(MURAKAMI Yasuki, KUBO Hiroyuki)



# PLATE



調査地遠景(東から)



SK-104 完掘状況(東から)



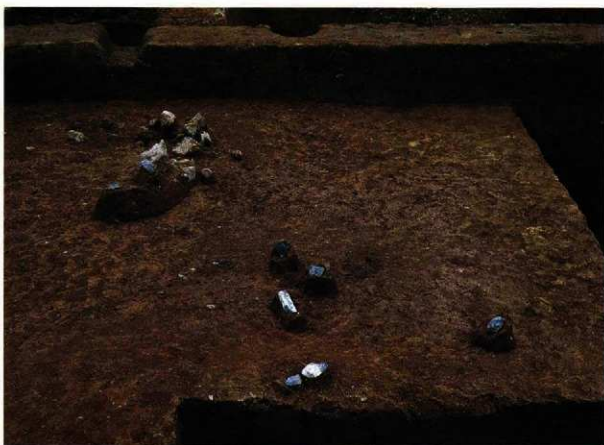
縄文時代草創期の石器 1



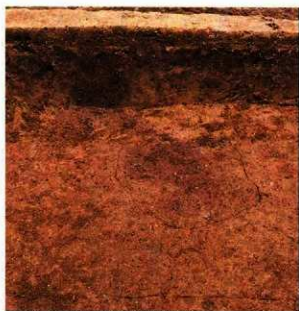
縄文時代草創期の石器 2



1) 土層断面(B-2-II グリッド北壁)



2) ブロック 2 北半 尖頭器未製品集中部(南から)



1) SK-101 検出状況(南から)



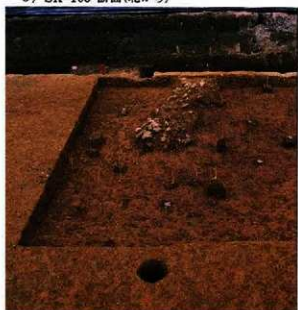
2) SK-101 完掘状況



3) SK-105 断面(北から)



4) SK-102 断面(南から)



5) SK-104 検出状況(東から)



6) SK-104 断面(南から)



1) ブロック1 (西から)



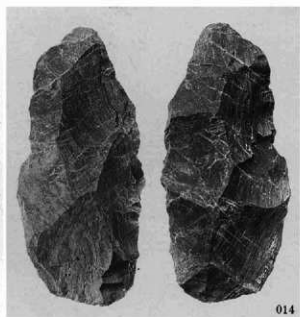
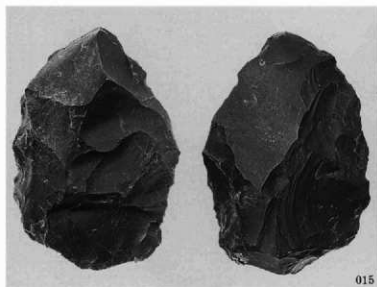
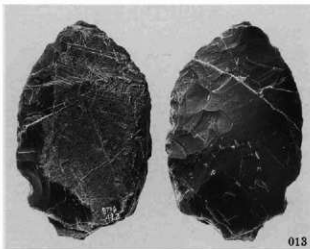
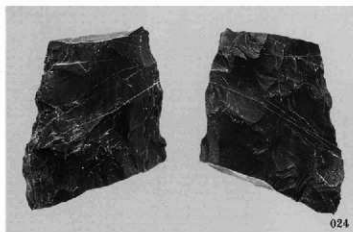
2) ブロック2.3.4 (西から)



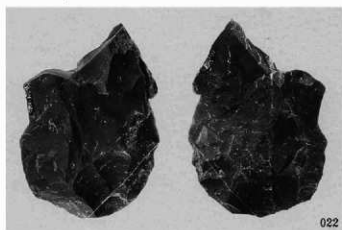
1) ブロック1 南西部配石 a (南から)



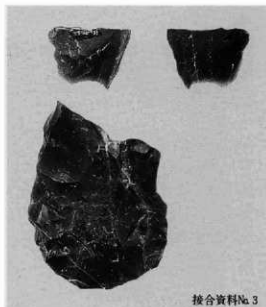
2) SK-103 (東から)



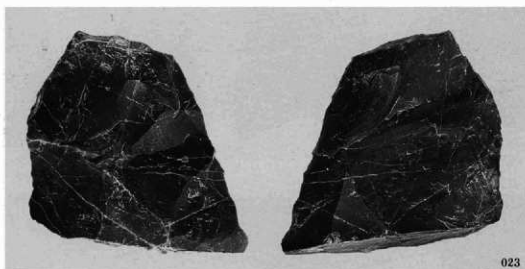




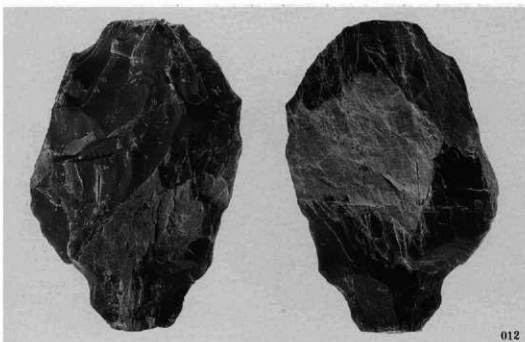
022



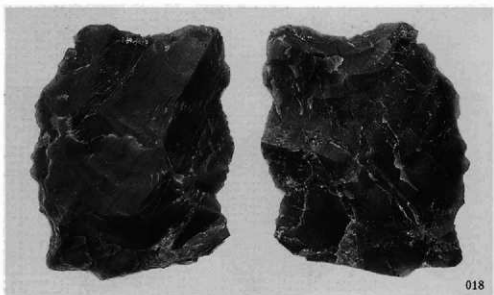
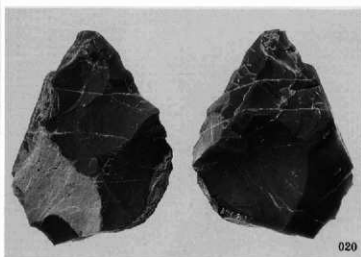
接合資料No.3

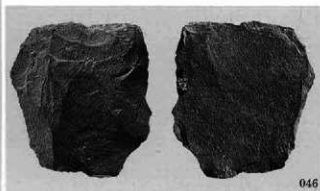
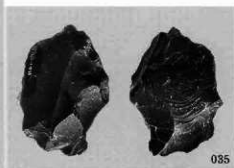


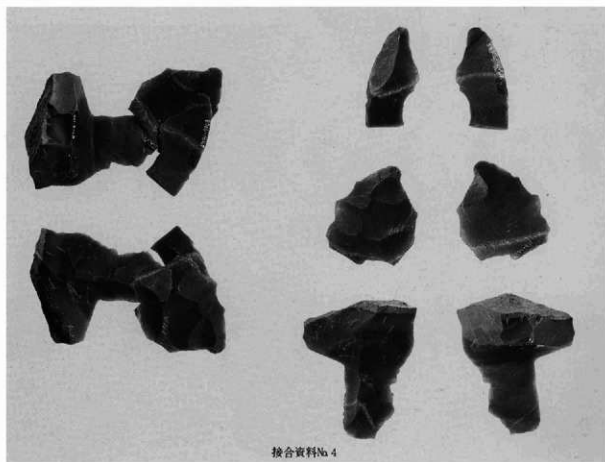
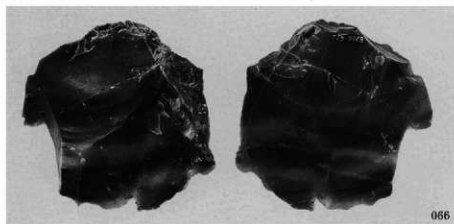
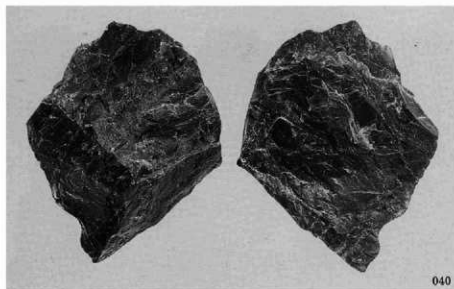
023

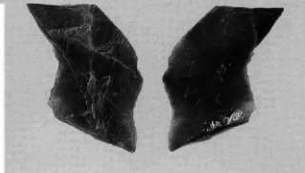
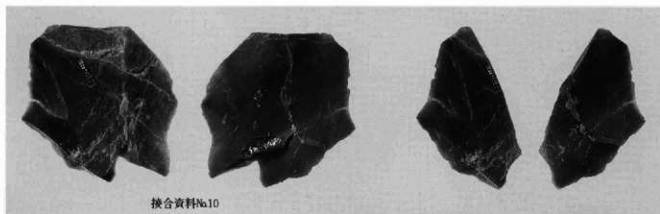
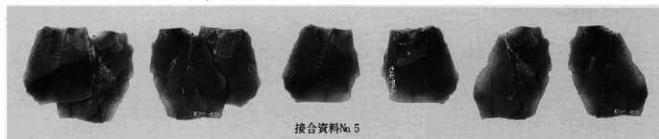


012











1) 石風呂地区全景(南から)



2) 石風呂地区検出柱穴群(北から)



1)

1) 蓮町I地区全景(南から)



2)



4)



3)

2) SD02 近景(南西から) 3) 旧河道2 土層断面(西から) 4) SD01 近景(南から)



1)

1) 蓮町Ⅱ地区全景 (北から)



2)

2) SK02~05 (北から)・旧河道3 検出状況(北から)



3)

3) SK01~05・旧河道3 調査後(北から)



4)

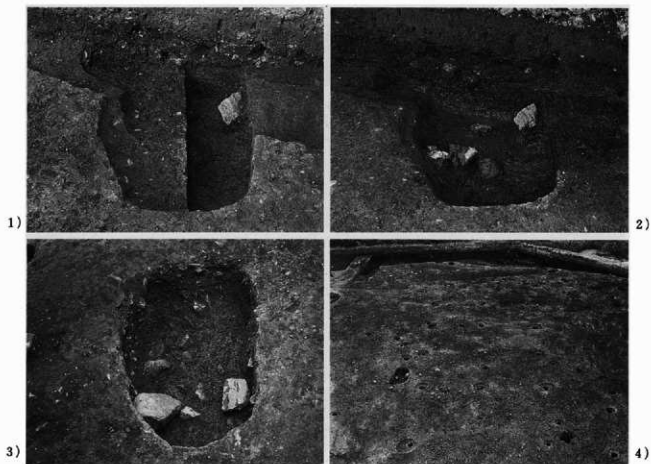
4) SK02・03 近景(南から)



5)

5) SK04 近景(南から)

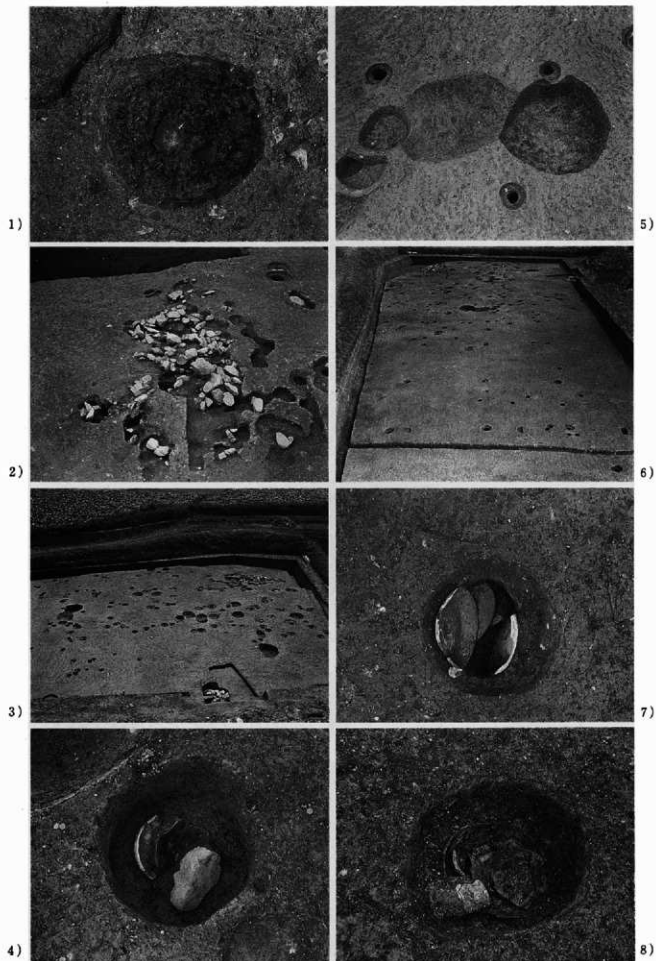




1) SK01 (鍛冶炉) (西から)    2) 同完掘状況(西から)  
3) SK05 検出状況(南から)    4) SB01 検出状況(東から)



5) 井森地区中世面全景 (南から)



左列1～4) SK17 (北東から)、SX01 (北から)、SB04・08 (西から)、SB04・P20 (北東から)  
 右列5～8) SK23・24 (南から)、掘立柱建物址群(北から)、SB03・P5 (北から)、SB04・P24(北西から)

1) 確認調査・蓮町Ⅰ地区

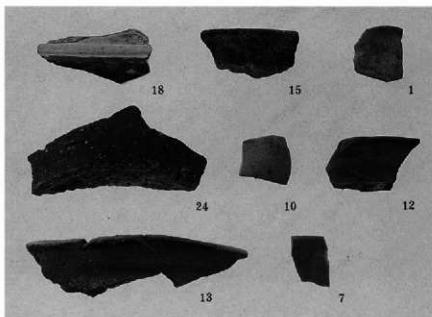
1: 坪-15

2: 坪-25

24: SD01 7

10・15・18: SD02

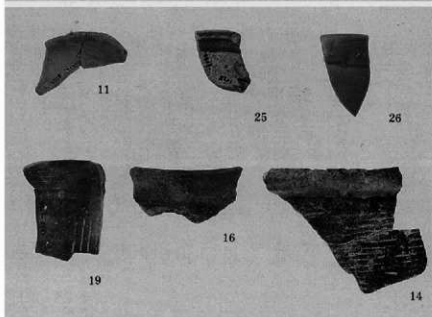
12・13: 旧河道2



2) 蓮町Ⅰ地区

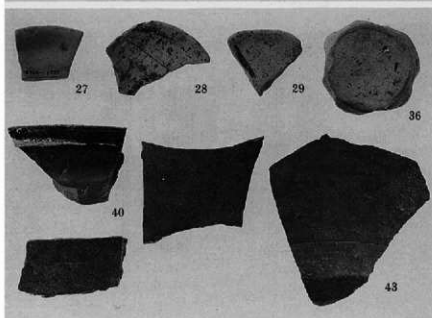
11・14・16・19・

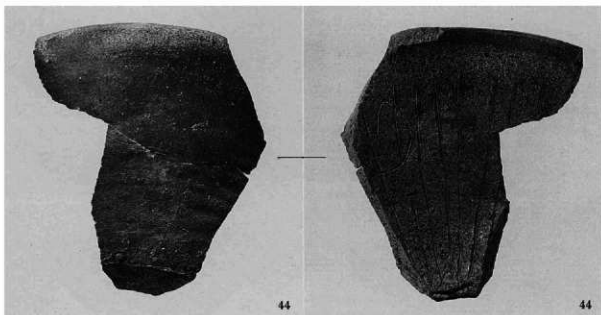
25・26: 旧河道2



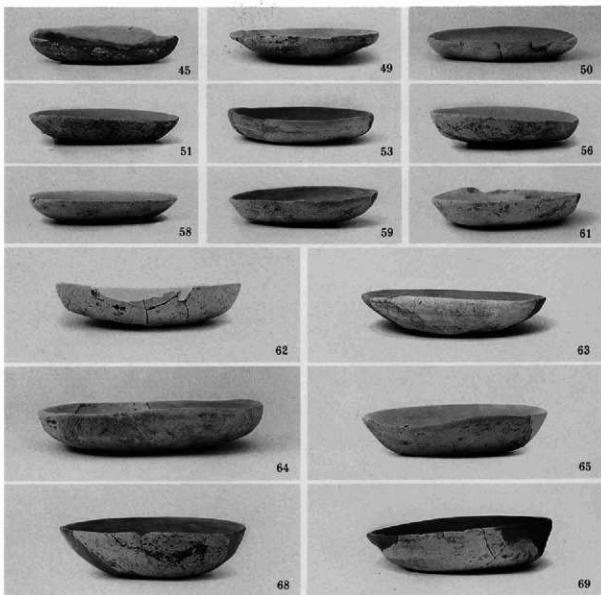
3) 蓮町Ⅱ地区

旧河道3

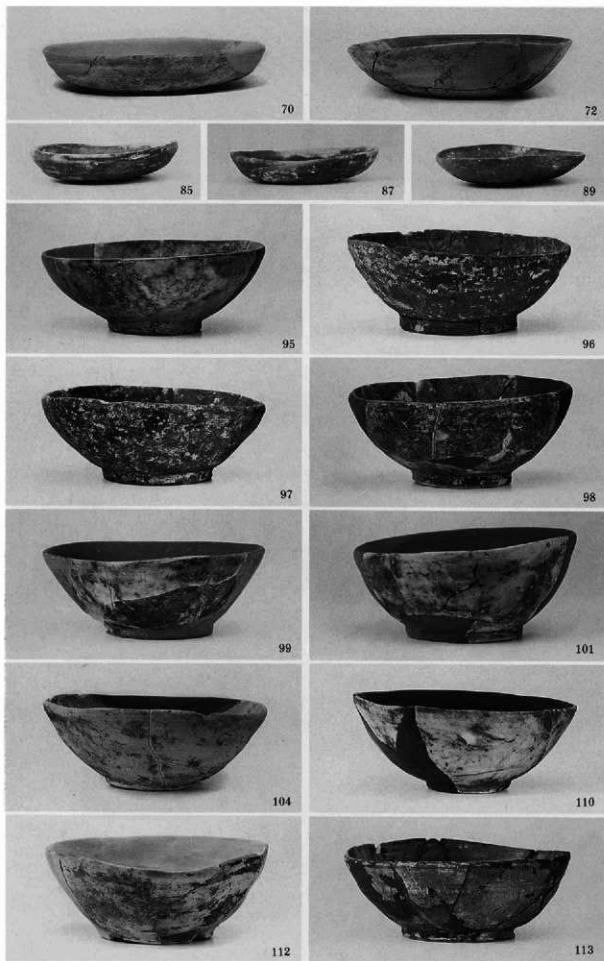




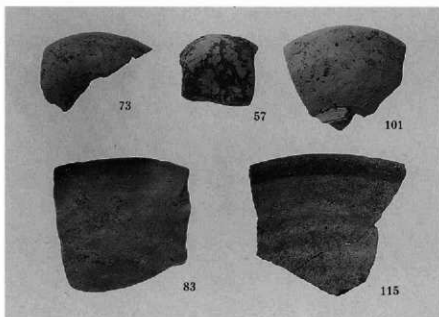
蓮町Ⅱ地区 SB01・P4



井森杉地区出土土器 51: SB03、64・69: SB04、56・53・61・59・64・63: SB05、  
49: SB07、56: SK12、58・65: SX01、45: P85、62・68: 遊離土器

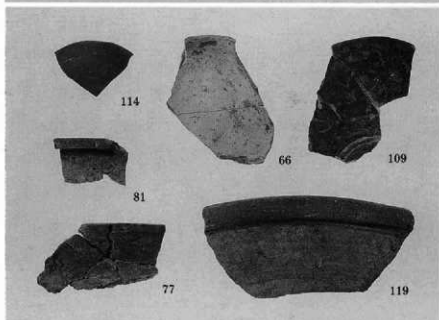


70・72：SB03、95～98：SB04、89：SK12、110：SK17、99・101・104・112・113：SX01  
87：P84、85：P85



115 : SK16

57・73・83・101 : SX01

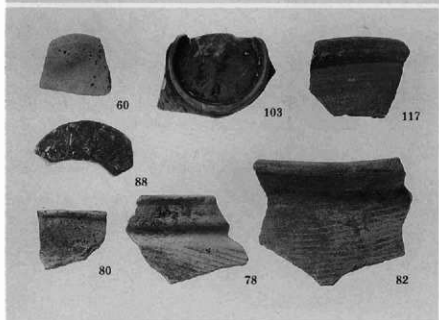


77・119 : 遊離土器

66 : SB04

81・114 : SX01

109 : SB08



60・78 : 遊離土器

103 : SB05

117 : SB07

88・82・88 : SB08

## 国領遺跡

平成3年2月 発行

- 編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所  
〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5  
TEL. (078) 531-7011
- 発行 兵庫県教育委員会  
〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号
- 印刷 福田印刷工業株式会社  
〒658 神戸市東灘区魚崎西町4丁目6番3号